
強き燕は二度羽ばたく

龍々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強き燕は二度羽ばたく

【Nコード】

N3718Y

【作者名】

龍々

【あらすじ】

もしもピアノが弾けたなら…では無く、もしも海燕が生きていたなら、というお話。
外伝にて海燕が復活する過程の様な物が書かれていますので、是非そちらも・・・

今作品の海燕は虚化します。

オリジナル技使います。

卍解します。

微妙にカリスマ放ってます。

原作破壊します。

その様な海燕で良かったら是非この小説を読んでくださいまし。

キャラは崩壊しないように頑張りますが、もしかしたら崩壊してしまうかもです。

2 . 現在は第4章を失筆しております

失敗した筆と書いてしつぷいです。

原作でいう偽空座町決戦です。

どうぞ御覧になって下さい。

評価、感想共に待ってます

燕は再び羽ばたいた(前書き)

二次創作にて始めてのオリキャラが皆無な小説。
海燕カッコイイよ海燕。

海燕様キタ(。。(。！
それではどうぞ御覧下さい

燕は再び羽ばたいた

冷たい雨が激しく降り注ぐ中、小柄な女の死神の上に抱きしめる様に一人の男の死神が凭れ掛かる。

男の背には刀が貫いており、それを握るのは女の死神。

男の死神の名前は志波海燕、妻を虚に殺された拳句その虚に自分の体に乗っ取られていた。

そこを部下の朽木ルキアに開放されたのだが、それは死と同義だった。

「朽木い……俺の我儘に付き合わせてひでえ目に遭わせちまったな……わりい、きつかったろ……？」

海燕はルキアの頭を撫で、せめてもの謝罪を述べる。

「ありがとな……お陰で、心は此処に置いていける……」

海燕はその言葉を最後に体を地面に落とし、息絶える。

ルキアは海燕の名を叫んだ。

自分の心を襲う罪悪感を振り払うかのように。

現世で死んだ者は虚に墜ちた者を例外として、通常は死神の手によつてあの世、つまりは尸魂界へ送られるのだが、尸魂界で死んだ者は尸魂界を構築する霊子に分解される。

所が海燕はそれらの例に当てはまらなかった。

海燕の霊子は現世で再構築され、再び死神として蘇ったのだ。

「ここは……現世か？ どういう事だ？ 俺は死んだ筈だよな……」

海燕は訳が分からないと首を傾げる。

海燕は現在、現世の街中を歩いている。

ここは空座町という町で、現世駐在任務でも幾度か来たことがある。尤も、以前来た時は江戸時代かそこらだったので、初めて来た町といつても間違いでは無い。

そんな中、抑えてはいるが隊長各の霊圧が感じられた為、そこへ向かう。

「浦原……商店？」

「ハイハイ！その死神サン、何か御用で？」

いきなり男が後ろから現れ、海燕はそれに驚く。

そして店の中から黒猫が姿を現す。

そこまでなら普通の猫なのだが、その猫は話すことができた。

「お主……海燕かの？」

「うお！？化け猫！なんで俺の名前知ってたんだ！？」

「誰が化け猫か！！！」

化け猫、黒猫は鋭い爪で海燕の顔に三本線の傷をつける。

その様子に海燕の後ろに立っている男が苦笑いしたのはまた余談である。

燕は再び羽ばたいた（後書き）

海燕は僕がBLEACHの中でかなり好感度上位だったりします。

もう全てがかっこよすぎる！！

でも僕が書くとかっこよくないのは何故！？

それでは次回もお楽しみに

燕は朽ちる女と出会う（前書き）

タイトルでお察しかと思いますが、ルキアと再会します。
若干カイルキ気味。

あ、でもくっ付いてラブラブ、と言う訳ではありません。
海燕には嫁もいたしね・・・

燕は朽ちる女と出会う

店の店主の名前は浦原喜助。

以前護廷十三隊の十二番隊隊長を務めていた男だ。

そして黒猫は四楓院夜一という、隠密機動の元総司令官でもある。

勿論、本来の姿は猫ではなく、海燕や浦原と同じような人間の姿をしている。

尤も、彼らは人間ではなく、死神なのだ。

海燕が現世で生活を始めてから数週間、霊子の薄い現世でも問題なく生活する事が出来た。

因みに海燕は暫くの間浦原商店で居候をする事になっている。

さらに浦原から貰った滋養剤で霊圧を回復させ、現世でも尸魂界と同じ様に活動できる。

因みに滋養剤には髑髏マークが書いてあって、飲むのに戸惑ったのは失笑物である。

そして日々、虚退治をする中、死神と虚の霊圧がぶつかっている、即ち戦闘している事に気付く。

「……あ、死神の方やべえな」

海燕は斬魄刀、掬花を携え、その場に向かおうとするが、浦原によってそれを阻まれる。

浦原曰く、助けに行くのはもう少し経ってから、との事。

死神の霊圧は一瞬、薄くなったが、その後直ぐに最初より増幅して蘇る。

海燕は不思議に思いながらも、浦原はこれを待っていたのだと察する。

「さ、死神サンの元へいきましょつか！」

浦原はいつもの格好で海燕と共に霊圧がある場所へと向かった。

「あ、あなたは……」
気絶したオレンジ色の髪を生やした死神と白い着物を着た、力を失った死神。

その死神が海燕を見て、驚愕している。

海燕の方はその死神を見て、驚くと共に嬉しそうな表情を浮かべる。

「海……燕、殿？」

海燕の名を呼んだ死神の名前は朽木ルキア。

海燕の嘗ての部下であり、自分を虚の呪縛から救ってくれた、女の死神。

尤も、ルキアの方は自分が海燕を殺したという自責の念に駆られているのだが。

「久しぶりだな、朽木！」

笑顔で自分の名を呼ぶ海燕にますます困惑するルキア。

海燕はどう説明しようかと悩んでいる。

「まあまあ、積もる話は後にして、今はこの少年とその家族の皆さんの手当てをしましょうか、もちろん記憶置換も忘れずに」

海燕とルキアは浦原商店にて、互いの状況等を説明しあう。

海燕は尸魂界で絶命した後、現世で復活、ルキアは現世に駐在任務を言い渡された後、オレンジ色の髪をした靈感のある少年、黒崎一護と出会いその家族が虚に襲われて、ルキアも負傷して一護に霊圧を贈与し、今に至る。

「……海燕殿の説明が異様に短いのは気のせいでしょうか」

「あー、気にすんな、俺も今一自分の状況が良く分かってねえんだ」
そう言う海燕を見て、ルキアは突然ホロリと涙を流す。

海燕はルキアの頭を撫でた後、優しく笑いかける。

「申し訳ありませんでした……海燕殿！！」

ルキアは海燕の手を握り締め、海燕の生を実感する。

そして海燕はルキアの罪悪感を洗い流すようにルキアを抱きしめる。

「いいか、俺は虚に殺されたんだ。そして朽木は俺を救ってくれた恩人だ。朽木が気にする様な事は何一つねえよ。あの時、俺を救ってくれてありがとうな」

ルキアは海燕の言葉一つ一つに涙を流し、全てが救われた。

燕は朽ちる女と出会う（後書き）

海燕をカッコよく書けない……他の方の作品でみた海燕は感動するほどカッコ良かったんですけど……ああ、どうしてこうなった。

燕は護る者に修行を施す（前書き）

海燕と一護の初対面です。

一護は恋次と白哉の登場の時までに原作より強くするつもりです。

燕は護る者に修行を施す

ルキアの死神の力は現在、人間の青年、黒崎一護の中にある。本来なら半分の力を渡した筈だが、何故か全ての力が一護に渡ってしまった。

因みに原因は今の所一護の霊力が異様に高かったから、としか解っていない。

そしてルキアは一護に死神代行として働く事を承諾させた後、これから毎日特訓をしていく事になる。

だが、一護に修行を教えるのはルキアでは力不足、浦原では店の営業がある為忙しい。

すると当然

「今日からおめえに修行を教える志波海燕だ！よろしく！！」
と、なる訳である。

一護の反応は当然、誰だよ、となり、ルキアからは自分の上司、と説明される。

今一腑に落ちない一護だが、強制的に体から魂魄を抜かれ、死神の姿になる。

その後海燕も義骸を脱ぎ、死神の本体が現れる。

「さて、修行第一段階だが……先ず一護、おめえには“始解”を習得してもらおう！」

始解とは、死神の斬魄刀の一段階目の解放。

斬魄刀の持ち主によって様々な姿形があり、能力も様々。

その名の通り直接攻撃を行う直接攻撃系、特殊な能力が備わっている鬼道系と、様々種類がある。

「本当なら死神になったばかりの奴に始解はムズイんだけどな……」

おめえは霊圧たけえから、ま、大丈夫だろ！」

いい加減に言う海燕を見て一護呆れた表情を見せるが、次の光景を見て、表情が強張る。

「水天逆巻け…… 掬花！」

海燕は刀を頭上に上げ、両手で器用に回転させる。すると刀の形状が変化し、三又の槍になる。

「俺の斬魄刀は掬花、つってな、水を操る流水系の斬魄刀だ…… 斬魄刀は解号と名前を呼ぶことで本来の姿を現す…… 一護の斬魄刀はどんな能力なんだろうな？」

海燕が得意げに笑うと一護は少し感心する。

自分の刀がどんな物なのだろうかと少しドキドキしてしまったのは内緒の話だ。

一護は現在、胡坐をかいた膝の上に斬魄刀を置き、精神世界に入ろうとしている。

斬魄刀の始解に必要なのは対話と同調。

対話は斬魄刀の本体との会話、同調は本体との霊圧のシンクロを指す。

さらに斬魄刀との絆を深める事により、刀に眠る力が解放されていき、それは死神の鍛錬の一つでもある。

一護は精神世界の中でサングラスと黒いコートを着用した髭面の男性とで会おう。

一護は名前を聞くもその言葉の名前の部分だけノイズが掛かったように途切れ途切れになり、すっかりと耳に届かない。

「あんたが、俺の斬魄刀…… か？」

一護は男性に自身の刀であるかを確認する。

男性はコクリと頷き、再び自分の名を口に出す。

「私はざ…… つだ。お前と会おうのを楽しみにしていた、一護……」

「俺の名前をしってんのか？」

男性は再び頷き、自分が何であるかを話す。

「私はお前の力、そしてお前自身…… お前の知っている事は全て知っている。そしてお前の知らない事も……」

一護は男性の言葉に耳を傾けながら、この人物が自分の斬魄刀、力の源である事を理解する。

「なあ、名前は聞き取れねえけど、いつか俺があんたの名前を聞ける様になつたら力を貸してくれるか？」

「私はお前に力を貸すときは出し惜しみをしない。私の名前が聞こえたならば、いつでも力を貸してやるう……」

「……ってな事を斬魄刀は言っていたぜ？」

一護は男性と話した会話の一部始終を海燕に話す。

海燕は公園のテーブルに座りながら一護の話聞き、真剣な面持ちで相槌を打つ。

「ま、一回で名前が分かつたら誰でも死神になれらあな。そこまで会話出来ただけでも大したもんだ」

海燕は気さくに笑い、一護を好評価する。

一護は少し得意げになった後、ルキアの方を見る。

「で、あいつは何してんだ？」

ルキアは真剣かつ緊張しながら大声でホラー漫画を音読しており、その場に異様な空気を流していた。

一護は自分の体に、海燕は義骸に戻った後で休憩中。

そして一護の背後に忍び寄る黒い影が一つ。

「くつろさつき、くーん！！」

「ぎゃあ!？」

一護にいきなり声を掛け、驚かしたのは井上織姫という、一護のクラスメイト。

人間に扮して学校に通っているルキアは一瞬誰だか分からなかったが、一護に教えられ、どこぞのお嬢様の様にスカートの裾を上げて挨拶する。

「あら、井上さん、ご機嫌よう!」

「い、ご機嫌よう」

少々、というか大分天然の気がある井上はそれに釣られ、自分もスカート裾を上げて挨拶する。

一護が心の中で井上にツツコミを入れたのは仕方のない事だろう。

「あれ、そっちの人は？なんか黒崎君に少し似てるけど……」

井上は海燕を見て不思議に思い、その疑問を素直に述べる。

海燕は何を言おうか迷った後、似てるのは偶然で、自分は一護の昔の知り合い、と話す。

その様子から見て、嘘を付いているのはバレバレなのだが、井上には十分それで通じた様だ。

そしてルキアは井上の右ひざを見て、ある事に気付く。

「井上さん……その傷は……ちょっと見せてもらってもいい？」

ルキアはその傷を見て、険しい表情を浮かべる。

そして海燕の顔を見て、互いに頷き合う。

何がなんだかわから無い一護と井上はそろって首を傾げる。

一護は井上与別れた後、それぞれの家へと帰ろうとする。

海燕は浦原商店へ、一護は自宅へ。

この時、一護はルキアも海燕と共に行くのかと思っていたが

ルキアは何と一護の部屋の押入れの中にいた。

しかも妹のパジャマを勝手に着ながら。

「一護……虚だ!!」

突然、ルキアが飛び出し、一護の魂魄を抜く。

そして一護がいた場所には巨大な虚の手があり、虚はそのまま家の外へと逃げた。

「どういう事だ……今のは井上の兄貴だった……!!」

一護の部屋に沈黙が走った。

燕は護る者に修行を施す（後書き）

原作に生き返った海燕が加わるこの物語、
一護&恋次&ルキアの輪
の中に海燕が加わる訳ですよ。
妄想全開です！いやっほう！

燕は姫と巨人を助ける(前書き)

チャドと織姫の話。

燕は姫と巨人を助ける

一護とルキア、そして途中で合流した海燕が向かった先は何と井上の自宅。

ルキアの話から魂魄は、虚に堕ちた後に先ず身内の魂を食らうという事から虚、もとい井上の兄は先ず先に妹である織姫を襲うと予想する。

一護は相手がクラスメイトの兄であるという事から、斬る事に戸惑うが、海燕の話から戸惑いは決心へと変わる。

「虚を斬魄刀を斬るって事は罪を洗い流すって事だ。心を洗い流し、尸魂界にいける様にしてやるんだ。殺すんじゃねえ、昇華してやるんだよ」

井上の兄なら生前に大きな罪は犯していないはず、そう確信した一護は屋根を駆ける足のスピードを上げる。

一瞬、一護の背中に乗っていたルキアが振り落とされそうになったのには、海燕も思わず笑ってしまう。

井上の兄との戦闘の後、井上とその兄が和解し、兄は正気を取り戻した。

そして自分で刀を仮面に突き刺し、尸魂界へ昇華していった。

海燕は一護の修行の為、終始を見てるだけで終わり、井上と遊びに来ていた有沢竜貴に記憶置換を終えた後で一護の肩を強く叩く。

「兄貴の存在理由がなんたるか……いつちよ前な事言いやがって、この、この……」

海燕は一護の頭をロックし、拳骨を捻じ込む。

一護は井上の兄に兄弟で兄が何故先に生まれてくるかをこつ話した。兄は後から生まれてくる弟や妹を護る為に生まれてくる。

だから兄が妹に向かって“死ぬ”等とは間違っても言うな、と。

「でもよ、俺もそう思うぜ？兄貴が何で先に生まれて来たのかがよ

？」

海燕には妹と弟が一人ずついるという。

海燕曰く、どちらも口より先に手が出る頭の足りない馬鹿、この事だが、一護は密かに海燕も似たような物だと思った。

織姫の兄の一件が片付いたその数日後、一護達はさらなる事件に巻き込まれる。

一護はルキア、海燕と共に一体の虚を追いかける。名前をシュリーカーという、生前、連続無差別殺人という犯した根本から“悪”の外道だ。そしてさらにその虚が追っているのは茶渡泰虎という、一護の親友であり、通称をチャドという。

正確にはシュリーカーが追っているのはチャドが抱えているインコで、インコの体の中にはシバタユウイチという少年の魂魄が入っており、シュリーカーはその少年に三ヶ月間自分から逃げる事が出来たら母親を生き返らしてやる、という真赤な嘘を語る。

そしてシバタを助けに来た死神達を襲い食っていたという。

「野郎……とんでもねえ外道だな」

海燕はシバタの事を想い、思わず表情を険しくする。

「間違いなく奴は地獄に落ちるでしょう……」

ルキアの言う地獄に落ちる、とは一般の人間が言うような悪い事をするところの類では無い。

本当に落ちるのだ。

先日海燕が行ったように斬魄刀で虚を斬ると罪を洗い流し尸魂界へと送られる。

だが、洗い流せるのは虚になった後の罪であり、生前に大きな罪を起こした虚は地獄に引き渡す契約になっているという。

途中の道で一護は妹である夏梨を見つける。

「一護！お前はその娘を家に連れて行け！！あの外道野郎は……俺

がとつちめる!!」

海燕は義魂丸を飲み込み、義骸を脱ぎ去る。

そしてルキアと共にシュリーカーの下へと急ぐ。

「そーら、逃げる逃げるお!!早くしねえと俺のヒルが爆発するぜえ!!」

シュリーカーは舌の笛で爆弾である蛭を爆発させていく。

恐怖感を煽る為に、中るギリギリの所でかわさせる。

「ム……!!」

チャドはシバタの入った鳥籠を自分の両腕で蛭の爆発から護る。

「ダメダヨ!オジチャンシンジャウヨ……!!」

シバタは必死にチャドを止めようとするもチャドは危険をかえりみずにシバタだけを護ろうとする。

それは死んだ祖父の言葉から来るものであり、チャドはシバタをシュリーカーから護る為に自分を犠牲にする。

「ほーら!!油断してると……」

シュリーカーは何時の間にかチャドの直ぐ真上で飛んでおり、爆弾である蛭をチャドに投げつける。

「死んじまうぜええ!!」

蛭がチャドに当たる寸前、その蛭は何かにか吹っ飛ばされ、その蛭は遠くで爆発する。

「てめえは俺がぶっ飛ばす!!」

海燕がルキアと共にシュリーカーの元へ駆けつけ、シュリーカーは新しい玩具が増えたばかりに気味の悪い笑みを浮かべる。

一方海燕は解放前の斬魄刀を構え、シュリーカーを睨みつける。

「もう一度言うぜ……てめえは俺が……」

海燕は瞬歩でシュリーカーの後ろに回りこむ。

「ぶっ飛ばす!!」

海燕とシュリーカーの戦闘が始まった。

燕は姫と巨人を助ける（後書き）

井上兄との戦闘ですが、それは原作と同じなので、割愛しました。

この小説での海燕の初戦闘。

海燕は“通常なら”圧勝する筈ですが……！？

次回をお楽しみに。

燕は魔に蝕まれる

海燕は解放した自身の斬魄刀を構え、シュリーカーに斬りかかる。ルキアは現在霊力が僅かしか持ち合わせていないので、チャドとシバタを非難させる事に専念する。

「転校生……さっき俺を追っていた奴は一体何なんだ？」

チャドはルキアにシュリーカーの事を訪ねる。

尤も、チャド自身にはシュリーカーの事は見えてもいなければ声も聞こえないのだが。

「案ずるな……奴は直に地獄に落ちる」

ルキアの言葉に疑問を覚えながらもチャドは黙ってルキアの隣に立つ。

海燕は掬花から溢れ出る水流をシュリーカーに向け発射する。

シュリーカーはそれを全て避けるが、時々掠つてもいる。

海燕は元護廷十三隊、十三番隊副隊長だ。

シュリーカーは死神を二人ほど食らっており、霊力もそこそこ高い。だが所詮はそこそこ、であり本物の実力と経験を重ねた海燕には遠く及ばない。

「テメエの悪事も此処までだ！地獄に落ちて反省しろ！！」

地に落ちたシュリーカーに海燕が斬りかかる。

が、海燕の手はシュリーカーに当たる寸前で止まり、もう片方の手は自身の頭を押さえる。

突然、海燕に頭痛が襲ったのだ。

「ぐううう！？何だ……こんな時に……ぐああ！」

海燕は遂に掬花を手から放し、地面にのた打ち回る。

これを好機と見たシュリーカーは、一旦距離を取り、大口を開けて海燕を食らおうとする。

『テメエは俺の三人目の餌だ！美味しく頂いてやるぜえ！！』

シュリーカーの歯が海燕の肩に食い込む。

頭と右肩、両方の痛みが海燕に身体を襲い、肩からは血を流す。

「ん？なんだ？この匂いは……そうか、テメエも俺と同族じゃねえか？」

「どついう…事……だ」

海燕はシュリーカーの発言に疑問を覚えながらも掬花を握ろうとする。

だが、如何せん、手に力が入らず、掬花は虚しく地面に転がる。

シュリーカーは今度は海燕の腕に噛み付く。

シュリーカーは海燕の腕から離れようとせず、海燕の肩から鮮血が舞う。

だが、シュリーカーの仮面に一閃、刀傷がつく。

一護が戻ってきたのだ。

「大丈夫か海燕さん……何があつたか知らねえけど、あんたがそんなになるまでやられるって事はあいつ、強えのか？」

一護はまだ名前の分からない斬魄刀を抜き、シュリーカーの方を向く。

そして一瞬でシュリーカーの背後へ回る。

海燕から教わった“瞬歩”を使用したからだ。

一護は巨大な斬魄刀でシュリーカーの背中を斬り裂き、次に足を刀で串刺しにする。

『ぎゃああー！』

「わかるか？狩られる奴の恐怖が？」

シュリーカーは自分で足を引きちぎり、空中へ逃亡する。

「そつだ、自分で足を千切って逃げたくなる程怖えだろ？……その恐怖を、たっぷり味わいやがれ！！」

一護は空中までシュリーカーを追いかけ、仮面を貫く。

するとその空間から大きな門が現れる。

これは地獄の門、生前に罪を犯した虚を裁き、地獄に閉じ込める為の入り口。

シユリーカーは大きな刀でその身を貫かれ、大きな笑い声を上げる地獄の使者と共に地獄に落ちた。

一護達はシバタの魂魄を元の身体に戻そうと試みたが、体と魂魄が長く離れすぎた為、因果の鎖が既に切れていた。

その為、シバタは尸魂界へ送られる事になる。

チャドはシバタと別れの挨拶をした後、ルキアに記憶置換をされて虚に関する記憶が全て消された。

一護は傷ついたチャドを自宅、つまり黒崎医院に連れて行った。

一護と分かれた後、海燕は浦原に先ほどの頭痛の事を話す。

「……そうですか、確かに虚は、志波サンの事を同族、と言ったんですね？」

海燕は浦原にああ、と返事をした後、どういう事かを尋ねる。

「えー、とにかく、死神にそう言う症状が過去にも確認されていますねえ、専門家を紹介しましょう。その人達はそういうの大得意ですから」

海燕は浦原に連れられ、ある場所に向かった。

燕は魔に蝕まれる(後書き)

タグの内なる虚…(タメ)…ですね。

そして海燕の内なる虚は…おっと、危ない危ない。

次回をお楽しみに。

燕は仇と出会う

海燕が浦原に連れられていった場所とは、空座町の外れにある倉庫。さらに倉庫の地下には広大な空間が広がっており、浦原商店の勉強部屋に心なしか似ている。

違う所と言えば温泉がない事と何故かキッチンがあることだ。

さらに言えば隅には某少年漫画や成人向け雑誌が綺麗に積み重なっていた。

「皆さーん！少し用事があるのですがー！！」

浦原が大声でこの空間の主を呼ぶ。

すると数人の男女が瞬歩を駆使してその場に姿を現す。

「何や、浦原？そいつ死神やる？」

おかつぱ頭の青年、平子真子が海燕を指差す。

海燕の頭の中にはこいつ、何処かで見たことがあるな、という疑問でいっぱいだった。

当然だろう。

此処にいる男女等は過去に一人を除き護廷十三隊の隊長、副隊長だった者達である。

平子真子ひらこしんじを筆頭なづかに猿柿さるがきひよ里り、愛川羅武あいかわらぶ、鳳橋楼十郎おおのうら、矢胴丸リサやたいまる、六車拳西むくるまけんせい、久南白くなましろ、そして元副鬼道長うしよつだ、有昭田鉢玄はちげんのメンバーで構成されるのが仮面ヴァイの軍勢ザートという集団である。

浦原が海燕を此処に連れてきた理由は海燕の頭痛の原因にある。

それは海燕が現世に復活する経緯にあった虚の霊子を吸収した事から海燕の中に内なる虚が巣食っているので無いか、という事。

この仮面の軍勢は嘗て死神でありながら虚の力を手にしてた者達であるという事から此処に連れて来たのだ。

そして元五番隊長、平子真子が調べた結果、案の定海燕の中に虚の存在があったという。

「ど、どうすりゃ俺の中の虚を追い出せるんだ？」

海燕の問いに平子はチツチツチ、と指を鳴らす。

「追い出すことは出来へん……飼い慣らすんや、自分の方が強い、
って叩き込んでな？」

平子の後に、元十二番隊副隊長、猿柿ひよ里がにやりと口角を吊り上げる。

「これはワレが“元”死神やから協力するんやぞ？現役の死神だつたら放っておいたわ！」

この少女は死神や人間といった存在を嫌っており、それらの存在は殺すのも躊躇わない。

それをいつも平子が止め、ひよ里が平子をどつくのは平子にとって災難である。

三時間前、平子によって意識を落とされた海燕の姿は段々と虚のそれに変わっていった。

それを鉢玄、通称ハツチの鬼道によって結界を張られ、仮面の軍勢がその中で順繰りに虚かした海燕と戦う。

海燕の精神世界には海燕と同じ姿、唯一つ違う所は色が全体的に白い所だろうか、その姿をした虚がいて、海燕に話しかけた。

『久しぶりよの、この世界の王よ……』

その声は虚独特の地に響く声をしていた。

そして海燕は虚の久しぶり、という言葉に疑問を覚える。

「お前なんか知らねえよ、生憎俺には虚の知り合い何かいねえんだ」
海燕がそういうと虚はニタリと口角を吊り上げる。

『……うむ、こういえば分かりやすいかのう？“貴様の女は美味かった”ぞ！』

瞬間、海燕は刀を抜き、虚に斬りかかる。

すると虚は素手でそれを受け止め、真剣白刃取り宛らの状態となる。

「てめえ……あの時の虚かよ……！……！」

海燕は物凄い形相で虚を睨み付ける。

一方、虚は薄ら笑みを浮かべたまま、片手を離し、腰に刺してある刀を抜く。

そして海燕の頭に振り下ろすが、海燕はそれを瞬歩で避ける。

「テメエが俺の中にいるとはな、胸くそ悪いっていつたらありやしねえ……………」

海燕は内心で舌打ちをして虚を睨み付ける。

相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべたままの虚は刀を頭上に上げ、くるくると回し始める。

「おい…………その動作は……………」

虚は笑みを絶やさず、海燕のほうを見る。

『水天逆巻け…………掬花アア!!』

虚の刀は白い色をした掬花となり、槍の先端から水流を発射する。

海燕も、自身の刀を解放した後、同じ動作をする。

「何でてめえが掬花を使つてやがる!？」

『当たり前であるう…………我は貴様、貴様は我なのじゃ!!同じ技を使えて何の不思議がある!？』

虚は笑い声を上げながら海燕に斬りかかった。

燕は仇と出会う（後書き）

やはり海燕の内なる虚はメタスタシアでしょう、と思い、こんな話になりました。

口調が良く思い出せない……

次回をお楽しみに

燕は魔を征する

精神世界で海燕が虚と戦っている一方、現実世界では元九番隊隊長、六車拳西が虚化した海燕と戦っていた。

拳西の斬魄刀は断地風たちかぜというコンバットナイフだ。

能力は糸状の風を打ち放ち、相手を切り裂くという、海燕の水流を放射する掬花と属性こそ違う物の、少し似ている所がある。

尤も、海燕は現在、虚化していて、斬魄刀の能力を比べる事は出来ないのだが。

「ギャオオオオ！！！」

啼き声、姿共に虚のそれとなった海燕の髪は蛇のようになっており、体からはいくつもの手や足が生えていて、それはまるで海燕の体を乗っ取った虚、メタスタシアの様になっている。

「ちっ、この馬鹿野郎が！！早く帰ってきやがれ！！」

今拳西が相手にしている虚は元々は海燕の物である体を使っている為、戦闘力も半端なく高い。

元隊長である拳西も虚化すれば元副隊長である海燕を簡単に倒す事が出来るのだが、この戦闘の目的は海燕を倒す事ではなく、海燕が“戻ってくる”までの時間を稼ぐためである。

「拳西……交代や」

元八番隊副隊長、矢胴丸リサが結界の中に入り、拳西とバトンタッチをする。

「海燕……っていったっけ？悪いけど、手加減はせえへんで、覚悟しとき！」

リサは斬魄刀を鞘から抜き、瞬時に開放する。

「潰せ！鉄漿蜻蛉はくるとんぼ！！」

すると刀身が槍の様な、矛の様な姿に変形し、リサはそれを構えた。虚化した海燕は口を大きく開け、口内にエネルギーを溜める。

それは虚閃セロという、大虚や破面特有の技、霊圧で構築されている、

破壊の閃光で、虚の力を使う仮面の軍勢も使う事ができる。
海燕は虚閃を放った後、リサに向かって飛び掛った。

精神世界で海燕は自分の姿をしたメタスタシアとの戦闘で、相手を劣勢に追い込んでいる。

「おい！テメエはそんなに弱い癖して、都を殺したのか！？ふざけんじゃねえ！本気を出しやがれ！！」

海燕は許せなかった。

自分の愛するものがこんな弱い者に殺されたのかと思うと。

しかし次の瞬間、海燕の手から掬花が消え去り、メタスタシアは自身の持つ“掬花”で海燕を斬りさいた。

『ククク………忘れた訳ではあるまい？我には一日で最初に触れた物の斬魄刀を消滅させる事ができる………』

海燕は腹から血を流しながら、メタスタシアを睨み付ける。

現実世界にて、現在は平子が海燕と戦っている。

『………もう、ギブアップかい！』

海燕から何を感じとったのか、平子はハッチに何かの合図を送る。

ハッチはこくと頷き、海燕を束縛する。

暴れる海燕を抑えるこの鬼道は海燕の霊圧を一時的に封じ、それと共に内なる虚も封じる、という物だった。

「こんの根性なしが………」

ひよ里が親指の腹を噛みながらそう言い放つとそれを聞いていたのか、海燕が暗い表情をする。

「そう、だな………」

根性無しというのを認める発言にひよ里は例の如く飛び蹴りを食らわせる。

その後、海燕が涙を流したのには、全員、見て見ない振りをせざるを得なかった。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う(前書き)

キングオブニューヨーク……ブリーチを最初の巻から読んでいる方はネタが分かると思います。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う

現在海燕は一護に斬魄刀との対話をさせている。

斬魄刀との対話は自信の力を引き出す為に重要な事であり、それを行う事で本体との絆を深める事が出来る。

そしてここ二、三日で一護はようやく斬魄刀の名前を聞き出すことが出来た。

名前は斬月ざんげつ、解号の無い、常時開放型の刀で、攻撃力に特化している。

一護によると、斬月はまだ力を隠し持っているらしいが、それもその内引き出せるだろう。

友人にはもちろん死神の事は秘密であり、虚の事や、自分が霊が見えるという事に関しては一切話していない。

一護が学校へ行っている間、海燕は仮面の軍勢の元へ向かう。

「おいー！！修業に来たから開けてくれー！！」

倉庫のシャッターの前で海燕が叫ぶと、内側から元三番隊長、鳳橋楼十郎通称ローズの声が聞こえた。

「オーケー、今開けるから待っててよ」

ガラガラとシャッターが上に上がっていき、ローズがはい、と少々気障に海燕に手を振る。

海燕はそれを気にすることなく、よう、と軽く挨拶をし、地下へと向かう。

海燕が準備運動に腹筋をしてると突然、鳩尾にひよ里の飛び蹴りが入る。

「おいコラハゲエー！！暑苦しいから余所でやらんかいボケー！！」

その表情は悪戯っぽく、尚且つ楽しそうな顔をしているのには気付かず、海燕は涙目になりながらひよ里の首根っこを後ろからつかむ。

「ごんのガキ……何すんだよ」

海燕が表情を引きつらせながら言つと海燕の顔面にひよ里の拳が入る。

「だ〜れが餓鬼や！！うちは大人の女性やっちゅーねん！！ワレの眼は節穴かい！ハゲ！！」

その後、海燕とひよ里の楽しい追いかけてこが始まったのには仮面の軍勢の面々はひよ里を生温かい眼で見るほか無かった。

海燕とひよ里、互いに頭にたんこぶを作った後で、虚化の修業をする。

海燕を気絶させ、結界内に閉じ込めた後でまた一人ずつ戦闘を行う。

そろそろ一護が学校から帰る時間になり、海燕は浦原商店に一時帰宅する。

その時にひよ里が不満そうな顔をしたのはまた別の話だ。

「さて、一護ん家に行くか、」

海燕は店から出て、一護の家へと向かう。

その途中で見覚えのある少年が住宅地の屋根の上を歩いているのを見かける。

尤も、それは歩いている、というより跳ねている、という表現をした方が正しいのだが、それは今はどうでもいい。

「一護……じゃねえよなあれは？……まさか、改造魂魄かありやあ！？」

改造魂魄、とはその昔、護廷十三隊の十二番隊、つまり技術開発局が作り出した対虚用の兵士であり、死体にそれをいれて戦わせる、という計画により作り出された。

尤も、それは死体を戦わせる、という非道さから廃案になり全て廃棄されたのだが。

つまり今海燕の目の前にいるのはその廃棄から逃れた生き残り、という事になる。

そして今改造魂魄が入っているのは一護の体、という事は何が何で

も止めなければいけない。

「待て。待ちやがれー!!」

海燕が追いかけてきたのに気付いた改造魂魄は捕まってるものなのかと速度を上げる。

海燕は瞬歩を駆使して追いかけるが、この改造魂魄は下半身を強化しており、足の速さは半端じゃない。

吾輩は改造魂魄である、名前はまだない……なんてな、ジョークジョーク。

まあ嘘では無いけどな。

俺様は廃棄される恐怖から逃れて町を自由に散歩中。

馬鹿な人間の体に入っているのが少し不満だけど……人間達の視線がめっちゃ気持ちいい!!所が、その途中で死神が追いかけてきやがった!!な・ん・で!?!この町の担当はあの黒髪の姐さん一人じやなかったのかよ!?!嗚呼、綺麗なお姉さん!何処かに居たら可哀そうな俺を助けて!!

改造魂魄が内心で叫び声をあげながら海燕の追跡から逃げる。

海燕は息を切らせながら瞬歩の速度を上げる。

途中から、一護とルキアと合流するが、途中で虚の反応があった。

何故か改造魂魄もそちらに向かい、三人はそれを疑問に思いながら改造魂魄を追う。

芋虫の様な虚と戦闘しているのは改造魂魄。

何故改造魂魄が虚と戦闘をしているかというと、その理由は彼の生い立ちにあった。

生まれた次の日には自分の廃棄する日が決まっており、毎日を怯えて過ごした。

そして偶然、普通の義魂丸に混ざり、廃棄を逃れる。

だが、いつか見つかって廃棄されるのではないかという恐怖を感じ

ながら現世で浦原の元へ辿りつく。

そして“粗悪品”の箱に入れられ、遂に廃棄されるのかと思った矢先に、雨の手違いにより、自由を手に入れる。

その経験から命は誰かが勝手に奪っていいものではないと感じるようになり、彼は誰よりも殺生を好まない。

そして先ほど、虚が現れた場所には子供達の姿があり、改造魂魄はそれを救う為に虚の居る場所へと向かったのだ。

改造魂魄の戦闘に、一護と海燕が加わり、虚は昇華される。

その後、蟻を潰しそうになった虚を改造魂魄が蹴り上げて、建物から落下しそうになるなど、ハプニングもあった。

この一件は落着く　　するかと思っただが、そこに浦原がやってきて改造魂魄を廃棄すると言いだすが、ルキアが浦原から改造魂魄を奪い取り、一護の義魂丸はこれでいいという。

「知りませんよ……何かあったらあたしは姿を晦ましますからね……」

「元々霊法の外で動いてる貴様らだ、何も問題は無いだろう」

画して、改造魂魄のコン（命名一護）が黒崎家に厄介になるのだが、一護がこの先自分の義魂丸がコンでよかったと思うのはまた別の話だ。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う(後書き)

コンの登場でっす

コンカツコイイ(?)しかわいいしで好きです

テいうかブリーチで特別嫌いなキャラってルピ以外ない気がします。

一番好きなのはマユリ様です。

他にも剣ちゃん、海燕、えとせとら…

因みに今回のひよ里と海燕ですが、海燕にならひよ里も心を許すんじゃないかなあと言う妄想です。

浦原の前の十二番隊隊長(名前忘れた)は母親を慕うかのように懐いていたと言うので、海燕はお兄ちゃんて良いかな、と。

尤も、ひよ里は素直になれない反抗期のお子様みたいになってますが。

それでは次回をお楽しみに

燕は……（前書き）

今回は殆ど一護のターンです。

燕は……

息を切らし、憎き親の仇を討とうと自身の斬魄刀、斬月を振り下ろす。

対して、その虚はそれを軽々と避ける。

上を良く見れば雨雲が空を黒く染める。

一護は“六年前の今日”を思い出しながら、母親の敵、グランドフイッシャーを睨み付けた。

それは数時間前に遡る。

その時は雨の気配など無く、外には晴れ渡る空が続いていた。

一護の部屋の押入れに住み着いているルキアと、何となく部屋に上がった海燕に一護があるお願いをする。

「死神業を休みたいだと？戯けめ！そんな事が許される訳……」
ルキアの口を両手で塞いで海燕は一護に理由を聞く。

一護曰く、明日は墓参りだそうだ。

それも自分の慕っていた母親の

ルキアもそう言われて却下する訳にもいかず、渋々一護が明日は死神業を休む事を承諾した。

そして、最後の一護の一言が無ければ、黒崎家だけで行かせる心算だった

「明日はお袋が死んだ日　　いや、“殺された”日だ」

一護の部屋に、暫らくの間沈黙が走った。

「おい、ルキア……オメエ本当についてくのか？今日ぐれえ家族だけの時間をだな……」

海燕の言葉を聞いて、ルキアは一回目を閉じて、言葉を整理した後、海燕の言葉に返答する。

「一護は母親が殺された

と書いておりました。それは若し

かしたら虚の仕業という可能性もあります。それを一護から聞かなければ……」

ルキアの主張に海燕は盛大に溜め息を付く。
まるで融通の利かない妹に世話を焼く兄の様に。

「わあつたよ……お前がそこまで言うんなら俺もついていく」
こうして、家族団欒の一時をルキアと海燕が邪魔をする事になったのだが、この時になって、この選択は正しいと思ったのだった。

大好きだった　　否、今でもお袋は大好きだ。

俺のせいで死なせてしまった、家族の中心であるお袋を。

それは俺のせいでもあり、今、目の前にいる薄汚い虚のせいでもある。

こいつを倒す事で、お袋に償いが出来るのなら俺は

「俺はテメエを倒さなきゃいけないえ!!」

一護は気合を入れるように吼え、グランドフィッシャーに斬りかかる。

石垣の上でルキアと海燕が一護と、その戦闘の行方を見守る。

腹から血を流しながらも、何かに取り憑かれたかの様に、一心不乱にグランドフィッシャーに斬りかかる。

だが、グランドフィッシャーは頭に付いている疑似餌を一護の母親の姿に変え、一護の攻撃の手を止める。

「止めて……一護、刀を引いて頂戴……母さんを斬らないで……!!」

グランドフィッシャーが一護の母親、真咲を利用したのが運の尽きだった。

何故なら、これで“グランドフィッシャー”は“一護”を完全に怒らせてしまったのだから。

「こんなところに……お袋の姿を担ぎ出してんじゃねえよ……」

一護は斬月を握り締め、溢れる力を確かに感じる。

そして、刀からは声が聞こえ、一護はその声に耳を傾ける。

「一護……この外道を許してはならない。叫べ……！それはお前だけの力だ」

一護はグランドフィッシャーの顔を睨みつけ、声を高らかに叫ぶ。

「月牙……天衝……！」

白い三日月型の斬撃がグランドフィッシャーの仮面を割り、そのまま胴体も真っ二つに割る。

だが虚の弱点である仮面を割っても直ぐにグランドフィッシャーが消滅する事は無く、まだ口も利ける状態である。

「クッククク……ワシを殺して満足か？だが、貴様の母親殺しの罪は消える事は……」

ザク、とグランドフィッシャーの腹に斬月の刃が突き刺さる。

一護は無言で、汚物を見る様な目でグランドフィッシャーを見つめる。

「そつだ、俺の罪は消えない……俺がテメエの罠に引つ掛かりさえしなけりやお袋は死ぬ事が無かった」

だから、と刀を振り上げ、グランドフィッシャーに止めを刺そうとする。

「俺がお袋を殺したから、だから償いに少しでも多くの人間を護るんだよ……！」

斬月は、確実にグランドフィッシャーの仮面を捕らえ、その後で黒く変色し、グランドフィッシャーの体は消え去った。

グランドフィッシャーを倒した後で、呆ける一護の肩に海燕が手を置く。

そして唐突に、一護にある、質問をする。

「一護……心つてのは何処にあると思う？」

海燕は昔、ルキアに問いかけた事と同じ事を問う。

一護は当時のルキアと同じく、自分の胸に手をやり、其処に在る、と答える。

海燕は予想していた答えに苦笑した後、それは違つと言う。

「心つてのはな、此処に在るんだと、俺は思う」

そういつて海燕は自分と一護の間に拳を置く。

心は誰かと誰かと触れ合った時、其処に生まれるのだと、海燕は言う。

「オメエのお袋さんは、死んだ時に一護に心を預けたんじゃないかねえのか？お袋さんが、一人で死んだ時、オメエは傍にいたんだろ？だからお袋さんの心は一護の中にあるんだ」

海燕が諭す様に一護に言うと言つて一護は俯き、「くせえよ」と一言言つた。

その後、二人の殴り合いの喧嘩が始まったのだが、それは一護に取つて、気持ちを切り替える事が出来るいいチャンスだった。

燕は……（後書き）

海燕にカツコイイ事言わせようと思ったのに全然かつこよくならな
い……

何処かに文才落ちてないでしょうか。

見つけたら自分のとこまでお届け下さい（笑）

此処からは、話を考えたはいい物の、入れる場所がない事に気付い
てお蔵入りになった話。

浦原商店の一室でルキアともう一人、金髪の少女、猿柿ひよ里がに
らみ合っていた。

それに巻き込まれているのは、否、むしろ争いの中心となっている
のは海燕だ。

それは数時間前に遡る。

仮面の軍勢のメンバー、猿柿ひよ里が浦原商店の近くを通りかかっ
た時、中から海燕の声が聞こえたので、中を覗いてみた。

すると其処には海燕と談笑をする女性、朽木ルキアの姿があった。

何故か無性に腹立たしくなり土足で店内に入る。

「おいコラ！ハゲツバメエ！その馬鹿面女はなんやねんこら！！」
ひよ里が怒鳴るのを見て、ルキアが若干眉を吊り上げながら海燕に
尋ねる。

「海燕殿……この教育のなっていない子供は何者ですか……？」

この一言が切っ掛けで、冒頭に繋がる。

見たいな感じでワードに書いてみたんですが、入れる場所が全然無いので此処に書きました。
評価等はこれ抜きでお願いします。

燕は国民的大スターと出会う（前書き）

BLEACHの中で『こくみんなてきたー』と云えばこの方しかい
ません。

ドン・観音寺です！！

……テレビの司会風に言ってみましたが、気にしないでください。
ただのおふざけですから。

まあ、観音寺好きなんですけどね。

キャラ的にも中の人的にも。

あそこまではっちゃける一般人（？）も珍しいですよ。

うふふのふ

燕は国民的大スターと出会う

派手な衣装を着た男が、テレビの向こうで何やら訳のわからない言葉を叫んでいる。

それは英語のなのだろうが、日本人にとって訳がわからないのは変わりがない。

男の名前はドン・観音寺。

本名を観音寺ミサオ丸と言うのだが、彼の職業は霊媒師兼芸能人。それも自身が主役の番組で毎週25%を取るほどに大人気の。

黒崎家では、一心と遊子が夢中になって見ているのだが、逆に一護と夏梨は興味が無い。

因みに一心と遊子は共に霊が見えないという事から、観音寺に憧れていると見える。

尤も、遊子の方はうつつすらと霊を見る事が出来るのだが。

さらに一護は興味が無い所か、この番組の事が嫌いだ。

一護は自分が霊が見えるからか、霊、神などの存在が曖昧な物を使う商売が嫌いである。

だから雑誌のページにある、今日の運勢等も信じない。

だから、其処に新しい友達が出来る、等と書いてあってもこれっぽっちも信じていなかった

のだが、一護は死神化した自分を視認する事が出来る男、

ドン・観音寺に戦友と書いて友と呼ばれたには気が萎えた。

それを見て海燕は苦笑するのだが、追ってくる虚がそんな暇を与えてくれない。

蛙の様な顔をした虚は口から粘液を吐き、此方の動きを止めようとしてくる。

一護が刀を振るおうにも此処は建物の中だ。

巨大なそれは相手に斬りかかろうとした時、天井に突き刺さってし

まう。

「此処が建物の中だつて事忘れてた……」

そんなミスをする一護に海燕は頭を抱える仕草をする。

因みに、一護の修業を図る為に手助けはしない。

「自分で何とかしろ!!」

数歩下がって一護を見守る。

一護は自棄になって足で戦おうとするのだが、其処を何と観音寺が自らの持つステッキ、ただの棒なので名前は割愛するが、それを駆使して虚の動きを止める。

これには海燕も動かざるを得ず、観音寺を突き飛ばす。

「ノー!!ヘイ、ユー!!何をするのかね!?私がこの怪物に敵わないのは分かる!だが、
せめてボーイを護つて散ろうと……」

喚く観音寺の顔を踏みつけ、天井の、一護の刀が刺さっている部分を鬼道で破壊する。

「後は自分で何とかしやがれ!!」

海燕は観音寺を引きずりながら後ろへ下がる。

その際に観音寺が喚いていたのだが、海燕はそれを無視して後ろへ下がる。

一護を捕縛し、屋上へと移動する虚を追って海燕も屋上へ向かう。

「あの野郎……最近弛んでやがるな」

一護の体たらくを見て、そう嘆く海燕　　の後ろを匍匐前進で

付いていく観音寺。

この状況を一言で言うなら混沌カオスというだろうか。

その混沌の中心に居るのが観音寺なのとは言つまでもないだろう。

屋上、つまり開けた場所に着いてからという者の、一護の動きは何時もの調子を取り戻していた。

それは狭い建物内に居たのもあるだろうが、観音寺という御邪魔無

視がなくなつたのが大きいだろう。

「ボーイ！私が来たからにはもう安心だ！！」

その御邪魔無視が態々此処に来たのは完全なる計算外である。

その後ろには面倒くさそう表情をしている海燕もいる。

「海燕さん……ちゃんと、監視しとけよ！！」

一回、二回、三回と斬りつけ、虚を弱らせる。

尤も、仮面を狙えば一撃で済むのだが、今の一護にそんな余裕は無い。

虚は高く飛び、上空に舞い上がる。

其処から先ほどの粘液を連射してくるのだが、一護の月牙天衝にて弾かれる。

そしてそのまま、三日月型の斬撃が虚の体を通り抜ける。

上半分と下半分が二つに割れた虚はそのまま、黒く変色し、昇華していった。

あの一護と海燕は観音寺にある物を渡された。

それは観音寺のファンクラブのメンバーズカードなのだが、直ぐに破り捨てたのと言つまでもない。

燕は国民的大スターと出会う（後書き）

一番弟子の一護と二番弟子の海燕です。

いや、

だからどうとか無いですけど。

燕は今回出番無く……（前書き）

まあタイトル通りです。

今回海燕は一言しか喋りません。

燕は今回出番無く……

虚を討伐するものの中に、死神とは別に滅却師クインシーという者がいる。彼らは虚を憎み、昇華させるのではなく、唯、滅却する事、殺す事だけを考えた。

その結果、尸魂界と現世のバランスが崩れ、世界が破滅する寸前まで至った。

その事で死神達は滅却師達を殲滅する事を決定。今回は滅却師と死神の葛藤を描いた話

それはとある夜の出会いから始まった。

何時もの様に虚を退治する一護とそれを見守る海燕とルキア。

何時もの様に、とっはいつでも最近は何者かに虚が倒されている為、虚と遭遇する機会が無かったのだが。

虚を倒した直後、眼鏡を掛けた、全身白の服を着ている青年が声を掛けてきた。

「こんばんは、黒崎君、朽木さん、それと……志波さんだったかな？」

突然現れた青年に警戒しながらも、刀を構えるという事はしない。彼は虚ではなく、人間だからだ。

「……向こうに虚が出たみたいだよ？」

青年の手首にぶら下げている十字架のアクセサリーが一瞬、光ったかと思うと次の瞬間には青白く光る霊子の矢となっていた。

「疾っ!!!」

その一言と共に矢を放つとそれは的確に虚の仮面を捉え、昇華、否、滅却させる。

「……滅却師、か？」

海燕が確認するように言うと青年はコクリと頷く。

「僕は滅却師の石田雨竜いしだりゅう、死神を憎むものだ……黒崎に志波、君達

をね」

あの夜の翌日に石田が自分のクラスメイトだと判明した一護は尾行を行う。

勿論、霊圧のコントロールが苦手な一護に気付かない筈も無く

「いつまで付いてくるつもりだい？黒崎一護」

となる訳である。

空座町とその周辺には、虚の大群が押し寄せていた。

石田が虚を誘き寄せせる為の撒き餌を使ってどちらが多く倒せるかと言ふ勝負をしようと言つのだ。

「僕に殴りかかる暇があったら走り回った方がいい。虚は霊力が高い人間を襲う筈だからね」

平然と言つてのける石田を突き飛ばした後、一護は虚を探すために空座町を走り回る事になった。

ルキアが戦っている相手はオランウータンの様な姿をした知能の低い虚。

得意の鬼道を放つても、死神の力は少しも戻っておらず、その鬼道は虚に直撃するも、幾分のダメージも与えてはいない。

虚がルキアに襲い掛かった時、虚を蹴り飛ばすものがいた。

それは一護の体に入ったコン。

ルキアに用があるのだが、如何せん探すのに夢中になった為にそれは記憶の彼方にある。

「早く思い出せ……」

「痛い痛い！！痛いっすよ姐さん！あ……俺何かに目覚めそう！！」

学校の運動場で虚に襲われているのは井上と有沢、そして二人の友人の本匠千鶴だ。

虚の能力で操られる男子生徒達を相手に、空手を得意とする有沢が奮闘している。

その様はメスの鬼を村人達が討伐しようとして躍起になっている様である。

「かかってこいやー!!」

半ば暴走気味の有沢を虚が種子を撃ち込んで制止する。

運動場に井上と虚が立っており、先ほど種子を撃ち込まれた筈の有沢と本匠の傷は綺麗に消えている。

井上の周りに浮いている、妖精の様な者達の言葉を復唱し、虚に攻撃をしようとする。

「椿鬼……孤天斬盾、私は拒絶する!!」

井上は椿鬼を虚に撃ち込む。

虚は真つ二つに裂け、そのまま消滅する。

井上もその場に倒れたのだが、何故かその場に現れた浦原商店の面々に連れて行かれた。

そして握菱鉄裁つかびしテッサイの肩にはチャドが担がれており、二人共誘拐された

のではなく浦原商店へと運ばれた。

燕は今回出番無く……（後書き）

石田君、石田君、どうして君はそんなに白いの？

「誇りを持っているからだ!!」

さいですか。

という事で感想お待ちしています。

ちよっくら編集した結果で、海燕は内なる虚を克服していません。
あれでは克服が早すぎるといっ指摘と自分もそう思った結果です。

燕は白と赤に遭遇する。

一護、海燕、ルキア、コン、そして石田。

今、この場に今回の事件の重要人物が集まっていた。

死神である一護、海燕、ルキア。

滅却師である石田。

そして改造魂魄のコン　　はあまり関係ないのだが、一応頭数には入れておく。

そして一箇所に虚が集まっているのを見て、石田がそれを追う。

「僕は君達の前で死神より滅却師が優れているのを証明する！！指を啜えてここで見ている！！」

石田の言葉に一護は溜め息を付くが、次の海燕の言葉により、その表情が引き締まる。

それは死神の手により滅却師が滅んだという、学校の教科書には載っていない、歴史の闇。

「多分だが、あいつは自分の先祖の仇を討つために俺達に勝負を挑んだんじゃないかねえか？」

海燕の言葉に一護は何を思ったか、石田の元へ走り出した。

自分を邪魔する虚を蹴散らしながら、一護は石田の元へと辿り着く。一護が石田の先ほど海燕がいった戦う理由を確認するが石田はそれを否定する。

「僕の戦う理由はそんなんじゃない……志波さんから何を聞いたか知らないけど、勘違いしないで欲しいね」

石田は過去に祖父を殺されている。

それを石田の口から聞いた一護は一瞬戸惑った表情をするが、直ぐに持ち直す。

石田の祖父、つまり師匠を直接殺したのは虚だ。

だが、石田の祖父は長年死神に訴えかけていた。
我らは強力すべきだと。

そしてある日、祖父は虚に襲われた。

滅却師と死神が繋がっていけば、直ぐに助けが到着し、祖父は死ぬ事は無かつただろう。

「優しくかった、師匠せんせいを殺した死神を、僕は許す事が出来ない!!」
そういつた石田は辛そうな表情をしていた。

そんな石田に一護が近づき、何をするかと思いきや

「話がなげえ!!」

飛び蹴り、だった。

「テメエの話、長くて最初の方は忘れちゃったけどよ……テメエの爺さんが言いたかったのは……」

一護は石田の背に自身の背を預け、斬月を構える。

「死神と滅却師が協力した方が良く、って事だろ!?それを今やらないでどうすんだ!!」

一護と石田、黒と白の共闘は意外にも息が合っていた。

白の方が何体もの虚を一度に攻撃し、黒が一体ずつ、確実に止めを刺す。

そんな中、ルキアも、海燕も予想していなかった事態が起こる。

メノスケランデ大虚、幾百の虚が折り重なった怪物が、現世に姿を現したのだ。

『オオオオオオオオオオ!!』

高く、咆哮を上げる大虚に石田は怯む。

「周りの虚の相手をしながらあれを倒せって言うのか!?馬鹿にしている!!」

その時、一護達の周りにいる虚が次々と消滅していく。

「黒崎サン、助けにきましたよーん」

扇子を口元に当てながら不適に微笑む浦原と鉄裁、そしてジン太と雨。

さらに海燕までもが辺りの虚を殲滅に掛かっている。

「周りの雑魚はアタシ達に任せて、アナタ達はあの大虚をお願いします」

一護は浦原の言葉を聞き、大虚元へと走っていった。

「浦原さん……あれを今の一護に任せて大丈夫なのか？」

浦原は海燕の問いに唯頷くだけで、それ以上は何も言わなかった。

大虚に向け、一護は月牙天衝を放つ。

それを大虚は口から虚閃を放ち、応戦する。

一護と大虚では大虚の方が押ししており、虚閃が一護の所まで届いた。

一護の霊圧は大虚と共鳴し、段々と高まっていく。

斬月で虚閃を弾いている内に、勢いは弱まり、威力も弱まっていく。

「月牙……天衝!!」

一護の刀は溢れ出る自身の霊圧に耐え切れなくなり、それを感じた

一護はそれを大虚に向けて打ち放つ。

それは大虚の体に傷を付け、大虚を追い返す事に成功する。

その後、一護の霊圧は暴走し、刀の形状を保つ事が難しくなっていた。

それを石田が次自身の武器、弧雀こしやくで吸収し、空に向けて打ち放つ。

そうする事で、一護の霊圧を安定させようと考えたのだ。

霊圧の吸収、発射を繰り返していく内に一護の霊圧は安定し、段々と落ち着いていく。

「そんな顔してる奴殴れるかよ……」

一護は石田から顔を背け、そういった後、立ち上がり、石田の肩を担いで傷を癒すために浦原商店へと向かった。

夜の道を走り、息を切らせながら自身の犯した罪を頭の中で反芻する。

人間への力の譲渡、それがルキアの犯した罪。

ルキアは一護や海燕に迷惑をかけまいと、黙って黒崎家を出た。

「私は間違っていたのか……？」

後悔の言葉ともとれるその言葉を吐いた時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

それは幼馴染である、阿散井恋次という死神の声。

恋次は自身の斬魄刀でルキアに斬りかかるが、ルキアはそれを間一髪でよける。

そして恋次と共にいるのは六番隊隊長、朽木白哉。

その白哉と共にいるという事は恋次は副隊長なのだろう。

少し会話をした後で恋次はルキアに再び斬りかかる。

が、遠くから見覚えのある青白い矢と、蒼い水流が飛んできたため、恋次の行動は制止される。

「お前……阿散井、だよな？何でテメルキアに攻撃してんだよ？」

水流を発射した主、海燕がそう言うのと恋次の表情は驚愕に染まる。

「何で、海燕さんが……死んだ筈じゃなかったのか？」

恋次が驚いている間にも、海燕はルキアを自身の元へ引き寄せる。

そして恋次の後ろにいる白哉に目をやった後で、生唾を飲み込む。

「おい石田、朽木と一緒に逃げるのと、俺と一緒に戦うの、どっちがいい？」

石田は眼鏡のズレを直した後で黙って海燕の隣に並ぶ。

それを後者を選択するという意味だろう。

「勘違いするな、僕はクラスメイトを護りたいだけだ」

「へっ、俺だつて部下を護りたいだけだつーの！」

互いの利害を無理矢理一致させ、石田は遠距離から、海燕は近距離から恋次を攻撃する。

尤も、海燕の攻撃は、恋次を狙った物ではなく、恋次の刀を使わなくさせる為に罅迫り合いを仕掛けた物なのだが。

石田の狙撃が一旦止み、海燕と恋次が離れた所をまた狙撃する。

「どうして、阿散井……テメエがルキアに刀を向けてんだよ？何かあげえだろ？」

海燕の言葉に一瞬戸惑った表情をした事から、それは彼の本意では

ない事が伺える。

「恋次……死人の言葉に耳を傾ける必要はない」

白哉は特に手出しをする訳でもなく、一言、恋次に向かって口を開く。

「海燕さん……悪いが、やらせてもらっぜー！」

一護が向かっている場所には知らない霊圧が二つ、そして覚えのある霊圧が二つ。

それは石田と海燕の物である。

一護は瞬歩を駆使してその場へと向かう。

現場へたどり着いた頃には石田は気絶しており、少し傷を負ってはいるが、まだ十分にた戦えている海燕と息切れを起こしている恋次が戦っていた。

白哉は相変わらず二人の戦いを見ているだけである。

「海燕さん！」

一護が瞬歩で海燕の隣に立つ。

「あの赤髪は“今は”オメエと同程度の實力だが……行けるか？」

「行けても行けなくても、どっちにしても行くー！」

「そうかよ」

一護は斬月を構え、恋次に斬りかかる。

一方で、海燕は白哉と相対し、抜花を構える。

「兄が何故此処にいるのか、そんな事はどうでもいい。私は任を遂行するのみ」

白哉は未解放の刀を構え、海燕に斬りかかる。

副隊長と隊長なら、どちらが強いかは戦わずとも分かる事だが、海燕は白哉の攻撃を見事に防いで見せた。

「こちとら毎日隊長各の連中と戦ってた……テメエが隊長だろうが簡単には負けねえよー！」

一護と恋次の戦いは、今の所一護が優勢だ。

その理由はまだ恋次が刀を開放していないからだろう。

「おい、テメエの刀はなんて名だ？」

恋次の突然の問いに、一護は簡潔に、答えを口にする。

「斬月だ」

そうかよ、一言行った後と恋次が一步引き、刀の解号を唱える。

「咆える “蛇尾丸”！！」

瞬間、恋次の刀の形状は刃のついた鞭の様になり、一護の方へと伸びる。

それは一護の肩に僅かながらに掠り、少量の血を流させる。

「ラオラオラオラア！！」

恋次の刀は一護によける暇を与えずに、間髪を入れずに攻撃する。

一護半ば強引に、斬月に備わっている唯一の技を発動する

「月牙……天衝！！」

それを食らった恋次は、後ろに吹っ飛ぶが、地面に脚を伸ばして踏みとどまる。

「効かねえんだよ！」

蛇尾丸を振るう恋次は今、何を思っているのか、幼馴染を傷つける自分は何なのか？その一瞬の迷いが、自身の腕を鈍らせた。

「これで、終わりだあ！！」

そう叫ぶ恋次の猛攻を一護は容易くよけ鳩尾に斬月の柄の部分で強く打ち付ける。

恋次は倒れ、一護は息を切らしながら、彼方で戦っている海燕の元へと向かった。

燕は白と赤に遭遇する。(後書き)

……何も言わないください(泣)。

ええ、わかっていますよ、駄文なのは。

後で編集しますので今はお見逃しくください。

燕の魔は進行する（前書き）

前にも言いましたが、編集した結果で、海燕は虚を克服していません。
それを踏まえたうえでご覧になってください。

燕の魔は進行する

海燕と白哉の戦闘は最初こそ両者互角だった物の、悲しきかな、副隊長と隊長の実力差は今すぐには埋める事は出来なかった。

因みに海燕は毎日仮面の軍勢と戦闘訓練を行なっている為、副隊長の中では一番強い。

尤も海燕は“元”副隊長なのだが。

「……兄は何故、尸魂界に牙をむく」

小さく、夜の闇に消えてしまいそうな程に静かな声で、白哉は言った。

「此処で尸魂界の掟だから、って引いちまうとよ、今まで大事にしてきたもんが全部逃げまわう様な気がする、俺が俺じゃ無くなっちゃう様な気がするんだよ。……理由の説明はこれでいいか？」

その言葉と共に瞬歩を駆使して白哉の後ろへ回り込む。

当然、その様な不意打ちに白哉が引掛かる筈もなく、逆に右肩から斜めに一閃されてしまう。

「くだらぬ」

倒れた海燕を尻目に、ルキアを捕縛しようとするルキアの方へ歩み寄る。しかし、それは一護によって阻まれる。

「行かせねえよ」

「退け、羽虫が」

白哉が刀を振るうが、一護が巨大な斬魄刀、斬月の腹でそれを防ぐ。

一旦距離を取り、ルキアを下がらせた後で月牙天衝を放つ。

「貴様と私、何が違うか教えてやろう……」

月牙天衝に中る寸前で瞬歩を使ってそれを避ける。

技を放った後で、隙の大きい一護の後ろを取る。

「格だ」

一言、そう言った後、死神の力の元である鎖結さけつと魄睡はくすいを破壊しようとするが、一護は背中に斬月を回してそれを防ぐ。

「格……か？」

挑発するように言う一護に白哉は無表情で再び刀を振るう。狙いは首、しかし一護は瞬歩でそれを回避する。

一護は内心焦っていた。

攻撃を回避する際は合っても、攻撃を与える隙はない。

前者も、白哉が本気を出していないだけで、恐らく斬魄刀を開放したら間違いなく殺られるだろう。

そんな中、一護にとって希望の光が見えた。

海燕が目を覚ましたのだ。

しかし、それは希望の光を掻き消す、闇の渦を呼び込む物だった。

『主め……此処迄やられてまだ死なぬか』

その声は海燕のものではない。

そう、それは海燕の心に巢食う、内なる虚、メタスタシアの声。

『殺されたい馬鹿はお前か……それともお前か？』

仮面の付いた顔を不気味に歪ませるメタスタシアは首の骨をコキ、コキと鳴らす。

さらに一護と白哉、交互に指を指し、ジリジリと歩み寄る。

白哉に斬りかかったメタスタシアは白哉の手に持つ、斬魄刀を消滅させて、その中性的な顔に傷をつける。

『どうした、顔は傷つけては不味かったかの！！』

狂気的笑みを浮かべたメタスタシアは、白哉を一方的に痛めつけていく。

そんな中、怯えたような、何が起きたたのか分かっていない表情をしたルキアが目に入る。

『お主は……我と共にこの体の主を殺した娘か？』

メタスタシアの言葉に、ルキアの表情は凍りつく。

『主……海燕、と言ったか？あやつは恨んでおったぞ！！お前のせいで死んでしまった、痛かった、苦しかった、辛かった、となあ！！』

ルキアのトラウマを抉るような言葉に、ルキアの呼吸は乱れ、体は

小刻みに震える。

白哉は隙を見せたメタスタシアを斬りつけようとする。しかし、メタスタシアの能力により、刀は消滅しており、その腕は虚しく宙を斬るだけであった。

『死ぬ死ぬ死ぬ死ぬええ！！我の餌となれ、肉となれ！！貴様ら死神はそれしか使い道が無いのだから！！』

狂った様に、否、実際に狂っているのだろう。

メタスタシアは叫びながら白哉を斬りつける、

止めの一撃を、メタスタシアが食らわせようとした時、両の腕がまるで別の意思を持ったかのように動く。

「何勝手なことしてくれてんだよ、引つ込め、馬鹿野郎」

仮面に隠れていない口の右半分から海燕の声が聞こえた。

『ぐ……大人……しく、我に任せておれ……愚か者が……グウウ！！』
苦しむように唸るメタスタシア、仮面を筆り取る海燕の腕。

両者一步も引かず、気を抜けば直ぐにでも精神が入れ替わる、そんな“戦い”を繰り返している。

『グア……ギアアアアア！！』

仮面を完全に筆り取り、中から現れた海燕の表情は、申し訳なさそうな、決して強気な表情ではない。

「悪かったな、内の問題児が勝手なことしちゃってよ」

血に濡れた白哉は怪訝そうな表情を浮かべるも、直ぐに立ち上がって手のひらに霊力を込める。

「破道の三十三……」

「水天逆巻け……」

互いに、今できる最大の攻撃を構え、放とうとする。

「蒼火墜！！」

「掬花！！」

蒼い閃光と蒼い水流がぶつかり合い、若干、白哉の方が押している。海燕は霊力を込め水流の勢いを強くする。

一方、白哉はこれが限界らしく、海燕に押され、そのまま、後ろに

吹き飛ばされる。

海燕と白哉、互いに力尽き、その場に倒れる。

気絶した海燕の下に一護とルキアが海燕の下に駆け寄る。

「大丈夫か、海燕さん！」

「海燕殿！！」

そんな中、現世と尸魂界を繋ぐための門、穿界門せんかいもんが開いた。

中から出てきたのは言うまでもなく死神。

それも隊長と副隊長の二人。

三番隊隊長、市丸ギンと同隊副隊長、吉良イヅルの両名である。

「ハイハイお疲れさん、でもルキアちゃんは連れてくで」

瞬歩でルキアの背後に周り、一護を吹っ飛ばしたあとで、ルキアの肩を掴む。

そして無理矢理に、穿界門せんかいもんへと連れて行き、暴れるルキアの耳元に口を近づける。

「また君のせいで誰かが死んだりするの、嫌やる？大人しくしとき？」

その一言だけで、無力化したルキアを穿界門せんかいもんの中へと連れて行く。

「やめる、テメエ、狐野郎！！それが死神のやり方かよ！！？」

「その通りや……ホンマ、堪忍な？」

バイバイ、と手を振るギンに続き、白哉と恋次を担ぐイヅルが穿界門へと姿を消す。

その場には、気絶した海燕と、ギンの放った鬼道のせいで身動きが取れないでいる一護が虚しく叫んでいた。

尸魂界に到着したギンとイヅル、そしてルキア。

イヅルはギンに対してある疑問を投げかけた。

「あの少年ともう一人……顔は見えませんでしたがああ死神……何故殺さなかったのですか？」

「なんや、僕が信用できへんの？」

ギンの問いに、イヅルはいえ、と否定したあとで謝罪をする。

「それにしても……あの死神、何やったんやろ？報告せえへんとな」
ギン達はルキアを牢屋に入れるため、三番隊の地下へと向った

燕の魔は進行する（後書き）

市丸ギンの登場です。

一護を殺さなかった理由、まあみなさんお分かりだと思いますが、一応まだ伏せておきます。

それはそうと、評価、感想等々、いつでもお待ちしておりますのでお気軽にどうぞ。

誤字脱字、おかしい所、ストーリーの駄目出し、なんでもいいです。どうぞよろしくお願いします。

燕と母は修行をはじめ

地面に打ち付ける雨の音が鬱陶しく一護と海燕の耳に届く。

雨が降っているのは一護の母親と海燕の妻が死んだ日と同じ。

さらに言えば、海燕が死んだ日でもある。

勿論の事、海燕は現世で霊子が再構築され、蘇っているので、海燕が死んだ日は関係がない。

「畜生……」

一護の声が口から発せられ、雨の中に消える。

海燕は未だ目を覚まさず、雨のせいで呼吸の音も聞こえない。

「あの日も、お袋を護れなかった。今日もルキアを護れなかった。

俺は“一護”なのに」

一護は嘆き、己の無念を呪う。

“何か一つを護り通せるように”とつけられたこの名に泥を乗ってしまった。

母親からつけられたこの名前に。

「畜生、何でだよ……」

頬につたう雫は雨なのか、それとも 涙なのか。

一護は意識が遠のき、そのまま気絶する。

「ずいぶんと派手にやられましたねえ……」

聞き覚えのある、胡散臭いあの男の声。

雨が、止んだ気がした。

一護が目を覚ました場所は浦原商店の客間。

体はいつのまにか人間に戻っており、襖が開いたと思ったらそこからコンが姿を現す。

「おい！大丈夫か一護！！まったく、派手にやられやがって！やれやれだな！！」

ルキアが連れて行かれたのが知らないのか、否、知っていて、尚一

一護に明るく振舞うコンの表情は若干曇っており。それでもコンは一護を責めようとしない。

「何で……だよ」

一護が小さく呟くとコンはああ？とぶつきらぼうな返事をする。

「何で、責めねえんだよ？お前にとつてルキアは……」

そう言いかけた途中でコンは一護の顔面に蹴りを食らわす。

「そつだ！おめえ等が姐さんを助け損なったから………次は絶対助けるんだろ！！間違ひなく助ける！絶対助ける！！やれ助ける！！」

コンなりに励ましているのだろうか、身振り手振りを交えて一護に喝をいれる。

そんなコンの頭を掴んで一護はコンに笑いかける。

「つたりめーだ！！今すぐにも助けに行つてやる！！」

一護とコンが騒いでいる間に開きかけだった襖が一気にガラガラと開く。

「うっせーぞお前ら！オイ一護、浦原さんが呼んでつからこつち来い」

海燕は一護を連れて浦原のいる応接間へと足を進める。

「どうもお！黒崎サン。目が覚めたようだなにより。少し話があったのでそこに座ってください。」

浦原に誘われるまま、浦原の向かいの席へと座る。

海燕も同様で、一護と浦原の中間の席に座る。

「さてさて、朽木サンは尸魂界に連行された訳ですが……お二人は勿論、助けに行くんですよね？」

浦原の問いに、一護と海燕は声を揃えて当然、と言う。

よろしい、と浦原が頷くと突然、卓袱台の上に黒い猫が姿を現した。「うお、化け猫！？」

一護がそんな反応をすると一護の顔面に三本線の傷が刻まれる。何処かで見えた様な光景に、海燕は思わず苦笑する。

この夜一サンという名前の猫は人型に化けることが出来る。

尤も、人型の方が本来の姿なのだが、今はそこはどうでもいい。

夜一によるとルキアの処刑は今よりもっと後の日付であり、その間に一護と海燕に修行を施すとの事。

一護は浦原に、海燕は仮面の軍勢に。

一護の目標は誰かを斬る覚悟を手に入れること、海燕は虚化の習得とあともう一つは浦原が口に出さないため、今現在にはわからない。

修行の開始は一週間後から。

それまで二人は傷を癒すことに専念した。

燕と母は修行をはじめ（後書き）

海燕の修行は虚化ともう一つ、今は言えませんが、その単語自体はブリーチを読んでいる方なら知っていると思います。

燕は敵を打つ（前書き）

一昨日まであんまり投稿出来ていなかった為、今日は二つ投稿します。

燕は敵を打つ

海燕は現在、仮面の軍勢の元で虚化の訓練をしている。虚化し、暴走した海燕を仮面の軍勢のメンバーが抑える。

そこまでならいつもと変わりがないだろう。

だが今回は仮面の軍勢の虚化を解禁している。

その理由は今回の虚化が何時より激しい者になるだろうとの予測だ。海燕がシュリーカーと戦っている時に出た虚の力は海燕に頭痛を催す程度の物だが、つい先日、白哉と戦った時は表に虚の人格が出てしまっていた。

それはつまり内なる虚の力が上がった事を意味するだろう。

勿論、それは海燕自身が強くなったから、それに乗じてメタスタシアも力を増したに過ぎないのだが、今度虚化の訓練をする時は前に上に暴れると予想された。

そしてそれは予想から現実に変わる。

「こ、こんのハゲ！！なんちゅう霊圧ぶちかましとんねん！！」
鬼のような仮面を装着し、虚の姿そのものとなった海燕に斬りかかる。

海燕は嘗てのメタスタシアの様な姿になり、ひよ里に虚閃を放つ。

ひよ里は素早くそれを回避し、海燕の足を一閃する。

「グオオオオ！！」

口を大きく開け、咆哮を上げる。

それはひよ里を怯ませ、動きを止める為の物だった。

しかしひよ里は元護廷十三隊の十二番隊副隊長。

海燕と同じかそれ以上の戦線を潜り抜けた彼女にはその様な小手先は通用しない。

「そんなん効かんわ！ホンマにハゲた面しよってからに！！」
隙を見せた海燕に今度はひよ里の方が虚閃を放つ。

それは海燕の体にヒットし、数秒、動きを怯ませる。

「ひよりん！交代だよ！」

白ましろが結界の中に入り、某ライダーヒーローの様なバツタを思わせる仮面を装着する。

「カイン！手加減しないけど死なないでね！行くよ、白キック！」

それらしくポーズを構え、海燕に攻撃する。

「超スーパー・白キック！！」

次に先ほどの蹴りよりもさらに強力な技を繰り出す。

尤も、見た目は先ほどと同じである。

「スーパーウルトラ白キック！ダイナマイト白キック！えーと、スペシャルデリシャス白キック！」

技名こそ違うものの、全て同じ技であるのは言うまでもなく、しかしその蹴り技で海燕を追い詰めていく。

「止めはあゝ虚閃！！」

虚特有の閃光を放った白は「ビクトリー！」と言いながらガッツポーズを構える。

「さーてカインはどうなったかな？」

テクテクと海燕に近寄り様子を見ようとす。

「馬鹿！！近づきすぎだ白！！」

拳西の忠告は既に遅く、白は海燕に吹っ飛ばされる。

「……丁度一時間や白、交代するで」

リサが先程の白と同じように十字模様の入ったダイヤ型の仮面を装着する。

海燕は頭に生えている触手の様なものを伸ばし、リサを威嚇する。

「生憎と触手プレイは興味ないけど、戻ってくるまで相手したるわ！！」

“外”で仮面の軍勢と虚化した海燕が戦っている中、“内”では生身の海燕とメタスタシアが内在逃走を繰り返していた。

海燕はメタスタシアに触れないで戦うため、鬼道や桜花の能力だけ

を駆使して戦っている。

「これでも食らええ!!!」

詠唱破棄で破道の三十一、赤火砲を掌から放つ。

海燕は死神なる前、霊術院生の頃からその秀才ぶりを発揮していた。入学から三ヶ月で始解を習得し、八ヶ月で鬼道は詠唱履きで六十番台まで放つことが出来る。

七十番台も詠唱付きなら出来る為、護廷十三袋は非常に惜しい人材を無くしたと言えよう。

「掬花あ!!!」

斬魄刀の先端から水流を放ち、メタスタシアに撃ち放つ。

「効かんわ!!!」

対して、メタスタシアも“掬花”から水流を放ち、相殺しようとする。

その威力は互角、海燕とメタスタシアの霊圧、霊力は繋がっており、海燕が強くなればメタスタシアもそれだけ強くなる。

このままでは埒が開かないと海燕は水流の威力を保ちながら鬼道の詠唱を放つ。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ……」

対して、メタスタシアは死神の訓練を受けていないため、鬼道を使用することが出来ない。

しかも海燕が鬼道の詠唱をしている事に気付いていないため、水流を止める事は無い。

「破道の七三、双蓮蒼火墜!!!」

互いの放った水流とは別に、その横から二本の蒼い閃光がメタスタシアに向け撃ち放たれる。

鬼道を回避すれば水流が襲い、水流を回避すれば鬼道がメタスタシアを襲う。

仮に両方とも回避する事が出来ても、その時に大きな隙が生じて海燕に急所を一突きされるだろう。

『己れええ!!』

結局、メタスタシアはどちらとも回避する事が出来ず、さらには左胸を掬花で一突きされてしまう。

尤も、虚に心臓があるのかは不明だが、掬花をグリグリと左胸を掻き乱す。

『ふむ……我の負け、か』

「二度と俺の前に現れんじゃねえ」

メタスタシアはフン、と鼻を鳴らしたあと、黒く変色し、消えていった。

現実世界では、平子が虚化した海燕と戦っていた。

しかし突然、海燕の動きが停止し、虚化した体に罅が入った。海燕が、虚を克服した瞬間だった。

燕は敵を打つ（後書き）

克服するのが早すぎ、というツッコミはご勘弁。

この後ソウルソサエティ言ってルキア助けて〜という流れがあるの
で、

ノンビリやっているとグダグダになってしまうのです。

燕は猿女と戯れる（前書き）

猿女、まあお分かりだとは思いますがひよ里です。

所で最近知ったのですが、BLEACHに出てくる死神や人間の名字って実際にある名字だけ使っているらしいですよ。

藍染さんとか、日番谷さんとか実際にいるんですねー？

皆さんの周りにはそういう名字の人いますか？

燕は猿女と戯れる

海燕は虚化を習得した後、仮面を装着し、ひよ里と特訓という名の喧嘩をしている。

勿論、ひよ里も仮面を装着しており、喧嘩の様子は殆ど互角で、ひよ里が僅かに押している位だろう。

ひよ里の仮面の口が大きく開き、破壊の閃光、虚閃が発射される。それを海燕は挨拶から水流を放ち、相殺させる事でそれを防ぐ。

「なんやねん！そんなしょっぱい攻撃しか出来んのかいな！！」
ひよ里が挑発気味にそういうと海燕は顔を顰める。

そして水流を放った上で、仮面の口内から虚閃を放つ。

「ゲツ！！何時の間に覚えたんやそんなもん！！」

蒼い色をした虚閃と水流は混ざりあい、一本のレーザーとなる。

それは連射は出来ないものの、持続時間が長く、実戦向きの技だった。

しかし、虚閃が撃てるのは虚化が有ってこそその攻撃である。

【ピシ】

「あ」

つまり虚化が切れてしまったら、この攻撃は即座に使用不可となってしまう。

「ようやったなあ？ハゲツバメ、コラ」

ひよ里が拳をバキボキと鳴らして海燕を威嚇する。

それでも海燕は怯むことな無く、鬼道を放つ。

「破道の五四、廃炎！！」

円盤状の炎の塊がひよ里に向け発射されるが、ひよ里は自身の斬魄刀、鹹大蛇くひきりおろちの一振りですそれを掻き消す。

「己の虚化が切れてる時点で、この勝負はついとんのや、ハゲエ！！」

鹹大蛇を携えたまま、下肢に反動を付けて大きく跳躍する。

そして海燕の頭上まで飛ぶと

「オラオラオラア！！これで終いやあ！！」

両足を海燕の顔面に向け、激しく踏みつける。

ひよ里曰くこの技の名前はガトリング地団駄じだんだ、らしい。

激しい蹴りの連打を食らった海燕は重力の関係でそのまま地面に膝を付き、ひよ里は止めとばかりに米神を蹴り上げる。

「……三十分、休憩したらもう一戦やぞ、覚悟しとき」

ひよ里の言葉は既に海燕の耳には届かず、海燕は遠い世界に旅立っていった。

虚化の訓練を一カ月もすれば段々と上達していき、元々海燕に才があつた事から、今では十八時間以上、虚化を保つまでに至つた。

「ハッ！！ウチのお蔭やな、感謝しとき！！」

ひよ里の言葉に適当に返す海燕の元に、平子が歩み寄る。

「海燕、浦原が何か用があるって言つとつたで？なんか修業第二段階とかなんとか、よう分からんけどな」

平子の言葉に海燕はやつとか、という表情をする。

浦原の言っていた修業第二段階、とは海燕には今まで教えられず、有耶無耶になつていたのだが、此処に来てやつと教えて貰えるようだ。

海燕は浦原商店へと、浦原の話聞きに行った。

燕は猿女と戯れる（後書き）

修行第二段階、まだまだ秘密です。

燕は故郷の土を踏む

今現在、海燕、一護、チャド、井上、石田、夜一の六名は断界だんがいと呼ばれる現世と尸魂界の間にある通路を走っていた。

海燕達は一ヶ月の修行が終わり、遂に尸魂界へと潜入する日がやってきたのだ。

戦闘を夜一が走り、その後で海燕、一護、チャド、井上、石田という順に走っている。

夜一は勿論、海燕と一護は瞬歩を使える為、先に行っても良いのだが、瞬歩が使えないチャド達に付き合っ走っている。

因みに、滅却師である石田も、飛廉脚ひれんきゃくという高速移動術を使えるのだが、

彼も皆に、主に井上に合わせて走っている。

途中、後ろから拘突こうとつと呼ばれる侵入者排除気流が後ろから追ってきたため、さらに力を入れて走らなければいけない。

拘突が石田のマントを取り込み、石田本体每引きずり込もうとしたのだが、チャドがマントを引き千切り、石田を担いで走るというフインプレーを見せ、さらに井上が自身の能力、盾舜しゆんしゆんりゅうか六花からの三天結盾を発動し、拘突を食い止める。

勿論それは立花本体が触れれば井上も飲み込まれるという一種の賭けだった。

尤も、井上自体はそれに気づいていない様だが。

「もうすぐ出口だ!!」

海燕が叫び、全員出口めがラストスパートを掛ける。

光の中に入り、たどり着いた先は

空中。

海燕を一番下に、一護、チャド、井上、石田と落下していき、積み重なるように地面へと落ちる。

因みに、夜一は猫特有の身体能力で華麗に着地した。

「あ！黒崎君、格好が芸術的!!」

「うるせえよ……」

一護の落下したあとのポーズをみてそういう井上。

悪気が無いのは分かっている為、一言だけで終わらす。

「此処が尸魂界か……江戸時代の様な風景だ」

石田がそう言うのと海燕はそれについて説明する。

尸魂界にある物は凄く限られているからな、だからいつまで経っても文化が発展しねえんだ」

何でもない様に話す海燕の表情は何処か穏やかで、故郷に帰ってきたからか背筋を気持ち良さそうに伸ばす。

「おい、ひよつとしてあつちが死神の暮らす瀨霊廷つてやつか？」

そういつて走り出す一護は一番乗りー、とまるで子供の様に走る。

すると空から無数の壁が落下し、一護の侵入を防ぐ。

さらに死神だろうか、巨人を思わせる程の体躯を誇った男が壁と共に降ってくる。

「なんだ、オメエらは、さでは旅禍しゅいかだなや？」

この死神の名前は？丹坊じたんぼう、瀨霊廷西・白道門の番人。

？丹坊の下に海燕が歩み寄り、おい、と声を掛ける。

「おい、？丹坊！俺だ、海燕だ！！俺に免じて通してもらっちゃ駄目か？」

「え、え、えー！？海燕さん、何で、死んだ筈じゃ！？生きてただ

か！？」

取り乱す？丹坊を海燕は手を合わせて頼み込む。

「頼む！！どうしても俺達は此処を通らなきゃいけねえんだ！！」

海燕の言葉に？丹坊はすまん、と頭を下げる。

「海燕さんの頼みと言えども、オラは門番。門番が侵入者を通しちゃならねえだ」

そうか、と肩を下げる海燕を見て、？丹坊は何かを考える。

「海燕さん、どうして蘇ったか知らねえけども、あんたがやるうとしての事は決して間違っちゃいねえはずだ。海燕さん、何をしてるか知らねえけど、頑張ってください……」

深々と頭をさげる。丹坊に海燕はおう、と手を上げて答えた。

燕は故郷の土を踏む（後書き）

第二段階の修行どうした！というツッコミはご勘弁。描写はしておりませんが、もう完了しました。

まあ。焦らしている訳ですよ。
そんなわけでノシ

燕と鶴と鷺の再会（前書き）

総合評価がもうちょいで70まで達するので調子に乗って一日で二話投稿。

燕と鶴と鷺の再会

現在、海燕達は西流魂街の村長の自宅にお邪魔している。

村長は最初こそ海燕に対して驚いたものの、事情を話せば納得

する筈もなく、余計に驚いた。

夜一が村長にとある人物の居場所を聞き、村長がそれを聞く前に驚愕する。

瀨霊廷には“あれ”で行くのかと、驚愕の色を隠せないでいる。

因みに海燕には夜一の探している人物も、村長が言う瀨霊廷に行く方法も良く知っている。

そう、よく知っているのだ。

「まさかあいつの手を借りて……なあ」

海燕は感慨深そうに言いながら苦笑する。

それを見て一護は一体誰なんだ、と尋ねる。

「前に話し事あるだろ？志波空鶴っていつてな、俺の妹だ」

「ええええええ！！」

夜一以外の全員の驚いた声が重なり、海燕は耳を塞ぐ。

「あいつ、俺が生き返ったって知らねえからな……どうすっかな」

頭をガシガシと掻きながら考えるように言う海燕を他所に夜一と村長は話を進める。

そんな中、外からドドドドドド、と動物が走るような音が聞こえてきた。

その動物は猪、しかも普通の猪より巨大な体をしており、その上には人間が乗っている。

「よう、爺！！相変わらず元気そうだな！！」

猪に跨った集団のリーダーらしき男が壁を破壊しながら登場する。

海燕はその男をみて、何故か失笑する。

家の周りにいた流魂街の住人は全員その場を離れ、此処にいるのは一護達と暴走族の様な集団と村長だけになってしまった。

オブリエの飾つてある家。

海燕はあちゃー、とばかりに表情を曇める、岩鷲も冷や汗を掻きながらイソイソと家の中に入っていく。

それに続いて一護達は足を進めるのだが、勿論本位では無い。

「姉ちゃん！今帰つたぜ！！」

ガラガラと空鶴の部屋の襖を開けると、酒瓶が岩鷲の顔に直撃する。

「おせえ！！今何時だと思つてんだ馬鹿野郎！！」

空鶴の姿は隻腕に豊富な胸と、何とも個性的な姿をしていた。

そして例の如く、空鶴は海燕を見て驚愕する。

のだが、此処からが他の人間とは違う反応をした。

「……………」

何時もは強気な性格をしているであろう思われる空鶴の目には涙がこぼれ落ちた。

「お、鬼の目にも涙……………」

余計な事を言つた岩鷲への鉄拳制裁を忘れること無く海燕は空鶴に近寄る。

「なん……………で？」

「色々あつてな、説明はめんどくせえから省くが、今此処にいるのは間違いなく俺だ。心配かけて悪かつたな、空鶴……………」

海燕が空鶴の頭を撫でようとしたその時、海燕にとって予想外の出来事が起こる。

空鶴の左腕が海燕の頬を捉えたのだ。

「……………虚なんかには乗つ取られやがって、よくもぬけぬけと帰つてこれたな！テメエほんとに副隊長だったのか！？都さん殺されて、仇も取れずに自分も死んじまいやがって！！触んじゃねえよ！！腑抜けが映る！！」

一頻り空鶴がそう言つた後、海燕は体をプルプルと揺らし、握り拳を作る。

「ああ！？折角生き返つた兄貴に言う言葉がそれか！？上等じゃねえか！俺の強さを体に叩き込んでやる！！覚悟しやがれ！！愚妹が

「！！」

その後、二時間ほど何故か岩鷲を巻き込んだの兄弟喧嘩に発展し、志葉家が崩壊しかけたのは完全なる余談である。

燕と鶴と鷺の再会（後書き）

なんか台詞ばっかになってしまった今回、空鶴の反応に関しては、しみりとさせようかそうじゃないようにしようかで迷ったのですが、しみりとさせても感動を誘うだけの文才が僕には無いので、ギャグで終わらせました。

燕は飛んだ（前書き）

朝起きたら総合評価が82ポイントに……眠い目を擦りながら二度見しました。

感謝です（T T） アリガトウゴザイマス

燕は飛んだ

志波家の三人が殴り合いの蹴り合いをしている間、一護達は志葉家の使用人の金彦くろがねひこと銀彦くろがねひこに別室に案内され、喧嘩に巻き込まれない様にしていた。

「全く……理解に苦しむね」

呆れた様に呟いたのは石田だ。

「兄弟で再会したのなら、素直に喜べばいいんだ」

石田の発言に一護達は頷き、同意する。

「でも、ああいうのって何かいいなあ……」

突然の井上の発言にギョツとする一護だが、彼女が少しズレているのは何時もの事なので適当に流すことにする。

ガラガラと襖が開き、部屋に入ってきたのはボロボロの姿の空鶴と瘤や痣が体中にある海燕、そして最早元の顔の形が解らないほどにまでやられた岩鷲。

こうして見るとある意味での力関係とも見て取れる。

「さて……飯にするか……」

何毎も無かったかの様に、使用人達と岩鷲に夕飯の支度をさせる空鶴の姿に全員失笑したのは内緒の話である。

全員で夕飯を食べた後は、何故かそのまま宴会となっていた。

「空鶴さん、海燕さんが帰ってきてきてやっぱり嬉しかったんだね！」

【ゴン！！】

井上の頭に拳骨と言う名の隕石が落下した。

その主は勿論空鶴だ。

「ば、馬鹿言っつてんじゃねえよ！！あんな馬鹿兄貴帰っつてきてもぜんぜん嬉しくねえよ！！馬鹿言っつてんじゃねえよ！！」

大事な事だからだろうが、二回同じ事を言った空鶴は完全に酔っ払

っており、目も据わっている。

因みに、一護達は未成年なので、飲酒はしない。

「岩鷲　！踊れー！！」

「うおー！！」

海燕と岩鷲も完全に出来上がっており、飲酒をしていない者達にはついていけないテンションとなっていた。

これは一種の混沌カオスとも言えなくもない。

翌朝、昨夜あれだけ酒を飲んでた筈の志波家の兄弟は二日酔いには掛からず、ケロッとしていた。

海燕曰く、二日酔いに効く漢方薬がある、との事だ。

一護達は空鶴に花鶴射法という、瀟霊廷に侵入する為の玉の説明をする。

霊珠核れいしゅかくという玉に靈力を込め、周りに靈力の膜を発生させる。

そしてそれに乗って瀟霊廷へ侵入するというのだ。

因みに、瀟霊廷の空中と地面の下には靈力のバリアーが貼っており、今回の花鶴射法はそれを破る為の物である。

瀟霊廷へ行くメンバーは海燕、一護、井上、チャド、石田の五人

と岩鷲を合わせて六人。

岩鷲は兄貴の約に立ちたい、兄貴に自分が成長した所を見せたい、という理由で付いてきたのだが、戦力は多いほうがいいので、拒みはしない。

大砲の中で霊珠核に靈力を込め、膜を形成する。。

それを空鶴は詠唱を唱え、一護達を打ち上げる。

途中、岩鷲が詠唱の続きを唱えて弾道を安定させる。

だが、一護の靈力のコントロールが拙い為、途中途中で仲間文句を言われる。

その結果、岩鷲の気が散って、詠唱を失敗してしまう。

『わあああつー！！』

全員、悲鳴を上げながら落下する物の、近くにいる者を掴んで
何とか纏まるうとする。

そんな中、チャドと海燕が一人ずつ、単独で瀟霊廷に落ちてしまい、
一同は不安に駆られる事になった。

燕は飛んだ（後書き）

さてさて、一護等は原作と同じ様な戦闘を行います、
原作には既に見ない海燕は……

燕は無双する（前書き）

今回は『スーパー海燕タイム』と称して海燕が無双します。

俺TUEEEEEEE!!!します。

それはそうと、この小説をお気に入り登録してくださった方々、本当にありがとうございます。

30件という数字がとても励みになります。

これからもこんな拙作で良かったらお楽しみください。

燕は無双する

現在海燕は大勢の死神に囲まれている。

因みに海燕は布で顔を隠している為、誰も海燕だとは気づかないでいる。

尤も、この中に海燕を知らない死神がいる可能性も否めないが。

海燕は刀を使わず、鬼道だけで周りの死神を蹴散らしている。

刀を使うと海燕の正体がバレる可能性があるからだ。

尤も、隊長格と遭遇した場合は使わざるを得ないのだが。

因みに海燕自身は正体がバレても良いのだが、夜一があまり面倒事を起こすなど、無理矢理装着させたのだ。

「破道の三十三、蒼火墜！！」

少し強めの鬼道を放つだけで死神達は戦闘不能になって行く。

恐らく席官ですらない、一般隊員の死神なのだろうが、あまりの軟弱さに海燕は不安を覚える。

「オラア！！」

鬼道の次は白打で一人ずつ確実に倒していく。

副隊長を務めた事のある海燕にとっそれは余りに容易く、同時に罪悪感も少なからずある物だった。

そんな中、その場に副隊長クラスの霊圧が二つ現れ、海燕は内心舌打ちする。

「何だデメエは……死神の様だが、何で仲間をぶん殴ってやがる？」

九番隊副隊長檜佐木修兵が刀を携えたまま、海燕の方を見る。

「少なくとも三席、いえ副隊長程の実力はあるようですが、この状況ではどうしようも無いでしょう？大人しく投降してくれると助かります」

ぶつきらぼうな言い方をする檜佐木とは対照的に、飽く迄穏やかに交渉しようとする三番隊副隊長、吉良イヅルに海燕は声を出す訳にはいかないので無言で刀を構える。

それを見た吉良は表情を顰めて、此方も刀を構える。

一方、檜佐木も刀を構えた後、吉良より先に海燕に斬りかかる。が、海燕はそれを人差し指と親指で挟むだけで受け止め、檜佐木に蹴りを食らわす。

「な……」

霊圧の程は余り大差が無い、両者の違いは経験である。

海燕は死ぬ前に副隊長としての経験を積んだ後、一度死んで仮面の軍勢と戦って戦闘経験を得た。

尤も、海燕は現在少なからず霊圧を抑えているのだが。

そしてルキアを救出する為に修行したのもあって、その力は隊長格に迫るものがある。

今現在、尸魂界に存在する、隊長意外の死神で一番強いのは海燕と行っても過言では無い程に。

海燕は檜佐木の刀を自身の、解放前の刀で弾き、その腹に鬼道を放つ。

「破道の三十一……赤火砲」

声の判別がしづらい様に小声で鬼道の名を呟く。

後ろに吹っ飛んだ檜佐木を尻目に、今度は吉良に斬りかかる。

「く……縛道の三十、嘴突三閃しとつみんせん！！」

咄嗟に放った鬼道だが、それは海燕が瞬歩を駆使した事により回避される。

「面を上げる！侘助」

刀の解放をした吉良だが、その斬撃は悉く海燕に回避され、瞬歩で後ろに回られて斬られる、とその繰り返しだった。

「その斬魄刀……侘助は斬った物の重さを二倍にする、一回斬ればその倍、二回着ればそのまた倍、相手は地面に跪き、頭を差し出すようにする事から侘助、だろ？」

思わず口を開いてしまった海燕だが、咄嗟に声色を変え、誤魔化す。人間もそうだが、死神もずっと言葉を発さないという事は難しいのである。

「何で、知っている？」

吉良の驚愕した表情を無視し、胴体に先程の檜佐木と同じく鬼道を放とうとするが、それはどこからか飛んできた鎖に繋がった鎖によって防がれる。

檜佐木の斬魄刀、風死である。

自身の刀に絡まった鎖を引っ張り、檜佐木を引きずり込んで、緩んだ所を素早く腕を抜く。

吉良と檜佐木の二人は戦闘経験は薄いわけでは無い。

檜佐木は寧ろ豊富な方だ。

だがそれ以上に、海燕の経験と才能が純粹にそれを上回ったのである。

現副隊長を刀を解放せずに圧倒している“元”副隊長の海燕だが、此処に近づいてくる隊長格の霊圧に気づいたときには思わず冷汗が頬を伝った。

「射殺せ……………神槍」

遠くから、その姿が視認出来るか出来ないかの距離から槍の様な斬魄刀が伸びてきた。

それを何とか弾き飛ばした海燕だが、その威圧感に思わず眉を顰めてしまう。

「市丸……………ギン」

現世ヘルキアを捉える為に姿を現した隊長格の死神、市丸ギンがゆっくりとその場に姿を現した。

燕は無双する（後書き）

やりすぎでしょうか。
いいえ誰でも。

毎日仮面の軍勢との戦闘訓練しかしていない海燕。
戦闘もしているけどデスクワークの方が多いと思われる副隊長二人。
しかも檜佐木は要の滯霊廷通信のお手伝いで忙しいので、
どうしても海燕より弱い、とは言いませんが、戦闘経験が不足して
すまいません。

上記の点や文面について何か可笑しい所、気になる所、気に入った
所等ありましたら、いつでもご感想をどうぞ。
勿論評価もお待ちしています。

では最後に……カイエンキタ

（。。）

！！

燕は花弁を舞わせる（前書き）

総合評価100pt突破記念にて二個目の投降。

唯今回の話は読者の皆さんからの反応が怖いものとなっております。
ああ、反応が怖い。

燕は花卉を舞わせる

不気味な笑みを絶やさずに、狐のような目を此方に向けるギン。それを海燕は斬魄刀の構えを崩さずに、静かに待ち受ける。

脇差の様な刀をポンポンと手のひらに弾ませながら此方を睨む。

否、睨んでいるのではなく、品定めをするように、舌舐めずりする蛇でも幻視しそうな威圧感を放ちながら此方を見る。

「君、志波海燕やる？」

顔を隠していたにも関わらず、いきなり自分の名を言い当てたギンに戸惑いを隠せずに、刀を握る手を強める。

「技術開発局の人等に調べて貰ったんやけどな、君の霊圧、志波海燕と全く同じなんよ、ていうか、本人やる？」

これ以上隠しても無駄と判断した海燕は自身の顔を隠す布を取り、懐にしまう。

海燕の素顔を見た檜佐木と吉良は見覚えのある顔に驚愕の色を隠せない。

「君、死んだ筈なのに、何で生きてんや？教えてくれる？」

飄々としたその態度に海燕は警戒心を緩める事無く、ギンを睨みつける。

「だんまりか……ほな、牢屋にいれた後で聞くことにするわ。イツル、修兵君、手え出したらあかんで」

瞬歩を使い、海燕の目の前に移動する。

間合いの短い脇差を素早く、海燕の体に突き刺そうとするが、海燕はそれを何事でも無い様に防ぐ。

海燕は後方へ瞬歩で移動し、解放した掬花から水流を放つ。

「へえ、解号無し……？」

ギンはそれを意味する事を理解したのか、にんまりと口角を吊り上げる。

「降り注げ、やじりあめ 槍紗雨」

ギンは天に向け神槍を伸ばし、それを雨のように、海燕の頭上へと降らせる。

海燕は僅かながらにそれを喰らいながらも挨拶を回転させて防御する。

「ほら、隙ありや」

挨拶を頭上に掲げている海燕の腹目掛け、縮めた神槍を突き刺そうとするが、海燕は咄嗟に体を横にずらし、急所を守る。

「グウ……」

海燕は顔を顰め、傷口を庇うように手を当てる。

急所は避けた物の、刃物が体を貫くというだけで、それは大怪我になりうるのだ。

「面白いなあ、自分？」

瞬歩で先ほど立っていた場所に戻ると神槍を手の平で弄ぶ。

「でも、そろそろ決着つけへんと、上に怒られるんで、そろそろ決着つけよか？」

そういうと、ギンは静かに口角を動かした。

“ 卍解 ” と

かみしこのやり
「 神殺鎗 …… 」

卍解とは、死神の斬術技能においての最強戦術で、それを発動している間はその者の霊圧は五倍から十倍となる。

ギンの卍解には、形状の変化こそ無いものの、それから発せられる霊圧から、卍解が成功したことが伺える。

「 卍解か …… それならこつちもそれなりの事、やらせてもらうぜ 」

ええよ、別に、と特に止める様子のないギンだが、その目は確実に海燕を捉えている。

海燕は自身の顔に手をおき、黒い霊圧を纏った後、掻き毟る様にする手を放す。

海燕は実践において初めて虚化を使用した。

その仮面は無表情な眼、口、鼻がついており頭から首全体を覆う、メタスタシアの顔と全く同じ形をしていた。

唯一つ違つところは、頭の触覚が一本残らず白いという事か。

『行くぜ』

地に響くような声と共にギンに斬りかかる。

それは後ろで傍観している檜佐木や吉良ですら目で追えない速さなのだが、ギンは涼しい表情でそれを防御している。

『掬花・沈丁花の舞』

掬花と共に自身も回転するようにギンを斬りつけていく。

回転の中には刀から発せられる霊力も混ざっており、刺刺しい物となっている。

さらに間髪入れずに海燕は攻撃を加える。

『掬花・彼岸花の舞』

次は六回にも及ぶ、連続攻撃にて、ギンを圧倒する。

『神殺槍“無踏”』

此処でようやく、ギンが反撃に成功するのだが、それは海燕の横腹を掠めるだけで、海燕の猛攻を止めるには至らなかった。

『これで終いだ』

止めとばかりに海燕がギンの腹に掬花を突き立てる。

『掬花・金盞花の舞』

切っ先から水の弾を発射し、ギンの腹へと撃ち放つ。

それは唯、水流を放つより攻撃力に優れており、隊長格の死神を吹っ飛ばす事に成功した。

『悪いな、先に行かせてもらうぜ』

仮面を取った後で、惚ける檜佐木と吉良の目に終えぬ程の瞬歩で先へと進んだ。

燕は花弁を舞わせる（後書き）

今回の話も読者様の反応が怖いんですが、
次回とそのまた次回もストーリーがはっちゃけてるんですよ……。
海燕が　　したり、　　が、　　したり。
ストーリーを変えようにももう頭の中で出来上がってるからそれ以外に思いつかない……反応が怖すぎる……

燕は卍を解する(前書き)

怖い怖い怖い。

反応が怖い。

最近こればつかです……でも今更変える訳にはいかずONZU

燕は卍を解する

一部損壊した壁の瓦礫の上に倒れている三番隊隊長、市丸ギン。彼は先ほど海燕に吹っ飛ばされ、その足を進める事を許してしまつた。

ゆっくりと起き上がるギンは頭に手をやり、ポリポリと搔く。

「あー、僕、やられたんや？」

対して怪我等は負っていない物の、海燕を先に行かせてしまった。それををやられた、と表現したギン。

「イズル、報告しとき、旅禍の中には隊長格を容易く出し抜く輩がいます、つてな」

イズルはハイ、と簡潔に返事をし。瞬歩でその場を立ち去る。因みに檜佐木は既に自身の隊の隊長に報告をしにいつている。

「ホンマ、面白い子や。これならあの人も気に入るやろ……」

狐のような目を吊り上げ、不気味に笑うギンに誰も気づく者は今現在此処には存在しなかつた。

ルキアの居場所は海燕も既に把握済みだ。

懺罪宮という、死刑囚が容れられる牢屋である。

其処の窓から自分を処刑する為の、窓の向こうの丘にある双極を眺めることで自身の罪の深さを悔いるという、海燕からしてみれば胸糞の悪い設備だ。

元護廷の死神であつた海燕は勿論その場所、それを開けるための鍵の保管場所も把握済みであり、鍵は既に門番から奪つてある。

懺罪宮へと階段を上がる寸前、海燕に無数の針状の刃が飛ばされる。

「お前が先程の報告にあつた市丸を倒したという輩か？」

盲目だからか、自身の両目を隠した男が海燕に刀を向ける。

九番隊隊長、東仙要とうせんかなめである。

「倒しちゃいねえよ、少し吹っ飛ばしただけだ」

「問答無用……！！！」

要は自身の刀で海燕の身体を切り裂くために、攻撃を加えるが、その全てを海燕は防御する。

「正義の為なら……殺戮も止む無し！！！」

語尾に力を入れて海燕の横腹を切り裂く。

そこは先程ギンの神殺槍が掠めた場所であり、傷口が広がってしまった。

「グ……」

海燕は苦痛に表情を歪めながらも、要への攻撃の手を緩めない。

「何故足掻く、正義という大儀の元には全てが無意味だと言うのに

……」

「正義正義うるせえよ！！！」

突然の海燕の叫びに、要は一瞬たじろいだが、直ぐに表情を元に戻す。

「正義なんて言葉、チャラチャラ口にしてんじゃねえよ……！！！」

海燕はそう吼えた後、仮面を装着して要に斬りかかる。

その動きは先ほどよりも素早く、力強い物となっていた。

「なんと醜悪な……」

要の刀を上弾いたあとで、水流を要の胴体めがけ発射する。

要は吹っ飛ばされる寸前で瞬歩を駆使して海燕の頭上に飛ぶ。

だが、海燕は最初からそれを分かっていたかのように回避し、逆に

要の腹を貫く。

「やむを得まい」

要は苦痛に呻く事なく、冷徹に言葉を発する。

「許せ……これも正義の為だ」

要は自身の刀、清虫から超音波を発し、海燕の鼓膜を刺激する。

『うっ……』

耳から血を流しながらも、海燕は要に武人の如く自身の刀を向ける。

それは桜花・金盞花の舞の構えであり、その構え通りに水弾を発射する。

鋒から水の弾を発射する海燕だが、要はその水弾に刀を差込み、振動を与える事で破壊する。

次に、霊圧を纏った回転を行う沈丁花の舞だが、要は刺刺とした霊圧の膜の中に、刀を差込み、正確に抜花の動きを止める。

「抜花……」

彼岸花の舞に関しては、発動する前に破られ、肩から腰まで斜めに一閃される。

しかし、体の所々から血を流した海燕の目は絶望に浸る事なく、未だ希望が有るかの様に瞳の炎を滾らせている。

「何故朽木ルキアを助けようとする？仲間だからか？そんな正義を掲げる権利はお前達には無いというのに」

悪態をつく海燕に、要が問いたです。

普段の彼なら、そんな事は聞かず、問答無用で切り捨てていただろう。

問い正し、その答えを聞いておきたい、要はそう思ったのだ。

「朽木は俺の大切な仲間だ。其処はなんと言おうと変りはねえ。喩

え俺達が“悪”だとしてもな」

「そうか……」

驚嘆も失望もせずに、ただ刀を交えようと右腕を振るう。

あんな感情は今まで要には存在しなかった。

唯唯、過去にあった悲劇を呪うのみであった。

「お前に……全ての力をぶつけようと思う。覚悟をしておいた方が
良い」

今までとが明らかに違う表情をした要は、自身の刀の二段階目の解放を行う。

「卍解……清虫終式・閻魔蟋蟀……さあ、お前の力も見せる……」

要の言葉に海燕は鼻を鳴らした後、刀に力を込める。

「“これ”を使うのはそれこそ初めてだ……訓練でも、実践でもな。上手く制御出来るかわかんねえから、氣い付けろよ？」

海燕は“卍解”と呟き、現世での特訓にて手に入れた奥義を発動す

る。

「せいかいそうか 青海蒼華………ねじばな 掬花………！！」

海燕の持つ刀は三本の捻れた鋒を持ち、死覇装にはローブの様な物が追加され、さらに海燕の周りには水を纏ったヨーヨーの玉の様な物が八つ程浮いていた。

「手加減できねえから………よろしく！！」

海燕は卍解を発動したまま、辺りに水を放った。

燕は卍を解する（後書き）

海燕の卍解、初披露です。

勝手に作っちゃって大丈夫かなーと思いつつも、それなりに強力な卍解を使わせる……

青海蒼華掬花……名前がダサすぎる。

何かこの小説失敗な気がする。

要は原作ではココまで正義正義言ってなかった様な言ってた様な。

参考の為に感想等送ってくれると助かります。

勿論評価もお待ちしております。

どちらもお気軽にどうぞ。

燕は東の仙人を撃破する（前書き）

さて、今回で卅解の能力が発動します。

能力は三つ、それぞれ何があるかは本編にてご覧ください。

燕は東の仙人を撃破する

東仙要の斬魄刀である清虫の卍解、清虫終式・閻魔蟋蟀の能力はその場にいる“鈴虫”本体に触れている物以外の視覚、聴覚、嗅覚、霊圧知覚を封じる能力。

なのだが、要に対する海燕の攻撃は悉く、的確にヒットしている。

それは海燕の掬花の卍解、“青海蒼華掬花”の能力にある。それには先程放った大量の水が関係していた。

海燕の卍解の能力の一つ目、自身の放った水に濡れている場所なら何処にでも瞬間移動できる。

その能力を駆使して、海燕の放った水が要の死覇装を濡らしている所に瞬間移動した刹那に攻撃を加えているのだ。

そして能力の二つ目、掬花本体と周りに浮いている八つの玉は同様の動きをする。

もちろん、海燕自身が意識すれば別々の動きをする事もできる。

そして最後の三つ目、これはごく単純で飛行能力。

但し、死覇装の上から纏っているローブを脱ぐと飛行能力は失われる模様。

『どうした、ずいぶん顔色が悪いじゃねえか』

海燕はそう言うが勿論、視力は奪われており、要の顔色など見えるわけがない。

要はノリである。

『青海蒼華掬花・辛夷こいもの舞』

八つの玉が四つずつに纏まり、それぞれ要に襲いかかる。

さらにその玉からは手裏剣の様な刃が伸び、要の体に突き刺さるとその刃は要の鮮血に濡れる。

しかし要はそれに怯むこと無く、攻撃へと移る。

「破道の五四、廃炎！」

刀の技は既に出尽くした為、鬼道を放った要だが、海燕の放った水流のせいで、円盤状の炎は音を立てて蒸発してしまう。

「く……」

次は純粹な剣術で勝負を挑む要、海燕も正直な性格をしている為、それに応える様に八つの玉は使用しない。

気が付けば海燕の視覚、聴覚等は元に戻っており、それは要が正々堂々の勝負をしたい為なのか、自分でも気づかない内に破られていたのかは、彼しか知る事は出来ない。

「私の負けだ……」

これは普段の要ならば絶対に発さない言葉。

表情も何処か満足げで、穏やかな表情をしていた。

一回ほどバウンドしてその場に倒れる要。

そんな要を尻目に、卍解を解く海燕。

此処で勝負が付き、両者共に傷つき、疲労していた。

「一言良いか？」

要が海燕に向け、言おうとしている言葉は要にとって通常ではありえない言葉だ。

「藍染惣右介には気を付ける……」

その言葉を最後に気絶する要。

要の残した言葉には何が隠されているのか、それは今現在、海燕には確認することは出来なかった。

海燕は懺罪宮へと続く階段へと登っていった。

懺罪宮の牢の前に辿り着いた海燕は弟である岩鷲ともう一人、四番隊第七席、山田花太郎と合流する。

花太郎は、ルキアの処刑に反対しており、旅禍である一護達の目的がルキア救出である為に協力を申し出たのだ。

海燕は此処で四番隊・上級救護班班長である花太郎に自身の傷の治療を頼みたい所だが、この後ルキアを連れて逃走しなければいけないので、残念ながらそれは出来ない。

「開いたぜ、兄貴」

まるで盗賊の様な岩鷲の台詞に苦笑しながらも、海燕はルキアの元へ向かう。

「よお、元気か？朽木！」

何を言っているかわからず、そんな言葉になってしまったが、懺罪宮の壁や天井は殺気石せつきせきという靈力を遮断する鉱石で出てきている為、元気でいる筈がない。

「とにかく、助けに来たぜ……んだよ、もっと喜べよ？憧れの海燕殿が助けに来たんだぜ？」

ルキアの表情は哀しみに満ちており、言葉を紡ごうとすると、涙が出てしまう。

「何故……助けに来たのですか？海燕殿は私を恨んでいると言っていたのではないですか……」

ルキアの言葉に海燕は怪訝そうな表情を浮かべる。

「俺が？何時そんな事言った？」

「海燕殿の内に巣食う虚が言っております……」

“主……海燕、と言ったか？あやつは恨んでおったぞ！！お前のせいで死んでしまった、痛かった、苦しかった、辛かった、となあ！！”

メタスタシアの言葉が、ルキアの脳を過ぎり、肩が小刻みに震える。ルキアの言葉に海燕は盛大に溜息を付き、ルキアの頭を鷲掴みにする。

「だから！“俺”が何時そんな事言ったんだ、って聞いてんだよ。

虚と俺、どっちが信用できる、さあ、言ってみろ！」

濃い下睫毛をちらつかせながら、ルキアを睨む海燕。

ルキアは吃逆混じりに“海燕殿”と確かに呟いた。

「よっしゃ！！そういう事だから、とつとと逃げるぞ朽木！！」

ルキアを脇に抱えると、海燕は急いで懺罪宮を出ようとするが、その瞬間に隊長格の死神が姿を現す。

ルキアの義兄であり、四大貴族、朽木家当主兼六番隊隊長、朽木白

哉が姿を現したのだった。

「流石に隊長相手に三連戦はキツイな……」
これまで市丸ギン、東仙要と二人の隊長を連続で倒してきた海燕。
ギンの方は戦いを長引かせずに直ぐに逃走したから良い物の、要との戦いで負った怪我は決して浅い物ではない。

だが海燕は

「岩鷲、花太郎、ルキアを連れて逃げる」

一人で白哉に立ち向かおうとしたのである。

これまで十一番隊第五席の実力を持つ綾瀬川弓親あやせがわゆみちかを倒した岩鷲であるが、それは決して圧勝ではなく、苦戦の上で倒したので、隊長である白哉とはまともな戦闘にすら成らないだろう。

非戦闘員の四番隊である花太郎などさらに論外。

そうなるに此処を食い止める事が出来る可能性が一番高いのは海燕となる。

「分かりました……海燕副隊長、頑張ってください」

花太郎は正規の死神である為、海燕の事を知っていて、“副隊長”と呼んだ。

「岩鷲、気合入れて逃げるよ？」

飽く迄冷静に、弟に逃げるように促した海燕の眼は白哉だけを捉えていた。

ルキアを抱えて逃げる岩鷲と花太郎が横の階段を降りたのを確認したあと、改めて白哉を見る。

卍解は今の所一日に何ども酷使できる物ではないので、今後の事を考え、今回は使わない。

虚化は自分で解除すれば時間制限はリセットされるので、一回か其処等だが使える。

此方の手札はたったの一枚。

しかも、要との戦いで負った傷が思ったより深く、立っているだけで精一杯、とまではいかないが、今回の戦いでの手ハンデとなるのは

間違いない。

その時、海燕の下にもう一つ。隊長格の霊圧が迫って来た。それは記憶に色濃く残る、自分の死に際にその場にいた男。十三番隊隊長、浮竹十四郎その人だった。

「志波……？」

「浮竹隊長……！」

互いの間にある歯車が少しずつ、音を立てて回り始めた。

それは時に残酷に、時に冷酷な物で、海燕は嘗ての上司を見たまま、動けないでいた。

燕は東の仙人を撃破する（後書き）

主人公最強物では無いんですけどね……どうしてこうなった。

卍解、虚化と習得してお次は完現術でも習得しそうな勢いです。

まあ、海燕は純粹（？）な死神ですから、それは有り合えないですけど。

感想、評価等をお待ちしています。

燕は湯に浸かる（前書き）

こちらへんから原作が一気に壊れていきます。
もう原作ストーリーークラッシュします。

燕は湯に浸かる

海燕と浮竹は互いに見つめ合ったまま、その場を動かさないでいる。とは言ってもそれは変な意味では無く、海燕の方は、自身の尊敬する浮竹との再会に喜びと共に、後ろめたさで、浮竹は何故海燕が此処にいるのか、何故生きているのか、という疑問のせいで互いに視線を外せないでいる。

白哉は、貴族であるプライドからか、海燕に不意打ちをしようという素振りを見せていない。

「何故志波が此処に……？それ以前に生きていたのか？否、そんな筈は無い。お前はあの時確かに死んだ筈だ。何故お前が此処にいる？答えてくれ志波！」

その真剣な面持ちと、必死の問いかけに海燕は心を痛めながら浮竹に一言、謝罪する。

「すみません、浮竹隊長。説明するには、時間が足らなすぎます！」
浮竹がこの場に現れた事で、完全に戦意を喪失した海燕は瞬歩でその場から遠ざかるとする。

だが、浮竹に肩を掴まれ、それは失敗に終わる。

「志波……頼む。答えてくれ」

浮竹の真剣な眼差しに負け、海燕は簡潔にだが自身の蘇った経緯を話す。

「俺は、虚の力で蘇りました……一度死んだ後に俺の体に乗っ取った虚の霊子を吸収する事で……」

驚愕する浮竹を他所に、白哉が浮竹を押し退け、海燕に刃を向ける。「昔話はそれで終わりだ……兄が何故掟に歯向かうのか分かり兼ねるが、その幕を引かせてもらおう。」

白哉が海燕の左胸に刀を突き立てようとした瞬間、それを制止する者がいた。

それは浮竹では無く、一護だった。

突如この場に現れた一護によって海燕の命は救われるも、一護の体には海燕のそれよりも酷い傷跡が体を覆っている

これは先程、十一番隊隊長、更木剣八によってつけられた傷だ。

一護は未だ正解を習得していない為、予想以上に苦戦を強いられることとなったのだ。

因みに、一護が突然この場に現れた理由は一護の握る杖のような物が関係していた。

天踏^{てんとうけん}絢と言う、霊力を込める事で自由自在に空を飛ぶ事ができると言う、四楓院家の秘宝だ。

「隊長が二人か……海燕さん、大丈夫か？」

自分の事を差し置いて海燕の心配をする一護に海燕は溜息を付きながらもこの状況を好機と見た。

浮竹は恐らくだが、先程床から起き上がったばかりで満足に戦う事が出来ないと思われる。

自身の嘗ての上司の状態が良くないことを利用することに申し訳なさを感じながらも冷静に状況を分析していく。

傷がある状態だが、少しの間戦う事が出来る自分と一護、二人で掛ければこの戦いに勝てる、海燕は分析した。

「行くぞ一護……重傷などこ悪いが、付き合ってもらうぜ？」

「こんぐらい、大した事ねえよ、そっちこそ大丈夫か？」

「それだけ口が聞けりゃ上等だ！！」

海燕は虚化した後、白哉に斬りかかる。

その後が続くように一護が白哉の右手に握られる刀へ鏢迫り合いを仕掛ける。

其処を海燕が攻撃 出来れば良かったのだが、白哉のは左手

の人差し指から破道の四、白雷を放ち、海燕に態と回避させ、攻撃を失敗させる。

一護が白哉の隙を見て、左肩を攻撃するが、それは僅かに掠めただけで、容易く回避されてしまう。

「何をやっとなお主等、やめんか！今のお主等ではそいつに勝ては

せん!!」

その場に颯爽と夜一が姿を表し、凄まじいという言葉が生温く思えるほどに素早い瞬歩で海燕と一護を両肩に抱える。

それは一護の方は、離せ、あいつを倒すんだ、等と喚んでいるが、海燕の方は寧ろ助かったとばかりに夜一から降りて、自身の足で逃げようとする。

「朽木はもう逃げる事に成功したのじゃ。無理に決着をつける事もあるまい」

夜一にそう言われたが、何処か納得のいかない表情を浮かべる一護を肩に乗せたまま、夜一はある場所へと向かうのだった。

夜一に連れられて一護と海燕が来たのは双極の丘の地下にある広い空間。

其処は浦原商店の勉強部屋の元になった空間であり、夜一と浦原が子供の頃にこっそりとこの空間を作ったらしい。

夜一曰く、喜助は小さい頃からこっそり何かをする事が病的に上手かった、との事。

夜一がこの空間で一護にやらせようとした事とは

「卍解の修行をする……?」

夜一曰く、もしももう一回ルキアが捕まれば刑はさらに重くなり、下手をすれば刑の執行が早まってしまふとの事。

「そうなった場合、隊長格との戦闘は必須じゃ。護廷の隊長は唯一人の例外を除き、全員卍解を使う事が出来る。となるとお主も卍解で対抗する他あるまい?」

得意げに言う夜一だが、卍解という物は一朝一夕で習得出来る様な物ではない。

海燕でさえ、副隊長時代の積み重ねと復活後の修行にて卍解を習得した程だ。

「だが一護、お主には卍解を三日で習得してもらおう!!」

夜一の言葉を聞いて、一護は何を思ったか、自身の顔に拳を入れる。

「おっしや、やってやる！！」

一護は気合を自身に気合を入れ、空間の中央へと足を進めた。

卍解に必要なのは斬魄刀本体の“具象化”と“屈服”である。

具象化とは刀の本体を此方の世界に呼び出す事。

屈服とは具象化させた本体をその名の通り屈服させる事で初めて卍解を習得する事が出来る。

そして一護のそれを手伝うのは転神体という隠密機動の最重要特殊霊具である。

転神体に自身の刀を突き刺す事で無理矢理“具象化”させ、それを打ち負かす事で“屈服”させるのだ。

この方法では嘗て浦原しか卍解を習得出来なかったのだが、一種の賭けで一護にこれを使う。

「行くぜ……」

一護は斬魄刀を転神体に突き刺し、卍解の修行を開始した。

一方、海燕は現在怪我の治癒に効くという温泉に浸かっている。

とはいっても、それはノンビリした物でなく、怪我と霊圧、体力が戻り次第、即座にルキアの元へ向かうつもりだ。

海燕は湯から上がり、濡れた体を拭くこと無く死覇装に着替える。

そして出口まで行くと、ルキアの霊圧を探り、その場へ瞬歩を駆使して向かった。

燕は湯に浸かる（後書き）

湯から上がった後、着替えないで“そのまま”外に飛び出していた
ら海燕は社会的に死ぬ所でした。

危ない危ない。

そしてこれぞ水を滴るいい男！（黙れ）

それでは次回、また明日お会いしましょう。

狐と鈴虫は抗う(前書き)

原作はかーい、原作はかーい。
どんどんぶつ壊れていきます。

狐と鈴虫は抗う

岩鷲と花太郎、そしてルキアの周りを包囲しているのは二番隊、隠密機動の死神だ。

その場は、二番隊副隊長、大前田稀千代が仕切っており、その醜い顔をさらに歪めて高笑いしている。

「ハツハツハ！俺様の手柄だ！給料上がること間違い無しだぜ！」

性根までも醜く腐りかけたこの大前田は普段怠けていて、実践から遠ざかっていた為か、此処に近づいてくる巨大な霊圧に気づかないでいる。

「ハハハハハ！オラ、野郎共！とつとと捕まえるお！！」

未だ高笑いをする大前田だが、自身の後ろに立つ死神の姿には全くと言って良い程気づいていない。

勿論、大前田が率いている隠密機動の隊員達は既に気づいていて、それを大前田に報告すべきかどうか迷っているのである。

「ハハハハハ……ああん？」

漸く隊員達の異変に気づいた時には既に遅かった。

「へブ！！」

後頭部を踏みつけられ、グリグリと地面に顔を擦りつける大前田。

勿論それは大前田にその様な趣味があるとかではなく、第三者によって無理矢理踏みつけられているのだ。

その主は七番隊副隊長、射場鉄左衛門。

踏みつけた理由はというと

「部下に丸投げしとらんで自分で動かんかい！ポケナス」

との事だ。

射場の後ろに控えている七番隊隊長、こまむらびさしん 狛村左陣が隠密機動の隊員達に指示を出し、ルキア及び岩鷲と花太郎を拘束し、霊圧を遮断する布を掛けた後、ルキア達を連れてその場を立ち去った。

海燕がその場に着いた頃には、ルキアの霊圧が欠片も残っておらず、瀟霊廷を駆け回る事になった。

その頃、瀟霊廷の彼方此方で“尸魂界”への反乱分子が立ち上がっていた。

一護に負けた事により、白哉に牢へ容れられた恋次然り。

それぞれ牢屋に容れられていた石田、チャド、井上を囚らずとも救出する事になった剣八然り。

護廷の隊長の中でもベテランと言われる八番隊隊長、京楽春水しかり。

天才児、日番谷冬獅郎とサボリ魔、松本乱菊の凸凹コンビ然り。

海燕の妹、志波空鶴と、巨人、？丹坊然り

「行くで、要？」

「ああ、朽木女史の処刑を止めなければ」

嘗てルキアの処刑を目論んだ黒幕側についていた要とギンの二人然り、尸魂界の戦力の一部がルキアの処刑を阻止せんと動いていた。

そして、事態は急展開を迎える。

ルキアの手足を四角い箱の様な物が拘束し、空中へと浮き上がっていく。

それを見届けるのは護廷の隊長、副隊長なのだが、その中でも十名程しか揃っていない。

本当ならば隊長が十三人、副隊長が十二人揃ってなければならぬのだが、欠席しているものが少なからずいる。

尤も、副隊長の席が空いている十三番隊だけは、副隊長の代わりに二人の第三席が出席する予定なのだが、隊長である浮竹共々、欠席している。

双極の内の“攻”を司る刃が炎を纏い、不死鳥を思わせる姿に変貌する。

その名を熾^{あき}？王^{おう}という、死刑囚に刑を執行する為の炎の鳥。

これが罪人を貫く事で刑の執行は終わるのだが

ルキアに直撃しそうになった燬？王が何物かに弾き返された。

さらに、浮竹がようやく到着したかと思えば、奇妙な盾を持ち、縄を燬？王目掛け放った後、既にその場にいた京楽と共に燬？王の動きを止める。

その隙にルキアの処刑を阻止しに来た一護と海燕が燬？王を破壊する。

「助けに来たぜ、ルキア」

「礼は言わぬぞ……馬鹿者」

「おい、一護」

海燕は一護がルキアを抱えたまま、其処から飛び降りる、かと思いつたが、丁度そこへ現れた恋次にむけ、ルキアを“投げ飛ばす”。

死神とは言え、其処から落下したら確実に大怪我を負うのだが、恋次を信頼している故か、躊躇いもなく“投げ飛ばす”。

恋次はルキアを連れ、その場から逃げ去り、双極の丘を降りていった。

「無茶すんな、お前……」

現在、尸魂界の彼方此方で戦闘が起こっており、その全てが熾烈極まる物となっている。

剣八は狛村と。

十一番隊第三席、班目一角は射場と。

弓親は檜佐木と。

京楽と浮竹は元柳斎と。

そして

「何のつもりだい？ギン、要？」

ギンと要は今回の事件の首謀者である藍染と相対していた。

藍染は現世で暮らしていたルキアを発見した後、中央四十六室と呼ばれる最高司法機関を殲滅させ、さらに自身は死んだ様に見せかけ、ルキアの処刑について影で支持を出していたのである。

全てはルキアの体の中にある“崩玉”の為に。

「悪いけど、あんたに手を貸すのは此処までや。藍染」

「あなたの中に正義は無い、私は正義の道しか進むことは出来ない」

「そうか……私を裏切るのか」

此処、廃墟と化した中央四十六室でも、血で血を洗うような戦いが
始まるうとしていた。

ギンと要、二人共々斬魄刀を解放し、藍染に斬りかかっていった。

狐と鈴虫は抗う(後書き)

大前田ええ……

狐と鈴虫は抗う？

現在海燕は一護にこの場を任せ、恋次とルキアの後を追っている。先程は状況が状況だけにその場から逃げる事は難しい状態だったが、今は一護が副隊長三名を蹴散らした上、隊長格の殆どはこの場から離れている為、追跡が可能。唯一人この場に残っている卯ノ花も、海燕を追う様な事はせず、怪我人の治療に専念している。

「……………」
その表情は何かを考えている様な顔をしており、旅禍である海燕達とは別の、何か強大な物を捉えているように見える。

そして卯ノ花が怪我人を治療している中で一護と白哉が互いに激しくぶつかり合っている。

白哉の卍解は千本桜という無数の刃を桜の花弁の様に散らせ、それを一護と言つ的に向かって追跡させる。

一護はその動きに翻弄されながらも回避、もしくは防御し続ける。

そしてこれでは生温いと、卍解を見せると白哉を挑発し、一護は白哉の怒りを買う。

「卍解……千本桜景厳」
せんほんざくらかげよし

始解時を遥かに上回る刃の数に一護自身は無謀にも始解のまま挑もうとする。

勿論、卍解時の死神を始解で倒す事が出来る訳がなく、一護は自分も卍解をせざるを得ない状況に陥る。

「卍解、天鎖斬月！！」

その刀身は日本刀の様な形をしており、死神を色で現した様な漆黒の色をしていた。

能力はスピードの強化と共に力の圧縮。

一護は勇躍白哉に飛びかかっていった。

中央四十六室では、ギンと要による共同戦線が貼られており、今の所は互角の戦いをしている。

だが、考えても見て欲しい。

隊長二人と一人が戦って漸く互角なのだ。

だが、ギンと要は長年藍染の下で動いていた事もあり、藍染の動きは把握している。

尤も、それは藍染が二人に対しても同様で、さらに藍染は手札を隠している可能性だってある。

さらに言えば、藍染はもうこの場に存在していないかもしれない。

というのも、藍染の斬魄刀、鏡花水月の能力は完全催眠。

一度始解を見たものは、能力を開放するたびに藍染の支配下に陥ると言う、半ば反則的な斬魄刀だ。

だが、ギン、要共に鏡花水月の弱点を知っており、それを行使している為に催眠に掛かった可能性は極めて低い。

それは能力の発動前に鏡花水月に触れる事。

戦闘が始まる前に、二人は鏡花水月に触れた事で、催眠の支配下からは逃れている。

「破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲」
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

藍染は上級の鬼道をいとも簡単に使用する事ができ、その力は“隊長”の枠には留まっていない。

総隊長である、元柳斎相手でも引けは取らないと思われる。

『縛道の六十二、百歩欄干』
ひゃつぽらんかん

藍染の放った巨大な光線を回避したギンと要は互いに同じ鬼道を藍染に撃ち放つ。

それは藍染の衣服等を貫き、壁に貼り付けの状態にする。

「覚悟！！」

要が藍染へと斬りかかり、勝負は付いたかに思えたが

「何処を切るうとしているんだい？」

藍染は何時の間にか要の背後に回っており、余裕からか、攻撃は加えないでいる。

先程、藍染の姿があつた場所には、藍染の着ていた隊長羽織だけがその場に残っており、要を驚愕させた。

「やってみれば何でも出来るものだ」

それは隠密機動の使用する、隠密歩法“四楓”の参、空蝉うつせみという技だ。

それを藍染は見よう見まねだけでやってのけた。

「縛道の七十五、五柱鉄貫ごちゆうてつかん」

藍染は手先から五本の五角柱を放ち、要を壁へと打ち付ける。

それは本来、敵の五体を封じる為に使用するものだが、藍染はそれを攻撃に応用した。

肺の中の空気が一気に吐き出され、吐血する要。

ギンはそれに構う事なく、藍染に攻撃を仕掛ける。

「射殺せ、神槍！！」

それは零距离で放たれ、回避するのは不可能なほどの速さで伸びるのだが、藍染はいとも簡単に避けてみせる。

元の長さに戻した神槍を爪楊枝の様に素早く藍染に突き刺していく。しかし、そのどれもが容易く防御され、終いには手の平で受け止められる始末だ。

「卍解、神殺槍」

咄嗟に卍解し、やっと藍染を傷つけたかと思えば、藍染はギンの左胸目掛け、雷吼炮を放つ。

感電した上、心臓にダメージを受けたギンはその場に膝を付き、隙を見せる。

だが、そこで見せた隙こそがギンの罠であり、手を下そうとした藍染の背後から要が斬りかかる。

しかし藍染はそれすらも分かっていたかの様に回避し、逆に要を斬りつける。

「くそ……此処までの実力差が……」

要は跪く様にその場にしゃがみ込み、苦痛に表情を歪める。

「生き物とは、生まれたその瞬間にその“格”が決まっている。格

と言う名の運命には何者も逆らう事は出来ないのだ。今からでも遅くない、私に改めて忠誠を誓うんだ。それが、君達の選べる、ただ一つの運命の分岐点だ」

藍染の言葉は脳に響くような、それこそ催眠でも掛けられそうな声質をしており、ギンと要、二人に呼びかける。

だが、ギンと要の二人は

「堪忍なあ、自分の大事な人^{すき}が悲しまないようにする為には、あんたを倒すしか無いんや」

「私は決して悪には染まらない。喩え地に伏せようとも、地獄に落ちようとも！」

再び立ち上がった二人に興味が無くなった様な視線を送り、次の瞬間にはギンと要は鮮血に塗れ、その場に倒れていた。

「命までは取らない。君達がこの後どう足掻くのか、興味があるからね」

藍染は中央四十六室から退出し、自身の目的を達成する為に、ルキアを捕縛しに向かった。

「悪いが、君達の為に時間を割く余裕は無いんだ。朽木ルキアは渡してもらおう」

恋次の腕に抱えられていた筈のルキアが、何時の間にか藍染の腕の中に落ちており、恋次は表情を驚愕に染める。

後から追いついてきた海燕ですら、その動きを目で追えなかったのだから、それは凄まじい物である事が伺える。

「恋次ッ……」

ルキアの叫びを最後まで聞く事無く、藍染はその場から立ち去る。

瞬歩でその場を立ち去った藍染を追跡するため、海燕と恋次は双極の丘へと向かった。

狐と鈴虫は抗う？（後書き）

ギンと要の“藍染に対する”反逆。
個人的にギンの事気に入ってますし、要の最期もあれではアンマリ
なので、この小説では生存します。

大逆の死神は園へと去る。

藍染がルキアの体奥底に眠る崩玉を取り出し、用済みとなったルキアを殺そうとする。

其刃を海燕と一護、恋次が食い止めようと攻撃を仕掛ける。

虚化した海燕が藍染の背後に回り、ルキアを救出する。

その後。一護が月牙天衝を放ち、恋次が、鞭のような形状をしている蛇尾丸を伸ばし、藍染を打ち倒そうとする。

だが、要とギンですら勝てなかった藍染を相手に卍解を習得したとは言え、副隊長の恋次と、まだ死神になってから数ヶ月しか経っていない一護達に勝て、と言うのは些か酷という物である。

尤も、それも恋次と一護しかいないのなら、という話なのだが。

藍染の背後から海燕が零距离で水流を放つ。

恋次は兎も角、一護と海燕は藍染の始解を見ていない為、藍染の動きを追うことが出来る。

尤も、本当に動きを追う事が出来るのは海燕の方だけで、一護は殆ど感覚で攻撃している。

「一護！阿散井！！そっちだ！！」

藍染は海燕を手ごわいと判断したのか、先に一護と恋次を始末しようとする。

だが、一護や恋次とて黙って始末される理由もなく、反撃を仕掛ける。

「無駄だ。阿散井君、黒崎一護、君達では私に勝てない」

藍染が鬼道を放とうと手をかざしたその時、藍染の首元に、ヒヤリと何かが触れる。

「動くな……一歩でも動いたら」

「首の腱を断ち切る！！」

先程、森の中で戦っていた夜一と、二番隊長、碎蜂ソイフォンが藍染を拘束する。

二人は新旧の隠密機動総司令官であり、その速さは尸魂界でも一位、二位を争うと思われる。

尤も、夜一の方は尸魂界を追放されている為、必然的に碎蜂が一番速いという事になる。

夜一と碎蜂の二人ではなく、藍染以外の隊長、副隊長がこの場に現れ、藍染を包囲する。

それは先程藍染に倒されたギンと要も同様で、二人は卯ノ花に治療を受けた後、藍染の計画を全て暴露したのだ。

「これはこれは……反逆者一名に大層な顔ぶれだ」

「無駄口を叩くでない、小童めが！お主を反逆の罪で今この場で拘束する！！」

元柳斎が杖を地面に強く打ち付けた後、藍染へと罪状を言い渡し、判決を下す

藍染はそれを意に介する事無く、不敵な笑みを絶やさない。

「フッフ、ハハハハ」

「何が可笑しい！！藍染！！」

粕村が藍染に対して怒鳴りつけると藍染は眼鏡をくい、と上に挙げ口角を吊り上げる。

「いや、滑稽な者達だと思ってね」

藍染の言葉にこの場にいる全員が表情を強ばらせる。

「君達が私を拘束するのかい？面白い。やってみたまえ」

藍染が自身の刀に力を込め、振るおうとした時、短剣を握る夜一の右手が素早く動く。

だが、その攻撃は虚しく空を切るだけに終わり、藍染は日番谷の隣にいた嘗ての自分の副官、雛森桃を切り裂く。

悲鳴を出す暇も無い程に、切り裂かれた瞬間、何が起こったのか分から無かった雛森はその場に倒れ込む。

それを見て激怒した日番谷は冰雪系最強の斬魄刀、氷輪丸を解放し、氷の龍を藍染に向ける。

「だから、滑稽だと言っただ」

藍染はそれを何でも無いかの様に、氷の龍を真つ二つに切り裂き、日番谷を横から切り裂く。

松本など、さらに論外で、有無を言わず切り捨てられる。

ギンは松本が倒れた瞬間、何とも言えない表情を浮かべ、神槍を藍染に向けて放つ。

しかし、それを回避した藍染はギンの背後に回り、白雷を撃ち放つ。背中に風穴を開けたギンはそのまま倒れ込む事はせず、次の攻撃に繋ごうとする。

「ハツハア！！面白えじゃねえか！藍染！俺と闘り合おうぜえ！！」
そこを戦闘狂である剣八が藍染に臆する事無く、藍染に殺し合いを挑む。

「愚か者が……私の邪魔だ」
剣八に続き、白哉までもが、藍染に攻撃を加える。

「おいコラ、テメエ！そんなポロポロの体で俺の邪魔すんじゃないぞよ！テメエから斬るぞ！！」

白哉の体は先程の一護との戦いで傷ついており、とてもじゃないが、戦える状態では無い。

「君達、喧嘩は駄目だろう？」
馬鹿にする様に言う藍染は次の瞬間、剣八と白哉の後ろに背中を向けて立っており、次の瞬間、二人は肩から血を流す。

その次は京楽と浮竹が同時に藍染に斬りかかる。

それは長年一緒にいただけ合って、コンビネーションがしっかりしており、先程の剣八と白哉よりも藍染は苦戦している様に見える。

そう、見えるだけなのだ。

「破道の九十、黒棺」

京楽と浮竹の二人を巻き込んだ強大な重力場は二人に切り傷をつけ、地に伏せさせる。

「すまない……そろそろ時間の様だ」

突如、元柳斎と向かい合い、刀を振るおうとした時に藍染がそう呟いた。

空には巨大な黒腔ガルガンタと呼ばれる門が開き、藍染を包み込む。

「さらばだ、死神の諸君。そして志波海燕に黒崎一護」

藍染は眼鏡を砕き、地面へと捨てる。

それを見送るしか出来なかつた護廷の隊長、副隊長達は苦虫を噛むような目で藍染を見つめ、睨みつける。

そして藍染は最後にこう呟いた。

“私は天に立つ”と

大逆の死神は園へと去る。(後書き)

藍染のトンデモ感が上手く再現できているか不安ですが、
やれる事はやった(キリッ)

燕の仕事復帰（前書き）

さて、タイトルでお察しかと思いますが、海燕は尸魂界に残ります。そして副隊長に復帰するのです。妄想全開ですよ、ナハ、ナハ。

燕の仕事復帰

浄霊廷は現在、藍染の裏切りによって騒然とした空気が流れている。ある者は尊敬、敬愛していた者に裏切られ絶望し、ある者はそんな事はどうでもいいと昼間から酒を飲み、ある者はいつか藍染が攻めてくるであろう日に備えて腕を磨き、そしてまたある者は今回の戦いで負った傷を癒したりと、それぞれ思い思いに過ごしていた。そして現在、山本元柳斎重國に尋問を受けているギンと要もそれは同様だった。

「ふむ……百年前の魂魄消失事件は全て藍染の仕業だったと、それで間違いないかの？」

元柳斎の射抜くような視線に緊張する事無く、ギンと要は頷き、それを肯定する。

元柳斎は顎鬚を弄り、どうしたものかと考える。

本来ならばこの二人は良くて死神としての資格、権利を剥奪、悪くて牢屋行き等の罰を与えなければならぬのだが、皮肉にも藍染の抜けた穴は大きく、その上隊長二人を罰するとなると、決して少ない負担が護廷を襲う。

「お主等の罪に対しては特別に不問とする。本来ならば軽くはない罰を与えなければいかんのだが、今回、藍染に対して刃を向けた事、何より、現在中央四十六室は機能しておらん。つまり今はそこまで尸魂界の頭は固いものではない。」

そう言った元柳斎はじやがな、と言葉を続ける。

「次は無いと、そう覚悟しておれ」

霊圧を二人に向けて放出する。

その鋭く、強大な霊圧に二人はたじろぎそうになる物の、しっかりと、元柳斎の目を見て返事をする。

「下がって良い」

「ふう……おつかないわあ」

「それだけの事を我らはしたのだ。二度と総隊長を裏切ってはならないな」

二人は一番隊隊舎を出た後、一番隊隊員の監視付きで廊下を歩く。其処に狛村と檜左木、吉良、松本など、二人に縁のある死神達と出くわした。

「えっと、何言ったらええか分からんわ。すみません」

ギンにしては珍しく、声のトーンを落とした声に驚く事無く、松本はギンと要の肩を軽く叩く。

「そんな事“どうでも良い”から呑みに行きましょ？市丸隊長に東仙隊長？」

いい方に皮肉を込めたその言い方に、ギンと要は罪悪感を覚えながらも、飲み会に付き合うことにした。

「キャハハハ！ギンったら髪の毛スベスベー！！かんわい！！！」

完全に出来上がった松本を尻目に大人しく酒を飲むギン。

因みに妻味は好物の干し柿である。

「いっただけ！！」

松本がギンの手に取った干し柿を奪い取り、自身の口に運ぶ。

「乱菊、あかんわ、それ僕のをやで？」

ギンの言葉を意に介す事なく、次々と干し柿を口に運ぶ松本を微笑ましく見つめながら吉良に目をやる。

「ごめんな、イズル？辛い思いさせてもうて」

「いえ、僕は市丸隊長を信じていましたから、大丈夫です」

一方、要はというと。

「東仙よ、よくぞ思いとどまってくれた、私は嬉しく思う」

狛村の言葉を耳に刻み込みながら酒を口に注ぐ要、色黒の肌若干赤みがさし酒に酔っている事が伺える。

「隊長酔うまで飲むなんて珍しいっすね」

檜佐木の言葉に相槌を内ながらさらに酒を飲む要の隣に、ある死神がドカツと音を立てて座った。

「店員の兄ちゃん、焼酎一本！」

要の隣に座った海燕が店員に酒を注文し、要とギンに挨拶をする。そして出てきた焼酎を豪快に飲み干すと、酒を飲んだ時特有の溜息ができる。

「なんや、浮竹さんの所にいるんやと思っただわ」

ギンが海燕に対してそう言うと言つと海燕はいいんだよ、と返事をする。

「時間はたっぷりあるしな？」

海燕の言葉を聞いてギンは海燕が尸魂界へ残る事を悟る。

海燕曰く、後日、直ぐに十三番隊副隊長に復帰するらしい。

「卍解を使えるのだから、お前なら直ぐにも隊長になれそうなのだから……」

要の言葉に海燕は首を横に振る。

「俺は隊長なんて柄じゃねえ」

護廷に入隊して六年で副隊長になった人が何を言う、と心の中でギンは言うが、幼少期に入隊直後で三席の座についていた自分も大概なで口には出さない。

一護達が現世へと帰還する数時間前に、海燕は実家へと帰宅する。

その時は丁度岩鷲が空鶴に喝を淹れられている最中であり、海燕はそれを微笑ましく見ていた。

「で、兄貴は副隊長に復帰して、また死神の為に尽くそう、ってか？」

空鶴の言葉に海燕はボニーという名の猪を撫でながら返事をする事でそれを肯定する。

「ま、兄貴がイイツて言うんならオレは構いやしねえけどよ。偶には顔見せるよ？」

「あたりめえだ。此処は俺の家なんだからな」

普段は暴れる事しかないボニーは海燕の言葉を嬉しく思ったのか、

フゴオ、と一回だけ鳴いた。

一護達を見送る為に、穿界門の前へと集まる死神達。

海燕は勿論、ルキアの姿も其処にあり、ルキア曰く、自分の居場所が見つかった、との事。

「じゃあな、ルキア、海燕さん」

「ム……」

「朽木さん！！私達、何時までも友達だよ！！」

「滅却師が死神に見送られるとはね……」

一護達は尸魂界で出会った死神達に見送られ、現世へと帰っていった。

ルキアは若干寂しそうな表情を浮かべた物の、直ぐに明るく笑い、一人空へと呟いた。

「また会おう……一護」

その声は透き通るように空へと響き、ルキアは朽木家の屋敷へ、“自分の家”へと帰っていった。

燕の仕事復帰（後書き）

きつと四十六室が健在だったらギンと要は問答無用で牢屋行きでしょう。

110年前に事件の中心にいたのですからね。

原作のぶっ壊しです。

ギンは海燕が藍染をたおせるかも〜という希望を見出して藍染を裏切りました。

要は海燕の中の正義に惹かれた&海燕のカリスマによって藍染を裏切りました。

コレについて意見等がありましたら感想等でよろしく願います。
勿論、評価も何時も何時でも何処でもお待ちしております。

燕の日常風景（前書き）

海燕、つまり十三番隊の日常の話です。

とは言ってもほのぼのとした物でないんですけど。

燕の日常風景

一護達が尸魂界へ帰還した後、海燕は書類の山と格闘していた。

その近くには既に靈圧等が回復したルキアと、二人の十三番隊第三席、虎徹清音と小椿仙太郎も書類の処理をしており、海燕がいる分、今までより幾らか楽になっていた。

それでも、三席という地位にしては仕事量が多い方なのだが。

それもその筈、十三番隊の隊長である浮竹は生まれつき肺病を患っており、毎日寝ている事が殆どだ。

本人曰く、海燕が復帰したのなら、引退も考えなければ、との事。

時々四人が交代で様子を見に行っている物の、浮竹の調子は一向に良くならない。

最悪、吐血までしている程だ。

「おい仙太郎、この書類一番隊に届けておいてくれ」

海燕が仙太郎に仕事を頼んだ事で、仙太郎は清音に向けて不敵な笑みを浮かべる。

所謂ドヤ顔である。

「で、清音は四番隊にこれを頼む」

続いて清音も仙太郎に向け、不敵な笑みを浮かべ、その場を後にする。

これには海燕も、ルキアも失笑せざるを得なかった。

「あいつら昔から全然変わってねえな……」

口を動かしながらも、仕事の手を休めない海燕は茶を飲みながら書類にサインを押し去っていった。

時刻は午後四時、海燕がいる為、十三番隊にしては何時もより比較的早く仕事が終わった。

ルキアも海燕も仙太郎も清音も、今の時間特にする事がなく、何をするかを迷っていた所を海燕がルキアに修行を付ける、と言い始め

ただ。

ルキアとしては、断る理由もなく、寧ろ此方からお願いしたかったぐらいなので、海燕の提案に賛成する。

刀と刀がぶつかり合い、金属音が鳴り響く。

仙太郎と清音は以前より遥かに腕が上がった海燕に驚き、思わず拍手を送る。

その時に互いに目が合って真似するな、と睨み合ったのは完全なる余談である。

一旦距離を取り、互いに鬼道を唱える。

ルキアは五〇番台の鬼道を詠唱付きで、海燕は六十番台の鬼道を詠唱破棄で放った。

何方の鬼道が強いか等、一見すれば一目瞭然だが、海燕は手加減をしている為、威力的にはほぼ互角である。

二人の鬼道が相殺した時、海燕が逸早く斬魄刀を解放した。

ルキアもそれに習って自身の刀である袖白雪そでのしらゆきを解放し、刀を改めて構え直す。

袖白雪はその名の通り冰雪系の斬魄刀で、威力は日番谷の氷輪丸に劣る物のその姿は尸魂界一美しいと言われている。

「次の舞・白漣つぎのまはくれん！」

ルキアは刀で地面を四箇所突いた後、其処から雪崩を発生させる。海燕はそれを廃炎で蒸発させて自身が巻き込まれる事を防ぐ。

「殺すつもりかよ」

「殺すつもりで戦わなければ海燕殿から勝利は奪えませぬ」

不敵に笑ったルキアに笑いながら斬りかかる。

勿論それは刀へ鏢迫り合いを仕掛けた物であり、ルキア自身を傷つけようとは考えていない。

「ハアッ!!!」

袖白雪に力を込め、海燕の擦花を凍らせようとする。

海燕は三步引いたあと、氷を殴って破壊し、体制を整える。

「考えてみれば朽木の斬魄刀と俺の斬魄刀の相性俺のが不利なものな」
流水系の掬花と冰雪系の袖白雪。

氷は水を凍らせ、自身の力に変える。
しかし海燕は構うものかとルキアに攻撃する。

危なげに海燕の刀を弾くルキア表情は何処か楽しげな、とはいっても十一番隊の様な危険な物では無く、何処か懐かしく、感慨深い物だ。

「おい！どうした、集中力が無くなってきてんぞ！！」

隙あり、とばかりにルキアの刀を弾く海燕、宙に、舞った袖白雪をキャッチした海燕。

どうしたのかとルキアに近寄ると

【グウウウウ】

「お前何処まで自己主張激しいんだよ……？」

何時か今と同じようにルキアに特訓を施していた時と同じ様に、ルキアは腹の音を鳴らした。

「ち、違います！海燕殿！これは、えと、その……！」

顔を赤らめながら必死に否定しようとするルキアを尻目に、金彦と銀彦が作った弁当をルキアに渡す。

自分の分は空鶴に作ってもらったらしい。

尤も、その味はともじやないが食べ物と呼べる者ではなかったのだが。

海燕はルキアに特訓を施した後、自身は四番隊へと向かう。

浮竹が服用する薬を受け取りに行く為だ。

入口にいる隊士に挨拶をした後、花太郎に卯ノ花の元へ案内される。彼ともあの事件を切っ掛けに親しくなり、時々会話をするだけの仲間になった。

「おう、山田、ありがとな」

事件の最中は花太郎、と呼んでいたが、現在は海燕の立場上、そうも行かなくなった。

逆に、この戦いで共に戦った恋次や一緒に酒を飲んだ中である檜佐木、吉良、松本、そして外見、性格共に子供のそれでは無い十一番隊副隊長、草鹿やちる等は自分と同じ、副隊長の地位にいる者は名前で読んでも特に問題はない。

卯ノ花に出された茶を一杯だけ飲んだ後、四番隊を後にして浮竹に薬を渡しに行く。その後、自身の実家である志波家に顔を見せた後で十三番隊隊舎内にある自分専用の部屋で一日の残りを過ごす。

これが、海燕の“今の”日常である。

燕の日常風景（後書き）

海燕の仕事等を書いてみました。

戦闘ばっかじゃ疲れますしね。

感想等、何時でもお待ちしております。

燕は蛸と闘う(前書き)

蛸 八本足。

さあ誰か分かりましたか？

燕は蛸と闘う

藍染が反乱した後の尸魂界にて、ルキアを始め、海燕、恋次、日番谷、松本、一角、弓親へ元柳斎がある命令を下していた。

それは現世にいる一護へのサポートと情報提供。

さらに破面が現れた場合の討伐任務。

破面のトップ、^{エスパーダ}十刃既に二体程、一護達を襲撃しており、一護は怪我こそ負っていない物の心を折られ、井上は立花の内の一体、椿鬼が破壊され、チャドと石田は闘う事すら出来なかったという。

尤も、現在石田は滅却師の能力を失っており、戦闘能力は殆ど無い状態だったのだが。

日番谷先遣隊は現世で空座町第一高校の制服を調達し、一護の教室に殴り込む、否、顔を出す。

「久しぶりだな……一護」

そして何故かルキアは窓から教室に侵入したかと思うと一護に往復ビンタを食らわし、魂魄を抜いた後で強制的に虚がいる場所へと連れて行った。

虚に支配されるのが怖いなら、自分が強くなればいい、周りを傷つけるのが怖いなら、そうならぬ様に自分が虚を抑え込めば良い、とはルキアと海燕の言葉だ。

それを聞いて一護は一瞬戸惑った物の、目に力が入り、その場にいる虚の仮面を真二つに切り裂き、死神代行としての自覚を取り戻した。

「所で一護、オメエの所に仮面の軍勢、って奴等がこなかったか？」
海燕は一護が内なる虚に魂を蝕まれているのなら、仮面の軍勢が一護の元へ来ると予想したのだ。

だが、海燕の予想は外れ、一護はそんな奴等は知らないと言った。

「そうか、もしもそいつらが接触して来たら迷わず協力を求める。そいつらは決して敵じゃあねえ。寧ろ味方だ」

彼等のお蔭で内なる虚を制御した海燕が言つのも難だが、仮面の軍勢はパツと見は不審者の集団だ。

オカッパ頭の関西人、チンピラのような少女、成人向け雑誌を好む女、言動が子供のそれでしか無い女、頭に血が登りやすい、パツと見は不良の男。頭の毛がピンク一色の大男、ナルシストのロン毛男、アフロパーマのサングラス男、これだけ個性的なメンバーが揃えば、警戒をしないほうが可笑しいという物だろう。

海燕は、仮面の軍勢のメンバーの特徴を一護に教えた後、浦原商店へと去っていった。

その夜、日番谷先遣隊は一護の部屋へ“勝手に”上がり込み、破面の情報を一護に教える。

一護自身、破面の事について虚と同じ様な霊圧をしている者達、としか認識しておらず、破面という総称すら知らなかったと言つ。

「おい……揃ってるか、お前達！」

青色の髪をした破面の隣に中性的な顔立ちの破面とその後ろに数体の破面。

青髪の男はグリムジョー・ジャガージャックと良い、破面の頂点の十名の内、上から六番目の実力を持っている。

一方、隣にいる一見少女の様な顔をしている男はルピ・アンテノールと言い、彼は上から九番目の十刃だ。

「六番さんの従属官さん達さあ？もう帰っていいんじゃない？後は僕達がやっておくからさあ？」

ルピの言葉に長身の男が反論を唱える。

「私達に命令を下すのはあなたでは無く、グリムジョーです。新参者には黙っていてもらいたい」

彼は破面N011、シャウロン・クーファン。

十刃以外の破面の番号は強さの順で無く、生まれた順である。

つまりシャウロンは十一番目に生み出された破面、という事だ。

「へへ……勝手に着いてきやがった癖して吹かしてんじゃねえよ」
彼は破面N016、デイ・ロイ・リンカー。
デイ・ロイは破面の中でも戦闘力が低く、大虚時の時と比べ戦闘力
は何方かと言うと下がっていた。
グリムジョーとルピ、そしてグリムジョーの従属官達が空座町へと
降り立ち、その目的は一護を殺す為、しかし彼らは見境なく、少し
でも霊圧が高い者は皆殺しにすると宣言した。

破面達の霊圧を感じ取り、それぞれ各場所へと散らばる先遣隊と一
護達。

ルキアの相手はデイ・ロイだ。

しかしそれも一瞬で氷漬けにされ、息絶える。

恋次の相手は破面N015、イールフォルト・グランツ。

そして日番谷はシャウロン、松本は破面14番、ナキーム・グリーン
ディーナとそれぞれ自身の相手を選び、戦っていた。

そして海燕の相手はルピだ。

十刃の内、上位は隊長格すら凌ぐという破面だが、ルピの番号は九
番。

死神で言う、四席か三席に満たない程度の実力だ。

尤も、それは実力と相応の席にルピがいたならば、の話だが。

海燕は掬花を解放し、ルピに斬りかかる。

しかしそれをひらりと回避したルピは、自身の刀を海燕の首元へと
振りかぶる。

だが、そんな見え見えの攻撃が海燕に中る筈もなく、瞬歩によって
回避される。

「へえ〜それ、僕達の響転ソニードとそっくりだね？瞬歩って言ったっけ？」
何処か小馬鹿にする様に喋るルピに対して海燕は苛立ちを覚えなが
らも、攻撃の手を休めない。

「ねえねえ、やる気あるの？遅すぎて蠅が止まっちゃっうよ……」
調子に乗るルピだが、此処で気づくべき、重要な点に気づけないで

いた。

海燕の瞬歩の速度が上がっているのだ。しかしそれは少しづつ、少しづつスピードを上げている為、ルピ自身も気づかずに足を速く動かしている。

勿論、自分の身体能力に見合わない動きをすればやがて段々と疲れて行き、息切れを起こす。

「お前、何をしたのさ……？」

「特になんもしてねえよ！！」

ルピの右足に挨花の先端を突き刺す。

其処から溢れた血は、人間や死神のそれと大差なく、赤い色をしていた。

ルピは一旦海燕から距離を取り、攻撃のタイミングを伺う。

足は片方が傷ついている為、響転は使えない。

打つ手の無くなったルピは渋々と自身の斬魄刀を開放しようとする。

「縊れ、トレバドーラ 蔦嬢！！」

ルピの後ろに八本触手が付いた円盤が形成される。

触手を八本同時に海燕に放ち、海燕を翻弄しようとする。

ルピは破面故の特性か、刀を解放した途端に戦闘力が大幅に上昇し、先程とは打って変わっての攻撃をする。

「ちっ……限定解除はまだか」

先程と悪い方向に形勢逆転された海燕は、自身の霊圧を抑制する霊印の解除を催促したい気分だが、今は戦闘中の為、残念ながらそれは出来なかった。

柔らかい触手を弾く鉄の音が、夜の空座町に鳴り響いた。

燕は蛸と闘う(後書き)

そうです。

八本足の蛸はルピの事だったので!!!(ババーン)
だからなんだという話ではありませんが。

燕は蛸を蹴散らし、巨人に修行を施す（前書き）

お気に入り登録40件突破記念にて本日二回目の投降。

合計45件となっております。

皆さん、こんな拙作でよかったですらこれからも応援よろしくお願いします。

燕は蛸を蹴散らし、巨人に修行を施す

あれから僅か数分で限定解除の許可が下りて、ようやく海燕は全力で戦う事が出来る様になった。

限定霊印で抑えられていた霊圧八割、さらに虚化、そして経った今行なった卍解による霊圧の上昇によって海燕の霊圧はルピが目眩を起こす程の強大さで、卍解を発動した後のこの戦いは海燕の方に風が吹いていた。

水流を纏った八つの手裏剣がルピの八本の触手を封じ、ルピ本体と海燕本体が相対する。

尤も、前述の通り、ルピは海燕の霊圧によって目眩を起こしているので、最早勝負はついているのだが。

「此処が……虚園ウエコムドなら、お前なんかには負けたりはしないのに！」
腹を突かれ、地面に倒れたルピはうつ向けになる。

「畜生、畜生　！！」

「じゃあ、虚園でもう一回やられれば諦めがつくか？」

最後に、海燕に一撃をいれられたルピはそのまま気絶し、海燕は先ず苦戦しているであろう一護の元へと向かう。

案の定、内なる虚に戦いを邪魔されている一護は月牙天衝を放とうとするも、自身の頭に激痛が走り、霊圧を上手くコントロール出来ないでいた。

「これで終いだ。俺達に目を付けられた事に後悔しな！死にやがれ！！」

グリムジョーが刀を一護に突き刺そうとした時、海燕がその場に駆けつけ、グリムジョーの刃を止める。

グリムジョーは一旦距離を取り、間髪いれずに虚閃を放つ。

破面のそれは大虚のそれより遙かに強大で、霊圧の質も高く、攻撃範囲も広い。

しかし海燕はそれを掬花を回転させる事で防御する。

それ所か、そのまま虚閃を跳ね返した。

「掬花・水蓮の舞」

それは回転した掬花の丸い軌跡を残す残像を水蓮という巨大な花に見立てた物であり、残像を受け皿にして、そのまま跳ね返すという荒業だ。

「ちっ……ルピの野郎、此奴と戦いやがったな」

跳ね返ってきた虚閃を素手で弾いたグリムジョーは舌打ちをしながらも、何処か愉しそうに笑う。

「テメエなら俺を楽しませてくれそうだ!!」

海燕に殴りかかったグリムジョーの拳をパシ、と何物かが受け止める。

それは破面N03、ティア・ハリベルという女性の死神だった。

「グリムジョー……無断の現世進行、六体の破面の無断動員。全て命令違反だ。藍染様がお怒りになる前に帰ることを勧める」

ハリベルの肩には先程海燕に倒されたルピを担がれており、グリムジョーも抵抗すれば気絶させられ、ルピと同様にするとハリベルの目が語っており、グリムジョーは大人しくそれに従う。

「へっ、女の言い成りになってやんの」

茶化す様に言う海燕を睨みつけた後グリムジョーは黒腔の前に立つ。

「俺の名前はグリムジョー・ジャガージャック!次にこの名を聞く時は気をつけな!その時がテメエらの最期だ!」

グリムジョーはそういつて、虚園へと去っていった。

「さて、一護君?君に一言いいかい?」

海燕が奇妙な口調で一護に威圧感を掛ける。

一護は冷や汗を流しながらハイ、ナンデシヨウと片言の言葉で答える。

「何でオメエはあそこまで無理すんだよ!近くにルキアがいただろ!恋次がいただろ!日番谷隊長がいただろ!?!」

「だって、みんな戦っている最中だったからよ……」
まるで子供の言い訳である。

皆が戦っている最中で無理なら、最初から闘う相手を選べと海燕は言う。

例えば日番谷と一護、一護と恋次を入れ替えれば、少しは戦況が違っていただろう。

「此方来い。オメエに合わせてえ奴らがいるんだよ」

海燕は時刻が夜中をとくに過ぎていると言う一護の主張を無視し、仮面の軍勢がいる場所へと連れて行った。

一護を仮面の軍勢に任じた後で、海燕はルキアを連れて浦原商店へと向かう。

流石に一護が居ない時に黒崎家に泊まるのは拙いと思ったからだ。

それを言うと浦原は即了解し、丁度人手に困っていたから助かったとの事だ。

「人出に困っている、とは？」

「いやあ。チャドさんの修行相手っスよ。阿散井さんが文句を言い始めましてねえ。」

此処で志波さんに交代してもらおうかと」

浦原の言い分には多少疑問がある。

それをルキアは率直に尋ねる。

「チャドの修行あいてならば浦原でもよいのではないか？」

「いえ、私は作るのが専門で、育てるのは苦手なんすよ。という事で志波さんお願いっス。」

海燕は浦原に促されるまま、勉強部屋へと足を伸ばし、チャドの特殊の様子を拝見した。

だがそれは人間が行うには激しすぎる修行で、チャドは血塗になりながら卍解した恋次と戦っている。

恋次の卍解、狒狒王蛇尾丸ひびびおうへびおしりまるは攻撃のリーチが長く、打撃を得意とするチャドにとっては苦しいものとなっていた。

尤も、チャドも右拳から霊圧を放出すれば遠距離攻撃を出来るのだが、それは霊圧の消費が激しいので、此処ぞという時にしか使う事が出来ない。

「おっけ。理解した。ルキア、チャドの治療を頼む。特訓はその後だ」

浦原から恋次にストップが掛かり、ルキアが鬼道でチャドの傷を治療する。

「さて、チャド！第二ラウンドだ！立て、今度は俺が相手だぜ！」
こうして、海燕による、チャドの強化訓練が始まったのだった。

燕は蛸を蹴散らし、巨人に修行を施す（後書き）

自分の中ではルピはやられ役です。

因みにルピの実力は十刃の九番相当ではありません。

原作通り、六番になれる実力がありますが、新参者なので、まだ下の地位にいるというだけです。

アローニードロが抜けてそこに入った訳です。

僕は皆さんがこの作品についてどう思ってるか知りたいので、感想くねると嬉しいです。

リアルな生活で友達が少ないので読者様と交流が欲しいのもある、
というかそれが本音です（笑）

燕は巨人と母に修行を施す（前書き）

修行の回です。

とは言ってもチャドも一護も修行はすぐ終わるんですけど。

燕は巨人と莓に修行を施す

チャドの戦闘力は“並”の副隊長程度。

少なくとも雛森や大前田等の“下”の副隊長よりは数段強い。

だが、恋次や海燕等の“上”の副隊長と比べると、どうしても見劣りしてしまうというのが事実だ。

さらに隊長など持った他で、以前旅禍として尸魂界した時、京楽には一撃も与える事も出来ずに地に伏せられてしまった事をチャドは覚えている。

また、その時京楽の副官である伊勢七緒に止めを刺されそうになった時にそれを制止したのも京楽だった。

最低でも副隊長、欲を言えば副隊長の強さまで自分を高めたい。

そう思つてチャドは浦原に修行を申し込んだのだ。

尤も、浦原はそれを断り、結果的には恋次や海燕と修行をする事になつたのだが。

「おい、チャド！そんなんじゃ破面は倒せねえぞ！！腰を入れる、脇を締めろ！そんで……」

卍解の能力である八つの手裏剣を一個に纏め、チャドに放つ。

「気合を入れるお！！」

まるで隕石の様な蒼い玉はチャドに向かって飛んで行く。

この攻撃を人間に放つには少々抵抗があるのだが、チャドの修行の為に心を鬼にして、否、悪魔にして撃ち放つ。

「ウオオオオオオ！！」

チャドは蒼い玉に思い切り拳を打ち付け、霊圧を放出する。

その時、チャドの右腕の鎧は出っ張りの部分が開き、霊力の出力が半端ない物となつていた。

粉々に砕け散つた八つの手裏剣と共に海燕の卍解も自動的に解除される。

今此处で初めて知つた事なのだが、あの八つの手裏剣は海燕の卍解

の核を司っているらしい。

卍解の自動解除と共に決して軽くはない疲労が海燕を襲う。

一方、チャドも疲労と共に激しい出血が自身の体を襲い、その場に倒れ込む。

「合格だ、この野郎……」

海燕はそう呟いた後、酷い疲労により、その場に倒れ込んだ。

「巨人の一撃……？」

「ああ、先程、海燕さんの弾を破壊した時、その名前が頭に流れ込んできた」

海燕はチャドの体躯の大きさやその威力等から巨人の一撃とはよく言った物だと納得し、畳の上から立ち上がる。

「何処へ行くんだ？」

「一護とこだよ。彼奴も彼奴で修行してつから、様子を見に行つてやろうと思つてな」

海燕はチャドと一緒に行くかと誘ったが、チャドは必要ない、一護なら絶対に成功する、という信頼の言葉から誘いを断る。

海燕も無理して誘う理由も無、一人で一護の元へ向かう事にした。

「それにしても、一護とチャドって本当に仲良いよな」

互いを信頼するのは良い事だ。

海燕も百年程前にそんな連中がいた事はいたが、自分が入隊僅か六年で副隊長に昇進した為、“戦友”から“部下”と“上司”になつてしまった。

中には自分の昇進を妬んで交友関係を切ってくる輩もいた。

それを考えると正式な死神では無く、本来は人間の一護と能力を持つただけの人間であるチャドの絆は永遠に続くかもしれない。

だが、厚い絆であれば、ある程、断ち切れる時は悲惨な物だ。

一護とチャドにはそうならなくてももらいたいと、海燕は心から思った。

仮面の軍勢の下へたどり着いた時、海燕は絶望した。

一護の虚化の持続時間は十一秒しか持たなかったのだ。

海燕も当初は持続時間は短かったが、十一秒という事はない。

精々三、四分かそこらは虚化を保つことが出来ていた。

尤も、海燕自身の靈子に虚の物が組み込まれている事も関係して、たかもしれないのも事実だが。

「くそ！！もう解けやがった！！」

一三秒、二秒程伸びたが、それは誤差という事も有り得る。

「おい、一護」

「なんだ海燕さん？」

「死ぬ気で掛かってこい！！」

虚化の持続時間を伸ばすには靈力の上昇を図るのが一番。

靈力は生命の危機に一番上昇しやすいと言う。

流石にそこまでやる気は無いが、それに近い状態まで海燕は一護を追い込むつもりだ。

「歯あ食い縛れよ……ビビったら負けだぜ！！」

先ずは虚化を発動。

一護もそれに習って虚化を行うが、開始20秒で解けてしまう。

だがそれでも緊迫感によって僅かに伸びた様だ。

「オラオラオラア！！何だ何だ、腰が引けてんぞ！！」

この後数時間続いた海燕のスパルタ特訓によって一護の虚化持続時間が四〇分に伸びたのは海燕の働きに寄る物が大きいだろう。

燕は巨人と毒に修行を施す（後書き）

海燕の卍解の弱点です。

水流を纏った手裏剣を全て破壊すれば卍解は解けるんですね。

それはそうと感想等、何時でもお待ちしていますんでよろしくお願
いします。

燕は虚無と戦う(前書き)

ストックに余裕があるので、今日二話目の投稿です。

十刃で虚無を司っているのはウルキオラ、
つまり今回はウルキオラとの戦闘です。

燕は虚無と戦う

海燕は現在浦原と二人で話をしている。

海燕は鉄裁が出した茶を啜りながら浦原の何時もと違う、真剣な表情に怪訝そうな顔をしながら浦原の話の話を聞く。

「話というのは井上サンの事です」

井上の話とはまたどうして、という表情をした海燕に浦原は説明を加える。

「志波サン、貴方は人間のままで、あそこまで凄まじい能力を持つた人を見た事がありますか？アタシは見た事ありませんね」

浦原の言葉に海燕は納得した表情を浮かべ、浦原が言いたい事を先に言う。

井上の“拒絶”する力は神の領域を犯しかねない物だ。

「藍染か？」

浦原は無言で頷き、辺りの空気を真剣なものにする。

藍染の奪っていった崩玉はまだ覚醒しきっていない状態だ。

藍染は井上を捕らえ、崩玉が未完成である事を拒絶すれば

井上の能力は盾の外の拒絶、つまり防御術。

盾の両面の拒絶、つまり攻撃術。

盾の中の拒絶、つまり治癒、回復術。

そしてそれまでに起きた出来事の拒絶と、崩玉を完成させる様な物は何一つとして無い。

しかし藍染が井上に何らかの細工をすれば不可能では無い話だ。

「井上サンは丁度攻撃術が機能しておりません。それを口実に戦線を離脱させましたが、彼女の事です。椿鬼を治してでも戦線に出ようとするでしょう。その時、藍染サンは必ず井上サンを狙います。

その時は……」

言いかけた言葉を海燕に紡がせようとする。

理解しているか確認する為だ。

尤も、海燕程の人物なら、その必要は無い。

「わあつてるよ。井上は俺が死んでも護る」

「あなたなら死ぬ藍染相手でも死ぬ事は無いでしょうけどね」

海燕と浦原は、その言葉を最後に解散した。

現在井上がいるのは尸魂界。

案の定、破損した椿鬼を仮面の軍勢のハッチの手を借りて修復し、ルキアの誘いによって修行を始める。

海燕は自身の大切な部下がその様な行動力を身につけた事に喜びを覚えるが、同時に複雑な感情も抱いた。

自身の尊敬する隊長にも、自身を慕ってくれる部下達にも井上を護るという任務は秘密にしてある。

バラしてしまえば、ルキアが自分だけで井上を護ろうと、海燕に良い所を見せようとする訳では無いが、余計な心配が増えるだけだろう。

その時、隠密機動の裏廷隊と呼ばれる情報伝達部隊が姿を現した。

現世に破面の集団が現れたとの事だ。

これを陽動とみた海燕はルキアに支持を出す。

「ルキア！！お前は先に現世へ行け！俺も後で井上を連れて後を追う！！」

何故井上を護ろうとするのか、ルキアは深く聞かなかったが、海燕を信じて先に現世へと向かった。

海燕は現在、井上と共に断界を渡っており、その足は若干急ぎ足になっている。

「あの、海燕さん？何かあったんですか？何か顔が、その……？」

自分はそんなに“怖い”顔をしていたのだろうか。

表情を柔らかくしながら井上を見る。

若干困っている表情をしながらその場の空気を明るくしようとする。こんな純粋な少女が藍染の手に落ちる所を想像すると吐き気がする。

「井上、単刀直入に言うぜ、お前は藍染に狙われている」
海燕の突然の言葉に井上は表情を強ばらせる。

「って言ってもその可能性があるってだけだが、オメエの能力は異質だ。人間のままであんな能力を持っている奴は今まで見た事がねえ」

海燕が一頻りそう言うと井上は驚いた様な表情を浮かべる。

だが、その驚いた表情は海燕の言葉に対しての物では無い。

「出やがったな、破面……」

破面No.4、ウルキオラ・シファアがその場に現れ、緊迫した空気を流し込んだ。

「一回しか言わない。その女を此方に渡せ」

感情の籠っていない言葉を、それが当たり前前であるかの様に言い放つ。

「やだつていったら？」

「答えは“ハイ”だ。それしか認めない。それ以外を言ったら殺す、お前も、現世の死神達もだ」

自分ならそれが出来ると、自身過剰に言っている様に見えるが彼なら、ウルキオラならそれが可能だと、彼自身の霊圧と纏うオーラがそれを物語っていた。

だが、海燕に井上を渡すという選択肢は無い。

何故なら

「オメエは俺がぶつ倒してやる。井上は渡さねえ」

海燕がそういつた瞬間、ウルキオラは指先から虚閃を放った。

それはルピヤグリムジョーのそれよりも強大で、発射速度が凄まじい物だった。

だが海燕は井上を脇に抱え、瞬歩でそれを回避する。

「井上、来た道を戻れ。尸魂界に逃げるんだ」

井上はそれに素直に従い、断界を逆走する。

「させると思うか」

ウルキオラがそれを追跡しようとするが、海燕がそれを阻止。

「俺に集中してた方がいいぜ？じゃねえと、後悔する事になるからよ」

「……確かにその様だ」

ウルキオラは拳を軽く突き出し、虚弾^{バウ}を発射する。

それを掬花ではじき飛ばした海燕はウルキオラの懐に入り、零距离で水流を発射する。

だが、ウルキオラはそれを容易く回避し、逆に虚閃で攻撃してくる。指先からの虚閃は速射力に優れており、連射も可能だ。

「目には目を、歯には歯を、虚閃には……」

海燕は仮面を装着し、口から虚閃を放つ。

「虚閃！！」

さらに虚閃の上に掬花の水流を飛ばし、それは蒼い光線となる。

自分の虚閃ではそれに勝てないと悟ったのか、ウルキオラは虚閃を止め、響転で横に移動する。

「でええい！！」

フエンシングの様に素早く掬花で素早く突いていく海燕。

その構えは何時もの攻撃力に優れる上段の構えでは無く、スピードに優れる下段の構えである。

以前一角と手合わせをして、彼の鬼灯丸と闘り合った後でこの様な戦い方もある、と考えて下段の構えを練習したのだ。

「掬花・連弾金盞花の舞！！」

下段から突いた体勢のまま、水弾を発射する。

さらに素早く連続で突いていく事により、威力は落ちる物の水弾の連射を可能にした。

ウルキオラはそれ一つ一つを虚弾で相殺し、全て相殺し終わった所で一際大きな虚弾を放つ。

「掬花・水蓮の舞！！」

しかし海燕は掬花を棒術の様に回転させ、虚弾を受け止めた上でそれを跳ね返す。

成す術もなく、跳ね返ってきた虚弾に激突したウルキオラ。

だが、次の瞬間、海燕の表情は驚愕に染まる。

「鎖せ……………黒翼大魔」
ムルシエラ

力を解放したウルキオラには、傷一つ付いていなかったのだった。

燕は虚無と戦う（後書き）

ウルキオラにとって藍染の命令は絶対。

だから刀剣解放してでも井上を連れ去る必要があります。

もちろん、そんな事は海燕がさせません。

次回、ウルキオラは ！？

燕は虚無を怒らせる（前書き）

今回のラストは完璧に自分の好みの展開です。

燕は虚無を怒らせる

ウルキオラは能力を解放した後は光の槍、フルゴールを用いて海燕を攻撃している。

海燕はまだ卍解は使用せず、虚化のみで戦っている。

まだウルキオラの手の内を見ていないのと、いきなり卍解をしてその弱点を見切られるのを防ぐ為である。

幾ら強い力を得ても、その核を破壊されて卍解を解かれてしまえばそれで終わりだからだ。

「ルス・デ・ラ・ルナ」

ウルキオラは光の槍を海燕に向け投げつける。

海燕はそれを回避するが、自分の立っていた場所を視認してその悲惨な状況に息を飲む。

だが、それに臆する事なく、素早くウルキオラを突いていく。

仮面を装着した事により、スピード、攻撃力共に上昇し、ウルキオラに少なからずダメージを与えている。

しかしウルキオラも刀剣解放をした事で、全てのステータスが大幅に上がっており、そう簡単にはやられてはくれない。

「黒虚閃」
セロオスキュラス

吸い込まれるような漆黒の色をした虚閃を放ったウルキオラはそれに続いて攻撃の手を休めない。

「王虚の閃光」
グランレイ セロ

普通の虚閃よりも遥かに太い、威力も大幅に上の虚閃を放ち、海燕を攻撃する。

二発の虚閃の上位技を食らった海燕はどうなったのか、断界の壁に大きな穴を開けながらウルキオラは煙の中を進む。

その先で海燕は決して軽くはない傷を負いながらも、その場に勇ましく立っていたのだ。

「どうした？もう終わりか？」

口から流れってくる血液を地面に吐き捨て、挑発的に笑ってみせる。此処で、ウルキオラはある決意と確信を得た。

この男は、海燕は自分が殺すと、生かしておけば必ず自身の主の計画に支障が出ると、そう思ったのだ。

「死ね」

光の槍を用いて海燕を刺し殺そうと迫る。

だが海燕は怪我など何でも無いかの様にそれを容易く回避する。

「テメエが死ね」

虚化を解除しないまま、ウルキオラに水流を放つ。

そして戦闘開始時よりも霊力を込めた虚閃を水流に乗せる。

「その技は喰らわない」

ウルキオラはそれを響転で回避するも、その動きを追った光線はウルキオラに直撃する。

「悪いな、言うのを忘れてたぜ。この技は方向転換可能だつてな」
ウルキオラはその場に倒れたまま、動こうとはしない。

それは動けない程のダメージを追った訳では無く、立ち上がって傷つくのをおそれた訳でも無く、自身の胸の中に芽生えた“怒り”の感情を静かに大きくしていったのだった。

「刀剣解放第二階層……」
レスレクシオンダ
エターバ

それは十刃の中でウルキオラしか使用する事が出来ない、二段階目の刀剣解放。

長い尻尾、二本の角、鋭い四肢の爪、そして黒い体毛に覆われた体と、その姿は化け物の様になっていた。

「海燕と言ったな……死んで後悔しろ」

飛びかかったウルキオラだが、突如何者かに尻尾を掴まれ、その動きは止まってしまふ。

「そう、自棄になるんじゃないやねえよ……それにしても、お前そんな事出来たのか」

「我を失って任務を放棄するでないわ、愚か者が!!」

背後にいるのは破面N05のノイトラ・ジルガとN02のバラガン・

ルイゼンバーン。

言動を見るに、任務を放棄する寸前のウルキオラを止めに来た様だ。
「安心しな、死神さんよ、俺達の仕事はこいつを連れ戻すって事だけだ」

「藍染の若造の命令さえなければ貴様を殺してもよかったんじゃがの」

ノイトラとバラガンがウルキオラを止めると、ウルキオラもそれに素直に従い、元の姿に戻る。

「次に会った時は必ず殺す。いいな」

三人の破面は黒腔を開き、虚園へと帰っていった。

「……ふう」

虚化を解き、海燕は経過を緩める。

「あいつ等が襲いかかって来てれば、俺は死んでたな」
海燕は井上の元へ戻り、治療を受けた。

銀色の砂が風に舞い、砂埃を起こす。

上を見上げれば常に砂漠を照らす月が輝いていた。

此処は虚園。
ウエコムンド

その中心に破面及び、藍染が根城にしている虚夜宮ラスノーチェスが不気味な程、静かに聳えていた。

「ウルキオラ、あの力を隠していた理由わけを話してくれないかな？」

藍染は玉座の上で、静かに笑みを浮かべながらウルキオラに話しかけていた。

「はい、俺は現在破面N04の地位にいます。俺があのを日頃から使っていればN01の地位に付くのも容易い事。ですがそれでは意味がない。私は他の者と同じ条件で破面N01になりたかったのです」

嘘か本当か、それは本人にしか分からなかった。

「……………」

廊下を歩いているウルキオラに破面N010、ヤミー・リアルゴが声を掛ける。

「おいおい、上手いこと言ってたじゃねえか？」

茶化すように言うヤミーを無視してウルキオラは廊下の先へ行く。それをヤミーが追いかけて、ああだこうだと話しかけているが、ウルキオラは反応を示さない。

「俺が他の十刃と同じ条件でN01になりたかったのは本当だ」
此処でようやく。ウルキオラがヤミーに対して口を開く。

その表情は何処か愉しげで、彼にしては珍しく笑っていた。

「俺はいつか十刃の頂点に立ち、その全ての破面に刀剣解放第二階層を仕込む。全ては藍染様の為に……藍染様は最強の戦力を必要とされている。それを俺が叶えるんだ」

ウルキオラの妄信的なまでの藍染への忠誠心へ呆れた様に溜息を付しながらヤミーはウルキオラに今回絡んだ本当の理由を話す。

「今度の破面N01、オメエで決まりだよ、スタークとバラガンの爺とハリベルは一つずつ番号を繰り下げだ」

そう、ウルキオラに伝えた後ヤミーは暗闇へと去っていき、ウルキオラは闇の中で無表情な瞳を閉じた。

スベテハアイゼンサマノタメニ

燕は虚無を怒らせる（後書き）

ウルキオラの目的は自分のオリジナルです。

しかし

これも嘘か本当かはわかりません。

何故なら彼はウルキオラなのだから……（意味不明）

ウルキオラの破面？1への昇進については前書きにありました通り、完全に自分の趣味です。

「ウルキオラ絶対スタークやバラガンより強いっしょ？」

という自分勝手な予想と思いきみです。

だって原作でもスタークやハリベルバラガンすぐやられちゃったし

……

ウルキオラ一護が完全虚化してやっと倒したぐらいですし……。

とまあ言いわけばかりですが、これからもこの作品をよろしくお願
いします

次回、再び海燕のカリスマ発動。

海燕のカリスマにやられる相手は

次回をお楽しみに

燕は雛を元気づける（前書き）

海燕のカリスマが発動します。
相手はタイトル通りです。

燕は雛を元気づける

海燕は井上の無事を確認した後、自身が負った怪我の治療を受けた。護る対象から治療を受けるというのも可笑しな話だが、少なくとも井上は少しも気にしていなかった。

井上から怪我の治療を受けた後、滋養剤を飲んで霊力を回復させる。井上は怪我の治療は得意だが、霊力を回復させるのは苦手なのだ。治療を受けている間動かしていなかった右腕をグルングルンと回し、骨の硬直を解す。

その光景を見ているのは先程現世から帰還した日番谷先遣隊のメンバー達。

先程の破面の襲撃の陽動の方は浦原と夜一が主に動き、日番谷が纏めて氷づけにするといい戦法を使い、ウルキオラが帰還したのと同時刻に破面N01、コヨーテ・スタークと名乗る男性が襲撃を掛けた破面達を回収していったのだ。

そして元柳斎が先程藍染達との決戦の日が決まったと発表した。藍染の目的は王鍵おうげんの創成と恐らくだが、それを使った霊王の殺害という事が靈鍵に関する書物によって判明し、その王鍵を作るには重霊地という場所が必要で、その重霊地は何十年、何百年に一度変化すると言う。

そして“今の重霊地”は何と一護達の住む街、空座町である事が判明した。

そして空座町で、一ヶ月後の冬に決戦を迎えるという。

各隊の隊長、副隊長、上位席官はそれに備えて腕を磨いていた。

「一ヶ月後の冬ねえ……正直勝てるかどうかはわかんねえな」

現在、海燕は、隊首会とは別の各隊の隊長、副隊長、席官が集まっ
て行く緊急会合に参加している。

その中には席官では無いものの日番谷先遣隊に所属していたルキア

も参加しており、一番隊隊舎の一室は護廷十三隊の有名人が集まっていた。

とはいってもルキア以外は皆実力のある席官以上の死神なのだが。八番隊副隊長の伊勢が会合の司会を務め、丁寧な口調で挨拶する。尤も、この会合の内容は至極単純で、五番隊の隊長、副隊長をどうするか、という物だ。

藍染との決戦時、隊長のいない五番隊は雛森が請け負うのだが、彼女は現在、自身の敬愛していた藍染に裏切られ、シヨックから床に伏せている状態だ。

これ以上戦線復帰が不可能と見られれば、彼女を護廷から除籍する可能性も見受けられ、その話も会合の中に含まれている。

「五番隊隊長？それなら志波君がええんとちゃうか？」
三番隊隊長のギンが海燕を隊長にと推す。

彼は百年以上藍染の傍で動いており、誰よりも藍染に詳しい。だが、それと同時に発言力も薄くなっているのだが、彼はその様な事は気にせず、何時も通りに振舞っていた。

「私も市丸と同じく志波を推そう。彼の實力は身をもって体験済みだ」

要もギン同様、海燕を隊長にと発言する。

当の本人はこの状況で嫌だとも言えず、黙り込んでいる。

「そうだな、俺も志波が適任だと思う」

海燕は心の中で浮竹の名を叫んだ。

通常、隊長になる条件は卅解の習得ともう一つ、三名の隊長に認められる事である。

複数の死神が集まっているこの場で元柳斎が一言海燕を隊長に、と言えば有無を言わず海燕は隊長に成らざるを得ない。

「ふむ、それでは志波海燕に五番隊隊長を任せよう。異論はないな？」

意義あり、という言葉は一切無く、海燕はそのまま五番隊隊長へと昇進した。

「そして、五番隊の副隊長じゃが……」

五番隊の副隊長は今の所保留となり、雛森がそのまま務める事になった。

海燕は嫌々ながらも隊長へと昇格し、今は自分の副官の元へと向かう。

「おーい、雛森、いるか？」

聞き覚えの無い声が耳に届き、何だろうと顔を上げる。

其処には隊長羽織を来た海燕が立っており、雛森は複雑そうな表情を浮かべる。

「えーと、見て分かると思うが新しく五番隊隊長を受け持った志波海燕だ。よろしくな」

「ハイ………」

沈黙。

唯、静寂だけがこの部屋を襲い、海燕、雛森両者共に何を話したら良いか分からないでいる。

此処で雛森が重々しく、表情を曇らせながら口を開いた。

「藍染隊長は……本当に裏切ったんですね」

雛森は信じられなかった。

自身の尊敬していた藍染が裏切ったかと思うと。

あの優しい笑顔が、言葉が、温もりが全て嘘だという事を受け入れるには、雛森には時間が必要だ。

それも気が遠くなる程の。

下手をしたら一生その事を抱えて生きていくかもしれない。

それ程、雛森にとってはショックな出来事だったのだ。

「ああ、藍染は護廷を裏切った」

“裏切り”という言葉に強く反応してしまう。

呼吸が荒くなり、頭が痛くなる。

それと同時に涙が頬を濡らす。

「……？」

雛森の頭に、海燕の手が乗った。

そのまま乱雑にグシャグシャと撫で回し、雛森は何がなんだか分からなくなってしまう。

「俺が前十三番隊の副隊長だった時、お前と同じでなんでもかんでも抱え込みまじまじ奴がいたよ」

それは恐らくルキアの事だろう。

ルキアは以前、帰属のやつかみ等により、朽木家の中でも肩身の狭い思いをしていた。

今でこそ、自分を支えてくれる仲間が出来、友が出来、兄である白哉の想いをしつつた事でそんな事はなくなり、毎日を明るく過ごしているのだ。

海燕は此处で何を言おうか迷った。

俺は藍染とは違う、俺はずっと傍にいる等の生易しい言葉では駄目だ。

海燕は雛森の頭を優しく撫で、笑いかける。

「俺を信じる！！藍染の事なんかどうでも良くなるぐらいに俺を頼りにしろ！俺はそれに応えるからよ！何せ俺は頼られる事は大得意だからな！！」

「……フフツ」

胸を張って言う海燕に雛森は気を許したのか、初めて海燕に笑いかける。

「へへっやっつと笑ってくれたな！」

海燕は頭をポンポンと優しく叩き、その後自分の事をこれでもかと言う程話した。

大事な事、どうでも良い事。

妹の事、弟の事。

自分の全てを打ち明け、自分が敵でない事を伝える。

自分が隊長で雛森が副隊長である限り、自分は雛森を、五番隊の隊士を護り続けると雛森の前で誓った。

後日、雛森が職務に復帰し、隊士や幼馴染の日番谷を驚かせたのは、余談にしなくても良いと思われる。

燕は雛を元気づける（後書き）

海燕は五番隊隊長にランクアップした！（パンパカパーン）

五番隊副隊長を雛森のままにしようか他の人にしようか迷ったんですが、適任が見つからず、雛森に続けてもらう事にしました。

これで敬愛する相手が藍染 海燕に変わりました。

海燕なら絶対に裏切らない！！

とはいっても、まだ本当に深い絆がある訳ではありません。

海燕の事を信用できると理解しているけど、仲良くなるには時間が必要〜みたいな感じですよ。

白一護の言葉ですが、「テメエは会ったばかりの奴と親友になれるのか？」という訳です。

それでは次回お会いしましょう。ノシ

燕とハゲと破面と（前書き）

ストックが貯まったので一話だけ更新します。
ハゲ＝一角なのは言うまでもありません。

燕とハゲと破面と

夜の瀟霊廷は現世の夜と違って暗く、静かである。

灯りは松明などの小さなものしか無く、店も二十四時間営業という物は一つもない。姿があるのは猫や犬か、見回りの死神だけである。特に今は破面との決戦に備えて夜遅くまで鍛錬をしている死神がいるので、その数は何時もより多い。

それは海燕も一緒に、現在は十一番隊の隊士と木刀による特訓をしている。

「どうした！！次、掛かってきやがれ！！」

とは言つても。隊長である海燕に敵う相手などいる筈もなく、次々とやられてしまっている。

「じゃあ、次は俺と闘り合いましよ、志波隊長！！」

一角が木刀を二本持ちながら海燕に飛びかかっていた。

彼は三席の地位にいながら卍解を使え、その実力は副隊長にも相当する。

恐らくだが、恋次と互角か、それ以上の実力を持っている。

尤も、一角が卍解を使える事を知っているのは弓親と恋次、海燕だけなのだが。

「オラオラオラオラア！！」

荒々しくも、正確に海燕の隙を狙ってくる姿勢は隊長である海燕も、本気を出さざるを得ない。

護廷の“隊長”というのは鬼道、卍解、霊圧の高さを含めての“隊長”である為、

普段槍の形をしている掬花を駆使して戦っている海燕は槍術は得意でも、剣術は飽く迄“中の上”程度だ。

一角も斬魄刀の形は槍、もしくは三節棍である為、海燕と同様であるかと思われるが、其処は戦闘専門部隊、十一番隊の上位席官である為、普段から木刀での訓練は欠かしていなかった。

その為“ 上の上 ”の實力を持つ一角に勝つのは頭を使う事が必要だ。
「そら！一本取ったあ！！」
「いて痛え！！何も頭狙う事ねえだろ！？」
決して木刀を頭で受けろという意味ではない。

翌日、瀨靈廷は混乱に包まれていた。

破面が率いていると思われる虚の大群が押し寄せてきたからだ。
ただ破面が襲撃をかけてきたのなら驚きはしない。

問題は決戦までの日付が後十八日もあるという事だ。

そして破面の靈圧は十刃より若干劣るというレベルだ。

元柳斎はそれ等を十刃の出来損ないと予想し、死神達に警戒をさせ
た。

因みに、元柳斎の予想は当たらずとも遠からずという所だった。

彼らは十刃落ちと呼ばれる、嘗て十刃だった者達。
フリハロレスパーダ

その實力は決して低いものではない。

「けっ、出来損ないの相手は御免だぜ」

瀨靈廷西・白道門の前に一人の死神がいる。

それは？丹坊では無く十一番隊の隊長、剣八だ。

彼は常に強者との戦いを望む。

それ故に、十刃よりも実力が劣るとされる十刃落ちと戦うのは御免
被りたかった。

「そんな事言っちゃ駄目だよ剣ちゃん！！私達一応門番なんだから
！嫌でもお仕事しなきゃダメ！」

剣八の肩の上で喚くやちる。

剣八は溜息を付きながら十刃落ちを待ち受ける。

その横では一角と弓親が構えており、剣八同様、十刃落ちとの戦い
は些か気が進まない様だった。

東・青流門。
あしほりゅうもん

此処で門番を務めるのは碎蜂。

とは言っても隠密機動総司令官である彼女が門番の前でどっしりと構えている訳が無く、隠密術により姿を隠し、何時でも暗殺出来る様に自身の斬魄刀、雀蜂を構えていた。

「……………」

北・黒稜門。こくりよつもん

門番は檜左木を筆頭に恋次と吉良の三人。

「どっからでも掛かってきやがれ!!」

まだ敵の姿は無いにも関わらず、刀を解放して燃え滾る恋次を窘めるように吉良が声を掛ける。

「阿散井君。まだ破面は姿を見せていないんだ。落ち着いたほうが良い」

「テメエは昔っからそうだよな……………」

檜左木は嘗て自分と恋次、吉良、雛森の三人が霊術院の生徒だった事を思い出す。

檜左木達六回生が引率し、恋次達三人が班を組んでテストを行う。

その時に出現した巨大虚は藍染の実験体だったというのだから驚かされる。

だが今回相手をするのは実験体などでは無く成体の破面。

十刃の出来損ないと言えど気を抜く訳にはいかない。

南・朱？門しゅわいもんを担当するのは海燕。

戦力的には此処と白道門が一番上であり、海燕の副官である雛森は流魂街の住民の避難に当たっている。

まず最初に戦闘が起こったのは清流門。

碎蜂の奇襲は失敗に終わり、ゴスロリの様な格好をした破面と戦闘が起きた。

破面N0105、チルツチ・サンダーウィッチは碎蜂の動きを見切り、それに付いてくる。

「キヤハハ、十刃落ちだからって油断しない事ね!!」

次に破面と遭遇したのは白道門の十一番隊の幹部達。

剣八、一角、弓親の三人と何時も通り傍観するやちる。

相手をするのは破面N0103、ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ。

「君達が吾輩の相手かな？良いね、君達を倒して吾輩は十刃の座に返り咲くでしょうじゃあないか！」

黒稜門ではアフロパーマの男と副隊長三人組が戦っていた。

破面N0107、ガンテンバイン・モスケータ。

三人は同時に刀を解放し、ガンテンバインと戦闘を起こした。

最後に朱？門では頭がカプセルの様な男が海燕と相対する。

破面N0109、アールニール・アルエリ。

十刃落ちの中でも極最近十刃を下ろされた者で、その原因は海燕にも少なからずあった。

アールニールの能力は無限に虚を食い続け、進化する事。

アールニールはメタスタシアに体に乗っ取られた海燕を喰い損ね、十刃を下ろされたのだった。

「カクゴシロ！海燕トヤラ！今カラデモテメエヲ!!」

「クイコロシテアゲルヨオ!!」

二つの顔を持つ破面と海燕の戦闘が今、始まった。

燕とハゲと破面と（後書き）

さて、死神VS十刃落ちの中にネタ対決があります。

一つは海燕VSアローロー。

さて、もう一つはなんでしょ？

ハゲはダンサーを打ち倒す（前書き）

一角〃ハゲ決定。

ドルドーニ、チルツチ、ガンテンバインの十刃落ち三人組の口調が
思い出せない……

読者の皆さんのイメージと合っているか心配です。

ハゲはダンサーを打ち倒す

白道門の前で一角とドルド 二が戦闘を繰り広げている。

以前の一角ならば、十刃落ちと戦う事など出来なかっただろう。だが彼は海燕との特訓により、以前より実力が上がっている。

それこそ、隊長格には一歩及ばない物の、恋次や弓親より一段も二段も実力が上だ。

槍、もしくは三節棍を駆使して戦う一角と一方では蹴りを主体に戦うドルド 二、“元”とはいえ、仮にも相手は十刃の一人だ。決して油断してはならない。

諭えドルド 二が幾らふざけた相手だとしてもだ。

「ヘイ！！何だその眼は！？吾輩が華麗に登場したと言うのに睨みつけるでない！！」

「警戒してんだよ、馬鹿」

一角の言葉にさらに怒るドルド 二は怒気を振りまきながら襲い掛かって来た。

ドルド 二がふざけている間も警戒を緩めなかった一角はそれに即座に対応出来、ドルド 二の足を三節棍で絡め捕る。

「茶番を繰り広げて相手を油断させるため、随分古臭い手を使うじやねえか！！」

襲いかかる足の重みを無視しそのまま三節棍を離してドルド 二を投げ飛ばす。

「その古臭い手に引つ掛からなかった君は新しいとでも言うのかい？」

馬鹿にすんな、と鬼灯丸を槍の形状に戻し、素早く突いていく一角のリーチは長い。

ドルド 二も武器を使えば間合いが広がるのだが、彼は足を使う戦いしかしなかった。

「食らいやがれえ！！」

一角の激しい突きの乱舞をまるでダンスをしているかの様に回避し、最後の一撃を得意の蹴りで御する。

「男爵蹴脚術!!!」

一角の攻撃を悉く足で防御し、上、中、下と、どの高さで攻撃しても完璧に防御されてしまう。

「裂ける、鬼灯丸!!!」

槍の攻撃では通用しないと悟った一角は鬼灯丸を三節棍に変形させ、カク、カク、と二度方向転換をさせた後でドルドーニの背中を狙う。ドルドーニは背中に突き刺さる鬼灯丸の刃に構う事無く、一角に対して虚閃を放つ。

一角はそれを間一髪、頭を横に動かす事で回避し、非常に愉しそうな笑みを浮かべる。

「よお?なんで避けなかつたんだ?」

答えが気になつたから聞く。
非常に単純な事だ。

一角は狂気の笑みを崩さぬまま、ドルドーニの方を見る。

「吾輩は破面であり、戦士ではない、相手に攻撃を中てる事が出来るなら、

背中など幾らでもくれてやるう」

ドルドーニの挑戦的な笑みを見て、自身も表情を歪める。

「いいじゃねえか、気にいった!俺は更木隊第三席、斑目一角!テメエを殺す男だ!よろしく!!!」

一角が名乗ったという事は相手に容赦なく攻撃を加える時だ。

名乗る前は適当に痛めつけて殺さずに逃がす。

名乗った後はその命を背負うだけの価値があると評価し、全力で殺しに掛る。

死神の任務など、どうでも良い。

自分がただ愉しめれば、それでいいのだ。

「いいだろう!!!吾輩も全力で君の相手を務めよう!旋れ、暴風男爵!!!」

ドルドー二の姿は脚部に竜巻を象った鎖、肩に硬く曲がった角と、それは舞台の衣裳の様な、派手なものとなった。

エル・ウノ・ヒュニテアル
「単鳥嘴脚!!!」

鳥の嘴の形状をした風の塊は一角の鬼灯丸の先端とぶつかり、衝撃波を生み出した。

一角はそれを鬼灯丸を横に振るう事で衝撃波を和らげ、次の攻撃へと転ずる。

三節棍の関節を、ただ直線に伸ばしただけの単純な攻撃。腕も前に伸びきり、これを外してしまえば致命的な隙が出来るだろう。

だが、一角はそれに構う事無く、後先考えずにそれを行った。

鬼灯丸の先端がドルドー二の左胸付近に突き刺さるが、辛うじて急所は避けたようで、素手で鬼灯丸を無理やり引き抜く。

少量ながらも吐血し、胸からも血を流す。

口内に溜った血を吐きだし、一角に不敵な笑みを向ける。

アヘ・メジソンス
「双鳥脚」

先程の嘴を象った風を連続で放つ。

それは幾重にも風が重なり合い、小さな竜巻を作り出した。

竜巻の濠風を肌で感じながら、肌に傷を作る。

「はっ、テメエは最高だぜ!!!こんな興奮は一護以来だ!ツイてるツイてる!!!俺は今最高にツイてるぜえ!!!」

叫びながら台風を中心へと走っていく一角、すると当然体の至る所から血が噴き出し、死覇装が紅に染まる。

台風の中心にいたドルドー二を近距離から攻撃する。

当然、槍の間合いのリーチは殺されるが、先端に近い所を持っただけに、込められた力が半端では無い。

「名残惜しいが、これで終いだ!!!」

「それはどうかな?」

一角の手首を掴み、腹に蹴りを食らわせる。

一角は吐血するが、蹲る等の弱みは見せず、口から血を流しながら

愉しそうに嗤う。

己が傷つくのを恐れない一角の戦い方にドルドーニは恐怖を覚える。

一角は勝つ為の戦いは決してしない。

“愉しむ為”の戦い方をするのだ。

勝利にこだわるから隙が生まれる。

敗北を恐れるから傷を作る事を拒む。

戦いとは傷つく事だ。

一角は怪我を恐れない。

戦いを楽しめば何も怖くない。

遊びを怖がる者などいないからだ。

気が付けば鬼灯丸はドルドーニの左胸を貫いており、小さな風穴を

その胸に開けていた。

「じゃあな、愉しかったぜ」

鬼灯丸を

引っこ抜き、辺りに血液をぶちまける。

一角の“遊び”が終わった様だ。

ハゲはダンサーを打ち倒す（後書き）

一角個人的に好きなので強化しました。

さらっと文章に出てましたが、今の彼は恋次よりも強いです。

一護とは……どうでしょうかね？

赤と兵士と吉はアフロと遭遇する。(前書き)

最近良く首を寝違える(つ)

赤と兵士と吉はアフロと遭遇する。

黒稜門にて、既に卍解を発動した恋次とそれぞれ始解を発動した檜佐木と吉良はガンテンバインとほぼ互角の戦いをしていた。

副隊長が三人揃って互角なのだからガンテンバインの“元”十刃の称号は伊達では無いのだろう。

吉良の侘助による斬撃とガンテンバインの拳撃がぶつかり合い、辺りに衝撃波が発生する。

侘助の能力で段々と体が重くなっているガンテンバインだが、それに構わず、次々と攻撃を繰り出してくる。

一撃繰り出す毎に攻撃の威力が上がっているのはガンテンバインが吉良の能力を逆手にとった荒業である事が伺える。

「く……縛道の六十一、六杖光牢!!!」

六つの帯状の光がガンテンバインの胴体を囲い、その動きを拘束する。

しかしガンテンバインは強引に縛道を力だけで破り、そのまま吉良に殴りかかる。

六杖光牢は決して力技だけで敗れる鬼道では無いのだが、ガンテンバインはそれに構わずに打ち破ったのだ。

「はあ!!!」

一際力を込めたパンチを吉良に向けるが、突如として、黒い鎖がガンテンバインの腕に絡みつく。

檜佐木の風死である。

鎖を絡めたまま、自分が引き寄せられない様に腰に力を入れる。

「破道の十一、綴雷電!!!」

風死の鎖に電撃が帯び、ガンテンバインを感電させる。

しかしこの程度の下級鬼道はガンテンバインには僅かなダメージも与える事が出来ず、ガンテンバインは構う事無く、鎖を伝って檜佐木を殴りつける。

「檜佐木先輩!!」

恋次が檜佐木がやられた事に怒っている訳では無いが、仲間がやられた事により、攻撃に熱が入る。

リーチの長い狒狒王蛇尾丸の刀身をガンテンバイン目掛け伸ばし、回避される度に敵ねらせてその動きを追う。

「吉良あ！今だ!!」

狒狒王蛇尾丸を避ける事に集中したガンテンバインを吉良の鬼道が襲う。

「破道の三十一、赤火砲!!」

赤い炎の弾をガンテンバイン目掛け撃ち放ち、食らった事を確認する前に追撃を放つ。

「破道の五十八、？嵐!!」

竜巻が煙を払い、代わりに豪風がガンテンバインの体を覆い隠す。

鬼道を止め、相手のダメージを確認する頃にはガンテンバインの姿は其処に無く、三人は霊圧を探す。

「阿散井!!後ろだ!!」

気づいた時は既に遅かった。

刀剣解放をしたガンテンバインが両拳を組んで恋次を殴りかかる。

横に吹っ飛んだ恋次は黒稜門の壁を破壊し、壁の向こうへと倒れ込む。

「よくも……」

吉良は同期の恋次がやられた事に珍しく熱くなりながらガンテンバインに斬りかかる。

刀剣解放をしたからか、ガンテンバインのダメージは皆無で、動きも先程より軽々とした物になっていた。

檜佐木も吉良を援護する為に風死を飛ばして攻撃する。

「主よ我等を許し給え!!」

しかしガンテンバインは竜の頭部の形をした虚閃の様な閃光を放ち、二人を恋次に続いて迎撃する。

三人共地に伏せ、動かない事を確認するとガンテンバインは黒稜門

の奥へと進もうとする。

だが、次の瞬間倒れた三人の内の一の霊圧が膨れ上がり、ガンテンバインは後ろを振り返る。

「何、勝手に進もうとしてやがんだ？進むなら、門番を倒してからにしゃがれ！！」

恋次は狒狒王蛇尾丸の口内に霊圧溜めてガンテンバインに向け発射する。

ひこつたいほう
「狒骨大砲！！」

巨大な砲弾がガンテンバインの体に直撃し、後ろへと吹っ飛んでいく。

「さっきの仕返しだ、この野郎！！」

恋次が肩膝を付きながら悪態をつく。

その表情は勝利を確信したのか、勝利だと“思いたい”のか、うっすらと笑みを浮かべている。

それでももしもガンテンバインが立ち上がったのなら、黒稜門は突破されたも当然である。

「へっ、仕返ししか？可笑しいな、こんな柔な攻撃をした覚えはないぜ」

其処には多少の擦り傷を負いながらも悠然と立ち上がったガンテンバインがいた。

余裕の笑みを浮かべている事から、それは負け惜しみ等では無い事が伺える。

尤も、ガンテンバインの心中は決して穏やかな物では無かった。

先程の狒骨大砲を“真面に喰らえば”それこそ終いだっただからだ。ガンテンバインは狒骨大砲を受け止める事はせず、後ろに投げ飛ばしたのだ。

それ故、ガンテンバインは擦り傷こそ負った物の、深いダメージは喰らわずに平然と立ち上がることが出来た。

リュウヒル・デル・ドラゴン
「龍哮拳」

ガンテンバインは両拳から球状の霊圧を発射し、竜の胴体の様にそ

れを繋げる。

「じゃあな、さよならだ」

ガントンバインの“竜”が恋次に襲いかかった

赤と兵士と吉はアフロと遭遇する。(後書き)

ガンテンバインの口調はこれであっているのか……？

蜂は怪鳥を倒し、燕は強欲を倒す（前書き）

さて、ネタバトルの回です。

どうして『ネタ』なのか分かりますか？

蜂は怪鳥を倒し、燕は強欲を倒す

背中に巨大な翼を有した鳥人と金色に光り輝く蜂が空中でぶつかり合っている。

鳥人の方は斬魄刀、ゴロンドリーナ車輪鉄燕を解放した破面、チルツチであり、金色の蜂は隠密機動に伝わる奥義、シヤムリ瞬間を発動した碎蜂である。

両者共に素早く、碎蜂の方が僅かに速さが上の動きで戦い、並の死神では目で追えない様な動きをする。

一方、チルツチは副隊長相当でやっと目で追えるという動きをしており、碎蜂に僅かに劣っている。

アラ・コルタドーラ
「断翼！！！」

ぶつかり合う度に碎蜂の体に細い傷が刻まれていく。

それはチルツチの翼の高速振動によるものであり、その翼は刃の様に鋭く、剣山の様に幾重にも重なっている。

「キャハハ！！どう？自慢の体が傷ついていく感想は？あんたの攻撃、少しも食らって無いわよ！？」

相手を傷つけることに快感を覚えているかのように、碎蜂を圧倒していく。

スピードこそ、碎蜂の方が勝っている物の、攻撃力や防御力はチルツチの方が上の様だ。

空中で互いの武器をぶつけ合う二人の姿は縄張り争いをしている二匹の怪鳥にも見えるだろう。

それだけ、二人の戦いは凄まじい物だった。

「本当に、少しも食らっていないのか？」

碎蜂が突然そう呟き、自身の斬魄刀、雀蜂を見せつける様に前にかざす。

チルツチの翼には蜂の様な模様が浮かび上がっており、それが光り輝いた後、翼は粉々に砕ける。

「ほう、驚いたな。翼と本体は別々なのか」

碎蜂はそう言ったものの驚いた素振りを見せる事無く、淡々とその言葉を発する。

「な……ちよつと、あんた今何をしたの!？」

碎蜂はチルツチの慌てふためく様を見て不敵な笑みを浮かべる。

「何、もう一度食らってみたら分かる事だ」

「お断りよ!!断人“大斧”」
ラ・コルタドサチャドール

尻尾から扇状の刃を碎蜂目掛け飛ばすが、碎蜂はそれを容易く回避する。

翼が無くなった事で、飛行手段が無くなったチルツチ。

相変わらず素早い動きを繰り返す碎蜂、誰がどうみても勝敗は明らかだった。

段々と雀蜂のターゲット、ほつまんか蜂紋華が数を増やしていき、碎蜂が段々と速度を上げていく。

「断人“剣士”!!」
ラ・コルタドサチャドール

尻尾から発生した剣状の刃は碎蜂に中る事無く、虚しく空を切り裂く。

全ての技が出尽くし、最早勝負が付いたかのように思えたその時、突然チルツチが逃亡する。

その姿は余りに滑稽で、元十刃の威厳など皆無な物だった。

「こんな化け物と戦えなんて無理よ、無理!!」

泣き言を言いながら逃げるチルツチを興味が無くなったかのように見る碎蜂は黙ってチルツチを見つめる。

追いかけてこないのかと安心したチルツチだが、次の瞬間、チルツチは口から血を流す。

流れ行く血を目で追った先には蜂紋華が光り輝く様、そう、既にチルツチの運命は“死”と決まっていたのだった。

「くだらん……」

海燕とアールニートの刀がぶつかり合い、刀同士の間火花が散る。アールニートは虚を食う事で強さを増すという事から、その強さは

決して低い物では無い。

だが、それでも隊長にまで申し上がった海燕に敵う物かと言われれば答えは否である。

「ハハッ！流石隊長ダナ！！退屈シネエゼ！」

「トハ言ツテモ最近ナツタバカリ見タイダケドネ」

二つの顔が交互に言葉を放つ。

その異様な姿に表情を強ばらせながらもその攻撃に反応する海燕は流石と言えるだろう。

海燕が瞬歩で後ろに下がり、水流を発射する。

それを刀で受け止め、その場に踏みとどまる物の、少しずつ後ろに下がっていくアローニー口の表情は歪んでいく。

尤も、その顔はカプセルの上に筒の様な防止を被せており、表情の判別は出来ないのだが。

水流が止んだ後で、アローニー口は響転で遠くに移動し、刀に力を込める。

『喰い尽くせ、喰虚グロトネリア………』

地に響くような声が出たと思うとアローニー口の身体が巨大化し、下半身が蛸の様な姿になる。

アローニー口の喰虚は今まで33650体の虚を食らっており、その能力を同時に発現する事が出来る。

それは火を操る能力。

それは雷を操る能力。

それは爆発を操る能力。

破面N0109、アローニー口・アルルエリ食らった虚の能力を無限に使う事が出来る。

それがアローニー口が十刃だったときに“強欲”を司った所以である。

「ち……なんつうデカさだよ………」

海燕は仮面を装着し足に霊子を纏わせ、空中に立つ。

空中に立った海燕は金盞花の舞を放ち、その凶体に攻撃する。

だが、隊長の攻撃といえど虚33650体分の体に致命傷を与える事は難しく、極僅かの大きさの傷跡しか付かない。

尤も、それはアールローの体の面積と比べたらの話であり、実際は結構なダメージを与えていた。

「イテエジヤネエカ……」

「仕返しシテモイイヨネ、イイデシヨ!?」

アールローが極太の虚閃を放ち、海燕のいた場所を通り抜ける。

海燕は等の昔にその場所を移動しており、アールローの後ろへと移動していた。

「そんなデケエと、後ろ向くのも一苦労だろ？」

その呟きと共に、虚閃と水流を組み合わせたレーザーをアールローの目掛け、撃ち放つ。

それはアールローの体にぶつかると共に強大な衝撃を生む。

「コノ野郎、イテエツテ言ッテルダロオオ!!!」

鈍重な動きで後ろを向いたアールローだが、その目に映るのは自分にとって絶望的な海燕の姿だった。

「卍解……青海蒼華掬花!!!」

レーザーを食らったアールローに追い打ちを掛ける様に卍解を発動した海燕はこれ以上、此奴に構う価値は無いと判断したのだ。

早急に決着をつけ、他の“強者が襲撃を仕掛けている”場所に行かなければならない。

海燕の相手にアールローは些か物足りなかった様に思えた。

「青海蒼華掬花……辛夷の舞!」

手裏剣を一つに纏め、威力を重視した辛夷の舞をアールローに向け撃ち放った。

蜂は怪鳥を倒し、燕は強欲を倒す（後書き）

チルツチ及びアローロニーロの口調が分からない……

感想、評価等は何時でもお待ちしております。
お気軽に送ってください。

燕は三馬鹿に修行を施す。(前書き)

三馬鹿とは誰の事でしょう？

燕は三馬鹿に修行を施す。

海燕がアールロニーロとの戦いに勝利した後で海燕は未だ戦闘が起きている場所へと向かう。

小さい戦闘、即ち普通の虚との戦いは彼方此方で収まりつつある物の、未だ破面と戦闘しているのは黒稜門、即ち副隊長三人が戦っている場所だ。

一番速く終わったのが白道門、即ち十一番隊の幹部達の戦闘。

その次に清流門、つまり碎蜂の所だ。

そのまた次は朱？門、つまり海燕の担当した場所の順に戦闘が終わり、黒稜門は前述の通り未だ戦闘中である。

白道門で戦っていたのが一角というのは遠くからでも分かり、その霊圧は以前より遥かに上昇していた。

海燕は黒稜門に向かう途中でこう呟いた。

「……この戦いが終わったら一角だけじゃなくて恋次にも修行教えてやろうか」

一角は海燕との修行で以前より遥かに強くなった。

一角は、ある日突然海燕に修行を付けてくれと頼み込んで来たのだ。破面に勝つ為に、卍解を使わなくても良いように、と。

その時に海燕は一角が卍解を使える事を知ったのだが、今、それはどうでもいい事だ。

黒稜門にたどり着く直前で海燕はある事に気がついた。

「あ、恋次の奴諦めやがった」

突然、恋次の霊圧が少なくなったのだ。

もしも恋次が倒されたのなら大きい霊圧が一瞬で萎んでしまう。しかし今回は徐々に小さくなった。

其処から海燕は諦めた、と察したのだった。

「後で扱いてやらねえと。あいつ最近腑抜けてやがるな」

恋次が真剣勝負を行なった時、勝率は極めて低い。

藍染が起こした事件の時、一護と白哉、藍染の三人に負けている恋次は実力こそ副隊長の“上の中”に入る物の、戦う相手が悪い。日番谷先遣隊の時だって十刃ですらない破面に限定解除をした上、卍解までしてやっと勝利を得た始末だ。

「こりゃあ、本気で喝をいれてやらねえと駄目だな」

恋次は戦いの才能はそこまで悪くない。

寧ろ良い方だ。

後は熱くなり過ぎない事と油断しない事が今後の課題である。

恋次の元へガンテンバインの“竜”が衝突する寸前、竜の代わりに別の物が恋次に激突した。

それは眩いばかりの“光”。

太陽の様な輝きが恋次の瞼を刺激し、思わずそれを閉じてしまう。

少しずつ、光に目を慣らして行くと、其処にいたのは

「一角さん……」

海燕が黒稜門に入るには其処での戦闘はとっくに終わっていた。

恋次は気絶こそしていない物の傷つきすぎた為かその場にじっと座っている。

そしてその向こうには既に息絶えているガンテンバインと

先程ドルドーニとの戦いに勝利した一角が立っていた。

「あ、やっと来たんすか？志波隊長」

一角の飄々とした様子に海燕は呆れた様に溜息を突く。

「おい一角、オメエさつきもういつたい破面倒してただろ？あんまり無茶すると死ぬぞ？」

一角は鬼灯丸を背に抱え、両脇に差し込む様に持つ。

「俺あ、戦いで死ぬなら本望ですよ。それより、虚の大群はもう粗方片付いたみたいっすね」

「そうだな、じゃあやる事はあと一つだな」

海燕の言葉に一角は不敵に笑いながらそっすね、と返事をする。

「阿散井、ちよつと此方来い」

海燕は恋次に手招きをする。

恋次は怪訝そうな表情を浮かべるも、恐る恐る海燕と一角の元へと近寄った。

恋次が二人の元へ近寄った後、まず一撃、一角の頭突きが恋次の後頭部を捉えた。

その後で海燕の蹴りが入り、恋次は突然の出来事に驚く。

「な、な、なにすんですか、志波隊長、一角さん!!」

喚く恋次に一角がビンタを食らわす。

「黙れ、腑抜け野郎。さつきてめえ破面と戦ってた時、最後諦めてたよな？」

一角の言葉に恋次は俯いてしまう。

海燕も一角の隣で意地悪そうな笑みを浮かべ、恋次を見ている。

「男なら死んだその時まで諦めんじゃねえよ……罰ゲームだ。志波隊長に鍛えてもらえ」

一角が叱咤の後に言った言葉に恋次は一瞬耳を疑った。

一角は恋次に、“志波隊長に鍛えてもらえ”、とそういつたのだ。

「オメエも志波隊長に扱いてもらえ、つてそう言ってたんだ」

惚けている恋次に一角が拳骨を食らわす。

丁度その時、檜佐木と吉良も起き上がり、現状を把握しようと辺りをキョロキョロと見回す。

「どうなってたんだ？」

「破面達は……どうなってたんでしょうか？」

間の抜けた二人を見て海燕は溜息を漏らす。

「どうやらまだ此処に扱きが必要な奴等がいる様だな……」

その日から一週間程、三、六、九番隊の副隊長が五番隊の隊長に特訓を強いられる事になったのだが、これは護廷十三隊の中でも珍しい光景となったという。

燕は三馬鹿に修行を施す。(後書き)

恋次、檜佐木、吉良強化イベントです。

この三人は原作でも強い方なんでしょうけど、僕には三馬鹿にしか見えないのです。

そっつえば最近現世組出てないですね・・・

燕は演説を行う(前書き)

おはようございます！何故か朝5時に目が覚めてしまったの今日の
分更新

(* , *)

燕は演説を行う

下睫毛の長い男が自身の配られる資料に判子を押しながら、部下の淹れた茶を飲む。

その傍らではお団子頭の少女が病み上がりの体を押しして上司の手伝いをしている。

とはいえっても処理しているのは自身の分の仕事なのだが。

十刃落ち率いる虚の群れとの戦いから三日たった今日から後一五日で世界の命運を賭けた戦いが行われるのだから虚園達も今頃慌たらしい日々を送っているのだろうか、どうでも良い事を考える。

そう、破面の日常など死神にとっては“どうでもいい事”なのだ。

何故なら死神と破面、双方の間に必要なのは戦う理由、それだけである。

「雛森、俺の分はもう終わったが……お前の分後幾つある？」

「え、後二十枚くらいありますけど……」

海燕は雛森の所から十枚ほど資料を抜き取り、自分の机の上に置く。それを申し訳なさそうな顔をしながら礼を良い、自分の仕事に戻る。

仕事が終わった後に二人は海燕お勧めの茶菓子屋に行き、其処で団子を咀嚼する。

「美味しい……」

雛森は団子の美味さに表情を綻ばせながら茶を啜り、海燕がもう二人分団子を注文する。

「平和ですねえ」

まるで老婆の様な物言いに海燕は若干吹き出し、それを雛森に怒られる。

まあ、“今”は確かに平和である。

この平和を護る為に先の戦いでは必ず勝利せねばならない。

「なあ、雛森？破面との戦いだが……えと、なんついたら良いかな。」

あんまり辛かったら出なくても良いんだぜ？」

海燕の言葉に雛森は表情を綻ばせる。

その顔は自信に満ちた表情をしており、藍染の事はもう完全に吹っ切れた様子である。

「大丈夫ですよ！五番隊の隊長は志波隊長ですから。藍染なんかでは……無いんです」

決意したかの様に、そういった雛森の瞳は揺らぐ事なく、確かにそうだった。

海燕は雛森の頭をガシガシと撫で、隊舎に帰った後、それぞれの部屋へと帰った。

海燕は朝に出勤し、ある程度の仕事を終えた後、“何時もの場所”へと向かう。

其処は最近、毎日の様に其処へ通っている。

其処は一軒の空家、否、“元”空家であり、現在は海燕と海燕の下で修行をする死神達専用の部屋となっており、現在海燕に修行を付けてもらっているのは一角、恋次、檜佐木、吉良、ルキアの五人。

一角とルキア以外の三人は強制的に海燕が扱っていたのだが、今では進んで海燕の修行を受けている。

「おし、恋次に修兵、一回全力で組手してみろ」

海燕の修行方法は至って単純で、“実戦有るのみ”という少々文字が違ふ気もするが、これである。

一年間型を練習するより、一日実践を行なった方が効果的である、というのは海燕の妹、空鶴の言葉である。

それでどれだけ岩鷲を苛めたのかはわからないが、その効果が出ているのは五人共実感している。

特にルキアはもう四席、もしくは三席の地位についても可笑しくない程の実力がある。

元々ルキアは席官程の実力があつたのだが、それは精々七席、八席程度の強さだった。

尤も、ルキアはどれだけ強くなっても大きな手柄でも立てない限り昇進する事は無い。

義兄である白哉が裏から根回ししているからだ。

「朽木隊長って意外にシスコンだよな……」

「何か申されましたか？海燕ど……いえ志波隊長」

ルキアの言葉に何でもないと返し、「志波隊長」というのを訂正させる。

今まで呼んでいた呼び方を途中で変えると違和感があるからだ。

それを洩るルキアに雛森が日番谷に対しての呼び方を例に出すと即座に“海燕殿”で通す事を了解した。

この時、何処かで某天才児が噓をしたのだが、此処にいる海燕達を知る由もないので今はどうでもいい事である。

決戦の前夜、護廷は各隊にて士気を高める為に隊長の演説を行う事になった。

それは海燕が隊長を務める五番隊も例外では無く、海燕は出番の前で何を言おうか迷っていた。

「まあ、なるようになるか」

海燕は五番隊隊舎の広間へと歩いて行った。

隊士の前で出て、若干緊張を交えながら自身の思うままに口を開く。

「……俺は最近、此処の隊長の席に座ったばかりで正直隊長の責任感とかも備わっちゃいねえ」

突然の自身への駄目出しに隊士達は戸惑いながらも続きの話へと耳を傾けようとする。

「お前ら一人一人の事もよく知らねえし、名前だって資料に目を通して初めて知ったぐらいだ。だから……」

自身の言葉を続けながら拳を上上げる。

「死ぬな！」

その言葉を言った後、隊士達はキョトンとした顔をする。

「明日の戦いが終わったら皆で茶を飲もう。そんで一人一人、俺の自分の事を教えてくれ！勿論誰一人として欠けずにだ！」

そして言葉の最後にこう、言葉を続けた。

「全員、気合入れて明日に挑めよ！！何があろうと俺が護ってやる！」

隊士達は観静を上げて海燕の名を叫んだ。
自身等の新たな隊長を迎える様に。

燕は演説を行う（後書き）

ちよつとクサイ話でした。

海燕がどうしてもかっこよくなるらない…どうしたらいいんだああ！！

因みに皆さん、気づきましたでしょうか？

雛森が藍染隊長、ではなく藍染、と呼んだ事に。

彼女は藍染を敵だと割り切りました。

そして雛森は海燕を完全に信頼し、尊敬しています。

カリスマにやられました。

死神は戦う（前書き）

あえて単純なタイトルにしてみました。
決して思いつかなかった訳ではありません。

死神は戦う

決戦の場への出発まで残り十時間。

一番隊隊舎の一室に元柳斎が真剣な面持ちで座っている。

元柳斎はただ座っているだけなのだが、護廷の総隊長である彼はただその場に居るだけで威圧感を発し、辺りの空気を固くする。

「まさかあの時の者達と共闘する事があるとはの」

元柳斎の言う“あの時の者達”とは当然だが海燕やその他の隊長達、或いは人間達の事ではない。

隊長達元柳斎では護廷の隊長と総隊長という事ぐらいしか接点がないからだ。

尤も、元柳斎を師と仰ぐ浮竹と京楽ならば、それも少し意味があるのだろうが。

ならば、あの時の者達とは一体誰なのか、それは元柳斎の目の先にある柱に腕を組んで立っている人物の事だ。

「敵の敵は味方……上手い言葉があるもんやで、なあ？爺さん」

平子真子は帽子を深くかぶり直しながら皮肉気味にそういった。

平子は不敵な笑みを絶やさずに元柳斎の前へと立つ。

元柳斎の前である事などまるで何でも無いかの様にやりと笑っている平子は飽くまで自然体だ。

「今回の決戦はワイら仮面の軍勢も参加させてもらうで」

「うむ、尸魂界に呼び、刃を交えていない以上、御主らは味方として見るものとする。此方からも協力は惜しまない心算ではある」

元柳斎は強固な姿勢でそう言うとしかし、と言葉を付け加える。

「御主らは、ワシ等を恨んではおらんのか？我等死神は御主らを虚とし、処分しようとした。恨まれる理由は十分在る筈じゃ」

平子はそれを聞くと鼻を鳴らして呆れた様に溜息を付く。

それはそんな事どうでもいい、という心の現れである。

「あれは藍染が企んだ事やからな、爺さん等は別にや、因みにな、

ワイ等は爺さん等の味方ぢやうで？」

語尾に付け加えた言葉を聞いて元柳斎は怪訝そうな表情を浮かべる。それが若干睨んでいる様に見えるのだが、平子はそんな事は気にせず言葉が続ける。

「ワイ等は、海燕と一護の味方や」

平子はそう言い残して一番隊隊舎を去って行った。

護廷の隊長、副隊長、そして一部の席官が穿界門の前に並び、その前に総隊長である元柳斎が副官である雀部長次郎さつきへちやうじろうを斜め後ろに立たせ、杖を勢いよく地面に打ち付ける。

「敵は大逆の徒、藍染惣右介とさらに隊長格と同等の力を持つと言われる十刃である！しかし我等には一切の敗北は許されぬ！！刺し違えてでも藍染等を討つのじゃ！！」

元柳斎の言葉の熱が冷めないまま死神達は穿界門の中へと進んで行った。

決戦の場は“偽”の空座町。

転界結柱という技術で尸魂界の流魂街に本物の空座町を送りつけ、今現世にある空座町は空座町のレプリカという訳だ。

勿論、レプリカの周りの空間には結界が張っており、外と干渉出来ないようになっていた。

そしてレプリカの町にいるのは死神達だけでは無い。

一護や仮面の軍勢もこの決戦に参戦するのだ。

本来ならば護廷の死神だけで決着をつけたかったのだが、今回はそうも言ってもらえず、現世の実力のある者達の力を借りる事にしたのだ。

勿論、その中には浦原や夜一も含まれており、彼等は現在藍染を倒す為の兵器を用意しているらしい。

因みに、人間達のなかで戦線に加わるのは一護だけでその他の者達は戦力外通告をされ、結界の外にいる。

其処はやはり彼らが人間だからという事だろう。
暫くすると、空の向こう空間が歪み、黒腔ガルガンタが開いた。

「やあ、豪勢な顔ぶれだね……護廷十三隊の新旧の隊長、副隊長に
上位席官、黒崎一護までいる様じゃないか」

藍染が立っている場所とは別に、十個の黒腔が宙に開いており、其
処には十刃とその従属官が不気味に構えていた。

突然、藍染の立っている場所に炎の壁が沸き起こる。

それは元柳斎が放った城郭炎上じょうかくえんじょうという技であり、これによって十刃
と戦っている最中の藍染の介入を防ぐ。

「藍染の動きは封じた！各隊の隊長、副隊長よ！雑兵共を一掃せ
い……！」

その言葉と共に死神、破面共にそれぞれ動き出し、戦いやすい場所
へと移動していった。

涅マユリと戦っているのは黒人風の破面で、名前はゾマリ・ルルー
という。

ゾマリは現世等で姿を見せていない十刃の一体であり、その能力は
未知数である。

「ほお、私は破面というのは初めて見たヨ。尸魂界に攻めてきた十
刃落ちとやらはホルマリン漬けにする前に消滅してしまっていてネ
エ？漸く、研究材料が揃いそうで私は嬉しいヨ」

不気味な笑顔を見せるマユリに構う事無く、ゾマリは刃を向ける。
しかし其処にいたマユリは刀が刺さった途端ドロドロと溶けだして
その液体がゾマリへと絡みついて行く。

「これは……」
液体はゾマリの体に纏わりついてそのまま固まってしまふ。

「出来るだけ部品パーツが揃ったままで研究したい物でネ。悪いが暫くそ
のまま置いてくれたまえ」

物陰から姿を現したマユリは余裕からか、斬魄刀を構えずにその場

に立っている。

「……あなたの方がよっぽど外道ですな」

ゾマリはそう言った後、固まった液体を虚弾で破壊し、体の自由を得る。

それと同時に虚閃を放ち、マユリの頭を打ち抜く。

しかしそのマユリも偽物で、今度は何もせずに再び元の形に戻る。

「好きに言ってくれて構わないヨ。その内何も考える事が出来なくなるのだからネエ？」

ゾマリは偽物のマユリから視線を外して探査回路を研ぎ澄ませて本物のマユリを探す。

しかしマユリの霊圧は目の前の“偽物”からしか感じる事が出来なかった。

尤も　その“偽物”は実は“本物”だったというのが事実なのだが。

グシャ、とゾマリの右肩をマユリの足殺地蔵が貫く。

「やれやれ、あんまり暴れる物だから傷を付けてしまったじゃあないか。自分の身体は大事にしたまえヨ」

どの口が言う、という視線をマユリに向けるがマユリの目はゾマリを研究対象としか見ていない為、どの様な誹謗も無駄という物である。

「……身体が言う事を聞こうとしませんね。あなたの刀の能力ですか？」

丁寧な口調の裏にはどのような真意が隠されているのか分からない。

しかしマユリはその事を気にせず足殺地蔵の能力を説明する。

それは斬りつけた相手の脳に“四肢を動かせ”という命令のみを検出して相手の動きを封じる能力。

しかも麻痺ではない為、痛みはしっかりと脳に届くという隙のない能力だ。

「なる程、流石隊長というだけはあるようですな。それならば、此方も本気を出しましょう!!」

叫んだ瞬間、ゾマリの身体は白い液体に包まれた。

死神は戦う（後書き）

原作では1〜3までの十刃が空座町にやってきた訳ですが、この小説では全ての十刃が空座町に進行してきました。ちゃんと書き分けられるか心配です。

感想、評価等、お待ちしていますんで何時でもお気軽にどうぞ！

蜂と鉢は蝟と狂気と遭遇する。(前書き)

ハッチと碎蜂です。

原作ならバラガンと戦っていた二人は誰と戦うのか、それは本編にご覧ください。

蜂と鉢は蝟と狂気と遭遇する。

仮面の軍勢のハッチは伸びてくる八本の触手の根っこから先端まで結界で覆った後、手の指を何度も鳴らす。

すると結界に覆われた触手がドサリと音を立てて地面に転がった。

「ツツ!!何すんだよ!!」

触手を全て切り離されたルピは超速再生で触手を再生した後、虚閃を放つ。

ハッチはそれを縛道の三九、えんこうせん円閘扇で完璧に防ぐ。

元副鬼道長であるハッチが使う鬼道は通常の物より優れていて、硬度も通常のそれよりも遥かに上である。

「あなたと私では実力が明らかに違いマス。大人しく負けを認めてくれれば助かるのデスが……」

「五月蠅いよ……この僕が負ける訳ないだろ!?!」

既に斬魄刀を解放したルピと明らかに余裕があるハッチ、この勝負は誰がどうみても勝敗が明らかである様だった。

碎蜂が瞬歩を駆使して敵の攻撃を回避する。

「どうしたのさ?さつきから攻撃を避けてばかりじゃないか!?!」

碎蜂と戦っているのはザエルアポロ・グランツという十刃で、所持している斬魄刀、フォルニカラス邪淫妃の能力はあまりにも悪趣味な物だ。

一つ目は対象のクローンを生み出す能力。

今ザエルアポロが使用しているのはこの能力で、碎蜂は現在大量にいる自分のクローンに襲われている。

クローンの一人一人が自分と同じ能力という事で、オリジナル自分が雀蜂の能力で殺られる可能性がものすごく高い。

尤も、別々の個体二人で二撃決殺が出来るのかは分からないのだが。

「ハアツ!!!」

碎蜂は向かってきた一人を雀蜂で仕留め、向かってきた二人を瞬間

で吹っ飛ばす。

しかし碎蜂のクローンはまるで分身の術を使っているかの様にずらりと五人程並んでいる。

クローン達は一斉に瞬間を発動し、碎蜂に向かっていく。

オリジナルの碎蜂はクローン達を弾き返しながらさり気無く雀蜂で蜂紋華を突いていき、隙を見て二撃決殺を成功させている。

クローンは残り三人、しかし此処でクローン達は音を立てて破裂していく。

「どうした、勝てないと見て諦めたか？」

碎蜂が相手の方を見るとザエルアポロは四本の長い羽を広げており、碎蜂を一瞬で包み込んだ。

碎蜂は其処から脱出した後、ザエルアポロを睨みつける。

そしてザエルアポロの方へ指を指し、一言呟く。

“殺れ”と。

気が付けばザエルアポロは隠密機動の隊員に囲まれており、隊員達から一斉にクナイが投げられる。

クナイの嵐がザエルアポロを襲うが、それを意にも介さずに羽を勢い良く広げる事で、クナイを弾き返す。

「ふん、僕にあんな攻撃が通用すると思ったのか？まあいい。それより、僕の^{リアクトロ・デ・タイテレ}人形芝居は見たくないかい？」

そういつて懐から取り出したのは碎蜂をデフォルメした様な人形で、ザエルアポロはその中にある、玩具の様な部品を指で潰す。

すると碎蜂は吐血し、その場に膝をついてしまう。

「この人形は君本体と感覚が繋がっていてね。この人形の中にある“胃”や“肺”などの内蔵を潰せばそれと同じく君の胃や肺が潰れるという仕組みさ。面白いだろう？」

そういつてザエルアポロは次々と碎蜂の“^{パーツ}部品”を破壊していく。

「く……貴様、よくも」

碎蜂の体の彼方此方から出血し、碎蜂はそのまま地面へと墜落していく。

「フッフ、所詮護廷の隊長なんてこの程度か」

その時、ザエルアポロの首元にヒヤリとした物が触れた。

碎蜂の雀蜂である。

しかし雀蜂を握るのは隠密機動の隊員であり、碎蜂ではない。

「何時の間に……入れ替わっていたんだい？」

「貴様の羽が広がっていた時からだ、部下の遺族には悪い事をした」
隠密機動の隊員達にクナイを投げさせたのは突然出現した隊員達を
不思議に思わせない為の布石であり、ザエルアポロはそれにまんま
と嵌ってしまった。

「これで、終わりだ!!」

首の蜂紋華にもう一撃加えると蜂紋華は光り輝き、ザエルアポロは
呆気なく息絶えた。

「所詮十刃などこの程度か」

ザエルアポロの言葉に被せる様に言った後、碎蜂はその場を離れよ
うとする。

が、次の瞬間、背後からザエルアポロの霊圧が感じられた。

「馬鹿な……」

碎蜂は確認の為に振り向くと其処には隠密機動の隊員の身体から出
てくるザエルアポロが姿を現しており、隊員の体は干物の様に干か
らびていた。

「第二R開始……ってね」

不敵に嗤うザエルアポロは、碎蜂を睨みつけたる。

「ふん、丁度いい、まだ物足りなかった所だ」

お互いに死んだと見せかけて相手を騙す二人はまるで狸と狐の様だ
った。

蜂と鉢は蛸と狂気と遭遇する。(後書き)

本物碎蜂VS偽物碎蜂(複数)というのをやってみたくてザエルアポロと戦わせていました。

それに碎蜂の部下達もザエルアポロの技に丁度良かったんです。

「部下の遺族には悪いことをした」
いやいや、部下本人は良いんですか、と自分でツツコミを入れてみる。

でも部下と関係が冷めているのが碎蜂なのです。

まあ、それは大前田に対してだけかもしれないんですが。

破面達は堕ちる（前書き）

すいません、書き直しました。

物語の進行速度を早める為に十刃全員の刀剣解放第二階層は止めました。

破面達は堕ちる

斬魄刀、呪眼僧伽を解放したゾマリの姿は異様な物となっていた。
下半身には人面の模様。

上半身には数十個に及ぶ不気味な目。

そして顔には顎と頭だけを覆う髑髏の仮面。

先程の白い液体はこの姿を形作る為の準備であり、それが成功した今、ゾマリの霊圧は以前の数倍まで膨れ上がった。

「ほお……これは何とまあ奇っ怪な姿になった物だよ」

マユリはそういう物の奇っ怪な姿をしているのは彼も同じである。

否、マユリの場合は毒々しい、と言うべきか。

「この姿をみた以上、あなたに勝利の道は残されていません。大人しく死に身を委ねる事をお勧めします」

そう言ったゾマリはじっと目を閉じてその場に構えている。

その姿はまるで黒人風の僧侶、否、ゾマリの場合は破戒僧というべきか。

その様な姿を象ったゾマリにマユリは興味深そうな視線を向ける。

「ネム!!!」

一言、その名を呼ぶとマユリの隣に自身の最高傑作であると共に一人娘である涅ネムが姿を現す。

「あの破面を此処に連れてきたまえ。失敗は許さないヨ?分かったネ、ネム?」

「了解です。マユリ様」

揺らぎのない、まるで機械にインプットされた様な声質で一言返事を
をするネム。

その表情は何を考えているのか分からない、それこそロボットの様な物だ。

「策も無く向かって来るとは……愚かとしか言い様がありませんな!!!」

ゾマリはそう言うつと両目を勢い良く開き、ネムを睨む。するとネムの頭に奇妙な模様が浮かび上がり、ネムの目は虚ろな物となる。

「私の能力は凡ゆる物の支配権を奪う事という物！手を見れば手の支配権を！足を睨めば足の支配権を！そして頭を見ればその全てを支配出来る！！私はこの能力を愛と呼んでます！！さあ、涅ネム！！自分の父親を殺さない！！」

ゾマリはネムにマユリを殺すよう、命令を下すが、ネムは其処を動かさずとしない。

怪訝に思ったゾマリがネムの顔を覗くと頭には愛が発動した証である模様が浮かび上がっている。

「無駄ダヨ。ネムは私の命令しか聞か無い様に作ってある。尤も、ネム自身の意思で他の物の命令を聞く事はあるがネエ？……ネム！！その三下を殺すんだヨ！！」

瞬間、ネムの手刀がゾマリの腹を貫き、ゾマリの腹からドクドクと血が流れる。

内蔵をやられたゾマリは吐血し、マユリを睨みつける。

「さて……思ったより傷ついてしまったが……まだ形は残っているネ」

マユリはゾマリに向かって球体のカプセルを投げるとカプセルから粘液が出てきてゾマリを包み込む。

口を覆った粘液は呼吸を封じ、四肢を縛った粘液は動きを封じ、口内に入り込んだ粘液は思考を封じた。

「捕獲完了ダヨ」

隠密機動の隊員の身体から復活したザエルアポロを碎蜂は睨みつける。

「どうした？貴様の妙な能力はあれで終わりか？」

碎蜂の挑発にザエルアポロは乗る事無く、そうだよ、と言葉を発する。

「でもね。僕にはまだ有能な従属官達がいるんだ、それも大勢……ね」

ザエルアポロがそう言うのと百を超えるかと思われるザエルアポロの従属官が二人を取り囲む様に並ぶ。

「お前達！！その女を倒せば褒美をやるう！！かかれ！！」

ザエルアポロの命令と共に従属官達が一齐に碎蜂に飛びかかる。

しかしその全てが隠密機動隊員達に制止され、碎蜂のザエルアポロへの追撃を許してしまう。

「二度と蘇らぬよう、跡形もなく消し飛ばしてやる！！」

碎蜂は再び瞬間を発動し、拳をザエルアポロの体へと当て、一気に霊力を込める。

胸から腰が弾け飛んだザエルアポロはそのまま地面へと墜落し、体が砂の様に変わって消え去っていった。

そんな中、碎蜂の副官である大前田がはしぎながら碎蜂に駆け寄る。

「やりましたね！隊長！！やっぱり隊長はスゲ……ヘブ！」

「騒ぐな、敵はまだいるのだ。喜ぶのは殲滅させた後にしろ」

碎蜂達隠密機動はその場を後にし、次の敵がいる場所へと向かった。

隊員が一人いなくなった事に気づかずに。

既に満身創痍のルピを鬼道で縛り、今できる最大の鬼道を放つ為に両の掌に霊力を溜める。

「クソオオ！！僕に……僕にこんな事して唯で素済むと思うなよオオオ！！」

「此処が戦場で無いのなら、話し合いも出来ましょう。戦場では一切の優しさは許されないのデス。さようなら、十刃の称号を持ちし破面よ。願わくば次に生れた時は虚に堕ちませぬ様に……破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲！！」

ハッチは両の掌から光線をルピに向け発射する。

ルピの表情は一瞬で恐怖に染まり、次の瞬間にはルピの居た場所には何も残っていなかった。

「どうやら、前座を務めた者達は散ってしまった様だ」
激しい炎を壁の中で藍染がそう呟いた。

その目は何かを楽しむ様で、空を見上げていた。

「せいぜい楽しませてくれたまえ、死神の諸君」

不敵に笑う藍染は何を思っているのか、それは誰にも分からない

破面達は堕ちる（後書き）

ザエルアポロは……死なないので扱いに困りますね。

原作と同じじゃあつまらないし、それ以外に殺す方法が思いつかない……

まあ永久に生き続けるというのもありっちゃあありでしょうか。

感想、評価等お待ちしております。

死神は柱を守る・前編(前書き)

今回妄想成分が入ってます。

死神は柱を守る・前編

激しく燃える紅蓮の炎は弱まる事を知らず、敵の大將を閉じ込める。その壁は外部と内部、両面からの攻撃は一切通さず、それが破面達に向けられれば、少なくとも従属官達は跡形も残さず消滅する事だろう。

それでも元柳斎が流刃若火の炎を従属官に向けないのはそれを行うまでも無く、二番隊以下の隊長、副隊長がそれ等を一扫すると分かっているからだろう。

十刃ならまだしも、従属官如きに王が手を下す様ではその組織の底が知れると元柳斎は理解しているのだ。

尤も、千年以上総隊長をやっていてそれが分かっていたなければそれはそれで問題なのだが。

護廷側の中で唯一の人間である一護が十刃の元へ行く訳でもなく、雀部の隣に立っている。

一護本人は自分が戦闘に参加していない事に歯痒い思いをしているのだが、それには重大な理由がある。

それは藍染の鏡花水月の始解を見ていないという事。

藍染の鏡花水月の能力は始解を見た者への完全催眠。

それを見ていない一護は藍染戦での貴重な戦力だからだ。

因みに、同じ理由で海燕も十刃との戦いには参加しない“予定”である。

「やってらんねえ……面倒くせえ……だりい……」

ブツブツと文句を言っているのはスタークだ。

彼は以前までは破面N01の地位にいたのだが、ウルキオラの隠していた力が発覚した事もあって破面N02へと降格された。

それは本人も納得の上であり、寧ろ面倒くさがりの彼にとってはありがたい出来事だった。

「あー帰りてえ」

文句を言い続けるスタークの股間に従属官であるリリネットが禁断の一撃を放つ。

股間を抑え悶えるスタークは涙目になりながらその場に蹲る。

「スターク！グチグチ文句言う暇あったら戦う相手でも見つけたらどうなのさ！？藍染様が動けないんだからしっかりしなくちゃ駄目だろ！？」

スタークとリリネットのコンビは破面の中でも比較的珍しいものだというのも、ハリベル以外の十刃は従属官を蔑ろにする傾向がある為、十刃に鉄拳制裁をする従属官、というのは他の破面には見られない光景だ。

「スターク、リリネットの言うとおりだ。お前は少し十刃という自覚を持った方がいいな」

リリネットの頭を撫でてスタークに手厳しい一言を言うハリベルは従属官を大事にするスタークに割と良い印象を持っている。それ故にこの様に普通に話しかける事が出来るのだ。

「うーん、あそこの三人を見てると悪者には見えないよねえ」

悩む様にそういった京楽に同意の意を現す為に浮竹が頷く。

「同感だ。特にあの少女は本来、戦場いくさばにいるべきでは無い様に思える……」

其処で二人の会話に師である元柳斎が入り、二人を窘めようとする。

「相手がどの様な輩であろうが、此処が戦場である限り、一切の情は許されん……それが善人であろうと、悪人であろうとな」

そう言った元柳斎に浮竹は何処か複雑そうな表情を浮かべ、京楽は三度笠を深くかぶり直す。

その表情は三度笠の鏝くわに隠れて良く見えないが、口元が困ったように笑っている事だけは見て分かる。

このレプリカの空座町の四隅にはそれを保つ為の柱がある。

王冠を被った老人の姿をした十刃はそれの破壊を命じた。

顔の殆どを仮面での名残で覆われた一体の従属官が両手の刃を笛の様に吹き、四体の巨大虚ヒューンホロウを呼び出す。

その四体は丁度四隅の柱の上に出現し、柱を破壊しようとする手を伸ばす。

だが、その四体は一瞬で斬殺され、黒く変色した後で呻き声を上げながら消滅していく。

柱を守った死神は柱の数と同じく四名。

一人は班目一角。

一人は綾瀬川弓親。

一人は阿散井恋次。

一人は朽木ルキア。

この四名は皆この日の為に海燕に鍛えられた者達だ。

弓親も一角の紹介により、海燕の修行を受けていて、その実力は十番隊とは言え最早五席の物では無い。

後二名程海燕に修行を施された者がいたのだが、その二名はそれぞれ自隊の隊長の傍にいる。

この四名の内、ルキアだけ一般隊員なのだが、浮竹、海燕、恋次の三名の推薦により、特例としてこの戦争に参加したのだ。

ルキアは元々席官相当の実力を持っているのだが、とある人物の手回しにより席官への昇格を叶わぬ物となっていた。

尤も、それは“とある人物”こと白哉がルキアの身を案じての物であり、今回の戦争への参加も一人反対していた。

「俺の相手はテメエか。木偶の棒？」

一角の相手をするのは巨大な体躯を持つ破面、チーノン・ポウ。

「え？君が僕の相手？……美しくないね」

弓親の相手をするのは筋肉質のオカマ、シャルロツテ・クールホン。

「えらくヒヨロヒヨロした奴と当たっちゃったな」
恋次の相手をするのは先程の巨大虚を呼んだ細身の男、フィンドー
ル・キャリアス。

「……何を叫んでおるのだ？」

ルキアの相手をするのは何処その部族の様な男、アビラマ・レツダ
ー。

アビラマはその場で蹲って絶叫していた。

本人曰く、“相手をぶちのめす為の儀式”らしい。

残りの七体の十刃達は未だ動かず、バラガンの従属官の内四名と柱
を守る四名の死神達で同時に戦闘が開始された。

死神は柱を守る・前編（後書き）

リリネットの頭を撫でるハリベル。

スタークと仲がいいハリベル。

両方とも妄想です。

ハリベルに頭を撫でられるリリネットをスンスンやアパッチ、ミラ・ローズが羨ましそうに見つめていたら更においしいです。

妄想乙、ですね。

H A H A H A ! !

さて、護廷の中で海燕の親衛隊の様な物が出来上がってます。

構成員はルキア、恋次、一角、弓親、吉良、檜佐木、それと副官である雛森の七人です。

雛森以外の六人は原作の破面編よりも遥かに強いです。

まあ隊長格までとは言いませんけどね。

けど恋次や一角はそれに迫るものがあります。

因みに海燕親衛隊、略して海燕隊の中では一角が一番強いです。

一番鍛えられた歴が長いですからね。

それにしても今回雑すぎた……

感想等、お待ちしています!!

死神は柱を守る・中編（前書き）

さて、海燕に鍛えられた者達の時間です。

死神は柱を守る・中編

破面の拳撃を避ける事無く、容易く片手一本で受け止めている一角の表情は彼の　　否、十一番隊の大好きな戦いの最中だと言うのに、何処かつまらなそうな、物足りなさそうな表情をしている。

一角は日番谷先遣隊がその任務を完了させた後、海燕が五番隊隊長に就任した直後に弟子入りを求めた。

それ故、海燕に鍛えられた者達の中では一番海燕との付き合いが長く、実力もあと少し修練を積みれば隊長格と同等の物になる。

尤も一角は一生を剣八の下で過ごす決めていた為、本人が卍解を隠している限り隊長に就任する事は絶対に無い。

「テメエの実力はこの程度かデカイの？」

そう言った一角は鬼灯丸をポウに向け、挑戦的な笑みを浮かべる。

その笑みは圧倒的な実力差に勝ち誇るといふ類の物では無く、ただ単に相手を挑発している笑みだ。

「ぐ……バカにするナ……」

ポウの若干言葉が片言になっているのは動揺している証拠だ。

ポウは拳を握り締め、一角の顔面に思い切りぶつける。

拳を離れた後、一角の様子を見ると其処には先程と変わらずその場に腕を組んで立っている一角の姿があった。

「ハッ、そうだよ、やれば出来るじゃねえか……」

一角は口内に溜まった血を吐き出すと言葉にだが、と付け加える。

「俺の相手をするにはまだ足りねえ!!」

そう叫べた一角は鬼灯丸を構えたまま、ポウに突進していった。

目の前に立っている破面には目もくれず、ブツブツと独り言を言いながら考え事をしているのは弓親だ。

時々聞こえてくるのは気色の悪い声色だけで、敵であるクールホーンもどうすれば良いのか迷っている。

「あなた……戦闘の最中に何を考えているのかしら？あなたにそんな余裕があるとは思えないけど……」

そう言ったクールホーンの方に顔を向けた弓親はポカンとした表情を浮かべた。

「君……いたのかい？」

ピキ、と言う効果音が聞こえてきそうな程、クールホーンの様子は強ばり、米神には青筋を立てている。

「全く……よく僕の前でそんな醜い顔を晒せるね？恥ずかしくないの？」

そう挑発した弓親の顔にクールホーンは一撃叩き込み　　否、

叩き込むことは叶わず、弓親はクールホーンの後ろに回り込んで逆に藤孔雀でクールホーンの背中に傷をつける。

「よ、よくも私の美しい体に傷を付けたわね……許さない！」

怒りの形相を見せた弓親は浅く溜息を付き、その後で不敵に笑いかける。

その顔は向けられた物が死をイメージするような、不気味な物だった。

「君、さっき僕に何を考えているのか、って聞いたよね？それはね……醜い君をせめて美しく殺す方法を考えていたのさ……！」

そういつた瞬間、弓親は藤孔雀を鞘に仕舞い、白打の構えを取った。

「僕が志波隊長に教わった新たな戦闘方法……見せてあげるよ」

ビルの上を走っている破面とそれを追う恋次、破面は恋次に背を向けて遠くへと逃げていく。

「此処等でもいい……」

フィンドールはビルの屋上に着地すると恋次の方へ振り返る。

「此処までくれば君は他の死神に助けを呼ぶ事は出来なくなる。大人しく俺を追いかけて来たのが仇になったな？」

フィンドールの言う通り、今いる場所は周りに死神が一人もいない、完全に恋次が孤立した状態になった。

フィンドールは不敵な笑みを浮かべて右手についている刃を草笛の様に吹き、音を鳴らした。

すると数体の巨大虚が黒腔を開いて出現し、一斉に恋次に襲いかかる。

「……………これがどうした」

だが、恋次の鞭の様な形状をしている蛇尾丸は人振りするだけでまだ距離のある巨大虚の仮面を貫き、地面へ墜落させる。

さらに三体横に並んでいる巨大虚の首を一度に切り落とし、自分の周りを回転するように斬り付ける事で周りにいた全ての巨大虚を一掃し、消滅させる。

既にビルの上に立っているのは恋次とフィンドール、この二人だけで、恋次は蛇尾丸を肩に担いでフィンドールを睨みつける。

「俺は今日まで十八日間毎日二十時間、ボロボロになるまで志波隊長と一角さんに扱かれたんだ。この程度は準備運動にもなりやしねえ」

恋次は修行した十八日間という日数は傍から見れば少ないかも知れないが、その内容は恋次にとって地獄とも言える者だった。

「此処でテメエ如きに負けるようじゃあ、また志波隊長に扱かれちまう……………」

恋次の脳裏に様々な光景が浮かび上がる。

後ろから虚閃を放ってくる仮面を装着し、さらに卍解を発動した海燕。

それを自分は瞬歩無しで逃げ続けた時間は一日十時間。

「絶対に……………テメエに負けるわけにはいかねえ!!」

恋次の心の叫びはある意味では自分の命を賭けた物だった。

既に斬魄刀を解放した両者は互いに遠距離からの攻撃を放ち、相殺していた。

ルキアはアビラマが放ってくるマシンガンの様に続け様に放ってくる大量の羽を自身の刀の能力で凍らした後でそれを自分に当たる前

に刀で砕いていた。

ルキアがアビラマの攻撃を弾きながら敵に近づいていくとアビラマもそれに乗り、互いに距離を詰めていく。

アビラマの方は相手は席官程度の雑魚だとタカをくくっているのだらう。

その表情は余裕そのもので、ルキアを馬鹿にしたように見つめていた。

「ハハア！！テメエの情報はこつちに届いてんだよ！！兄から根回しされて危険な仕事が出来ない様にされてる甘ちゃんだつてなあ！
！甘やかされて育つたテメエが戦いなんか碌に出来るわけがねえ！
！」

アビラマはそういいながら巨大な翼で風を起こし、ルキアの体を吹き飛ばそうとする。

しかし既にルキアは風の通り道から移動しており、その姿はアビラマの目には写っていない。

「あのような場所で育つた私が甘やかされているのなら、この世界の大多数の死神や人間が甘やかされているのだらうな」

ルキアの言う“あのような場所”というのは勿論、朽木家の屋敷ではない。

ルキアは死神を志す以前、流魂街の戌吊という場所で幼少期を過ごしていた。

其処は流魂街の中でも78番、つまり下から三番目に治安が悪く、ルキアや恋次曰く其処は“最低よりさらに下”の場所である。

戌吊より番号が下である草鹿や更木で育つたものから見れば、彼女は甘やかされているのは間違いない。

だが戦う力のない時にその場所にいたのなら、其処にいて生き残れた事は奇跡に近いだらう。

虚というのは破面化する前、人間の魂が墮ちた時からある程度戦う力を持っている物だ。

それが同族を食らって力を増し、大虚になり、中には中級大虚や最

上級大虚になって初めて破面になる。

元から戦う力を持っていた破面こそ、ルキアや恋次から見れば甘やかされている存在であり、“生きる力の弱い者”達だ。

ルキアはアビラマ背に乗り、四箇所傷をつけた。

そして自身の技を発動するための口上を紡ぐ。

“次の舞・白漣”と

死神は柱を守る・中編（後書き）

海燕が生きている事で変わった人達。

変わったのは強さであり、過去の自分を見つめ直すという心であり、心の余裕であったり。まあ色々です。

何時の間にか恋次が海燕と一角に可愛がられてた。

相撲部屋で問題になっていた可愛がりがBLEACHの世界にも！

？（殴）

これは「そうか、アレをやってほしいのか」「アレはいやあああ！

！」という奴です。

案外色んなところで見られるやり取りです。

アレってなんだよ、というツツコミはしてはいけないお約束。

それではノシ

死神は柱を守る・後編(前書き)

一方的に死神側が無双するのは詰まらない!!という方ごめんなさい
m — (m

今回は海燕に鍛えられた死神達の成長した所を披露する回です。

死神は柱を守る・後編

ポウに突進した一角はそのまま鬼灯丸で攻撃した後、ポウの首を片手で掴み、そのままビルの方へ投げ飛ばす。

壁を破壊し、建物の内部へと転がり込んだポウの表情は一角には見えないが、屈辱と悔しさが滲み出ている。

ポウは刀を袖の下から取り出し、解放するための解号を唱える。

「気吹け……巨腕鯨……うああああ！」

解放と共に巨大化したポウはビルの天井を破壊し、気だるげな呻き声を上げながら一角に殴りかかる。

「唯デ力くなるだけじゃあ、俺には勝てねえ!!！」

一角はその拳を両腕で受け止め、ポウの体を投げ飛ばそうとするが、修行したとはいえ、一角にその様な力は無い。

無いのだが

「うおりゃああああ!!！」

其処は気合で穴埋めし、投げ飛ばすまではいかなかった物の、拳を押し返し、ポウに尻餅を付かせた。

「いつたる？唯デ力くなるじゃあ俺には勝てねえつてな」

そういった一角の目は目尻の模様も手伝って獲物が鷹に睨まれた様な、そのような感覚を覚える。

ポウは虚園の辺境で生まれてから一度も味わった事の無い“恐怖”の感情に襲われた。

「ぐ……ぎゃああああ!!！」

それは一瞬の出来事だった。

ポウに止めを刺したのは一角ではなく、ポウの主人であるバラガンだ。

バラガンは自身の能力だろうか、ポウの体を風化させ、そのまま消滅させる。

「ふん……あの様な弱卒だと知っていたら声など掛けなかったのだ

がな……」

打撃同士で打ち合っているのは弓親とクールホーンだ。

弓親はとある事情により、刀を最大限に活用出来ない為、海燕の特訓によって白打を習得したのだ。

海燕は天才と言われるだけあつて斬拳走鬼全て揃った万能型の死神で、自分の技を弓親に教えたのだ。

「はあっ!!」

足を勢い良く振り上げ、クールホーンの米神に打撃を与える。

「本当は君の醜い体に触りたくないんだけど……ねっ!!」

さらに腹に拳を一発、左胸に連撃、最後に顔面に回し蹴りとリズム良く、まるで踊っているかの様にクールホーンに攻撃していく。

「ふっ。変哲もない唯の白打も僕がやるとどうしてこうも美しくなるのだろうか……? 永遠の謎だね」

弓親が自分に酔っているのと、クールホーン突然空中に飛び上がった。

「ふふっ! 油断したわね!! 必殺! ビューティフル・シャルロット・クールホーン・s・ミラク・スウィート・ウルトラ・ファンキー・ファンタステイック・ドラマティック・ロマンティック・サディステイック・エロティック・エキゾチック・アスレチック・ギロチン・アタック!!」

クールホーンは空中で回転しながら刀を弓親の頭上に向かって振り落とす。

長い技名だが、これは唯の刀を振り落とすだけの攻撃であり、回転する必要はない。

それを弓親は両手でそれを挟み、真剣白羽取りの形でその攻撃を防ぐ。

否、その両手は少しずつ上下にズレており、その目的は“挟みとる”のではなく、“挟み折る”事だった。

右と左の両面から力を入れ、根元より少し上の部分から刀をへし折る。

「く……斬魄刀（こんなものの）はなくても攻撃なんていくらでも出来るわ!!」
クールホーンは胸の前で手を組み、指でハートの形を作る。

「必殺! ビューティフル・シャルロツテ・クールホーン・s・ファ
イナル・ホーリー・ワンダフル・プリティ・スーパード・マグナム・
セクシー・セクシー・グラマラス・虚閃オ!!」
勿論、これは唯の虚閃である。

無駄に長い技名を叫ぶせいで、“攻撃される”という事が分かるため、これを回避する事は容易く、弓親はクールホーンの後ろに回った後で背骨を殴り飛ばす。

「駄目だね……君のお巫山戯（おひざな）にはもう付き合えない。終わらせてもらっよ」

そう言っ拳を握り締めてクールホーンに殴りかかる弓親だが突如としてその動きが停止する。

黒い茨が自身の周りを囲み、体に巻きついてきたのだ。

「白薔薇ノ刑（ロザブランカ）……お巫山戯……だったかしら、貴方はそのお巫山戯で死ぬの。この中は誰にも見えないし、霊圧も感じられない。素敵でしょう?」

「ああ、とつても素敵だね。但し、死ぬのは君だけ」

弓親はそういつて腰の刀を抜いてその能力を解放する。

「咲き狂え……瑠璃色孔雀!!」

弓親が解号を唱えると共に刀身が蔓へと変化し、途中途中に蕾が付く。

その蕾が開くと共にクールホーンの霊力が吸収されていくのだが、この能力は斬魄刀の中で鬼道系に分類され、十一番隊の中では暗黙の了解で、刀は直接攻撃系のみと決まっている。

その為、今まで弓親は刀の能力を隠していて、白打もその為に習得した。

それを何故今使うのかと言うと、黒い茨により、外部と内部の視覚と霊圧を遮断しているからに他ならない。

以前、一角も同じ様な理由で卍解を発動し、グリムジョーの従属官

に勝利を収めたのだが、一角はそれ以降一度も正解を発動していない。

「さて、君の霊圧……やっぱやめとこう。不細工がうつつたら困るからね」

弓親は倒れゆくクールホーンに背を向け、その場を立ち去った。

恋次と戦っているフィンドールの能力の一つ目は戦闘中に仮面を剥がす事で戦闘能力を増すという物だ。

そして既に斬魄刀は解放されており、フィンドールの両腕には左右非対称のハサミがついており、フィンドール・キャリアスの名前の通り、蟹を思わせる姿となっていた。

仮面の名残を八割方剥がしたフィンドールの霊圧は本人曰く副隊長相当の物らしい。

「そら！！避けれるか死神！？」

そう言つてフィンドールは虚閃を放ち、恋次を攻撃しようとする。恋次は一度その場を離れようとする物の、何故かその場に留まつて蛇尾丸で弾く。

「正解。君が今の攻撃を避けていれば後ろのガスタンクに穴が開き、毒ガスが散乱していた事だろう。流石だ副隊長！！」

フィンドールの言葉に苛立ちを覚えながらも蛇尾丸を連続でフィンドールに打ち付けようとする。

それを時々掠りながらだが回避に成功しているフィンドールの“副隊長相当の霊圧”というのは強ち嘘では無いかもしれない。

だがすでぬ恋次の実力と霊圧は副隊長の物差しでは測れない物になっているのもまた事実。

隙を見せたフィンドールの鳩尾に蛇尾丸を打ち付け、建物の壁の方へ吹っ飛ばす。

砂埃が晴れる頃にフィンドールの姿は其処になく、恋次が霊圧を探してみるとフィンドールの気配は背後に迫っていた。

「正解！！油断をせずに俺の姿を捉えた君の実力は確かに副隊長の

それより上の様だ！！だが、俺の仮面が全て剥ぎ終わって無い事を忘れていたのは残念だ！！不正解ノ・エス・エサクト！！」

フィンドールは腕についている刃で再度仮面を剥がす。

すると霊圧が一気に増幅し、恋次のそれより強大な物になる。

「九割の仮面を剥がした俺の霊圧は隊長格のそれと同等！！副隊長のお前に勝てる道理は無い！！」

フィンドールはそう叫んで高圧水流のカッターを恋次に向けて放った。

恋次はそれを上に飛んで回避し、フィンドールから距離を取る。

「正解エサクト。一旦体勢を立て直すために……」

「うるせえよ。」

恋次はフィンドールの言葉を遮り、体勢を立て直すために距離を取った、という事を否定する。

「俺が距離を取ったのはコイツを発動する為だ………」正解

“狒狒王蛇尾丸”を解放した後、恋次は狒狒の骨と毛皮を身に纏い、刀身が大蛇の骸骨の様な者へと変わる。

「これで終いにするぜ……狒骨大砲ひこつたいほう！！」

海燕との修行により、速射が可能になったそれはフィンドールに逃げる暇を与えず、見事に体に命中した。

「テメエの実力が隊長相当なら俺に負ける訳がねえだろ……」

ルキアの次の舞・白漣は本来地面を四箇所傷付け、其処から雪崩を巻き起こす、という技だ。

その“四箇所を傷つける”という過程を生き物の体に行なったらどうなるのか、その答えがルキアの目の前にある氷の塊である。

氷の塊の中のアビラマの目は既に死んでいて、霊圧も感じられない事から既に息絶えている事が分かる。

「さらばだ……生きる力の弱いものよ。永久に眠るがいい」

ルキアが氷に向かって刀を振るい、そのまま鞘に収めると、氷の中のアビラマごとバラバラに切り落とされた。

このような剣技は元々剣の才に恵まれていなかったルキアが、海燕に教えられた物であり、ルキアは海燕に鍛えられた物達の中では一番成長が早かった。

もしも数ヶ月前、海燕が現世で蘇っていないければ、ルキアの実力は今より格段に落ちていた事だろう。

尤も、それはルキアだけでは無く、恋次や一角、弓親、檜佐木、吉良の全員に言える事なのだが。

「さて、いつまでもこの様な場所においても仕方がないな」
そう言つてルキアはその場を立ち去り、その間に自分が成長した事を実感するのだった。

死神は柱を守る・後編（後書き）

バラガンの従属官達は犠牲になったのだ……………
次回からは一方的な戦いにはなりません。ならないと思います。多
分。きっと。恐らく。

さて、自分でも強化させすぎた感があります。

ですがそうでもしないと破面達を容易く倒せない事も事実。
容易く、というのが重要なんですよ。

海燕の凄さを見せつける為には。

主人公持ち上げすぎですかね……………

感想、評価等お待ちしています。

番外編・燕は氷の王子と友達になる（前書き）

番外編じゃなくて本編書けよ！という声が聞こえそうで怖い。

あんまり戦闘が続くと疲れちゃったりなんだからので番外編にて
日常を書こうかと思えます。

番外編なのでいつもより短いです。

番外編・燕は氷の王子と友達になる

これは志波海燕が五番隊隊長に就任したばかりの時の話だ。

海燕の副官である雛森は海燕が復帰した途端に今までの鬱状態が嘘の様に元気になり、五番隊の隊士達は安堵の息を漏らしたという。それは雛森の幼馴染である日番谷冬獅郎も同様で、藍染が裏切った事への騒ぎが落ち着いた後、日番谷は海燕の執務室へ赴いた。

日番谷は海燕が用意した茶を人啜りした後、徐に口を開く。

「志波……雛森を元気づけてくれた様だな。あいつは藍染に裏切られた事で酷く気持ちが悪んでいたからな。お前が五番隊の隊長に就任してくれて本当に良かった。あいつの幼馴染みとして礼を言わせてもらおう」

日番谷はそう言って頭を下げ、礼を言った後で海燕の顔を見て怪訝そうな表情を浮かべる。

海燕は日番谷を見て“にやにや”していたのだ。

「く、くくく……な〜にが“幼馴染として”だよ！思いつきり惚れてんじゃねえか！」

そう言いながら爆笑する海燕を見て日番谷は顔を紅潮させながら机をバン、と激しく叩く。

「テメエ……人が真剣な話をするのに茶化すんじゃねえよ！」

「へえ〜雛森の話が“真剣な話”か……頑張れよ、冬獅郎！応援してやるぞ！」

そういつて自分の頭を撫でる海燕の手を払い、海燕の言葉を否定する日番谷だが、海燕は照れるな照れるな、と聞く耳を持つとうとしない。

【ガタン】

突然、執務室の扉の方から物音がしてそちらを見ると

「ごめんなさい……志波隊長、シロちゃ……日番谷君。聞くつ

もりは無かつただけ……えと、じゃあごゆっくり!」

雛森はそう言つてダッシュで執務室を去つて行つた。

日番谷はそれを慌てて追いかけて行き、それから数十分日番谷と雛森の追いかけつこが始まつたという。

因みに

「うふふ……隊長についてきて正解だつたわ……」

翌日、女性死神協会の理事により盗聴された日番谷と海燕の会話が
出回り、日番谷が激怒したのは言うまでも無い。

これはある切っ掛けにより仲良くなつた二人が度々一緒にいる所を
見かけた死神達の証言だ。

十三番隊ユキウサギさんの証言。

「海燕殿と日番谷隊長? ああ仲が良さそうだつたな……日番谷隊長
には失礼だが……まるで兄弟の様だつたな」

どちらが兄でどちらが弟かは言う必要がないと思われる。

通りすがりの黒猫姫さんの証言。

「日番谷坊は今一素直になれない様だが……あれは完全に懐いてお
つたな。お姉さんの目は誤魔化せんぞ」

さて、お姉さんとは誰の事でしょうか……あ、すみません!

五番隊、桃梅さんの証言。

「日番谷君? 最近志波隊長の話ばかりしてるんですよ。これを切っ
掛けにもうちよつと素直になつてくれると良いんですけど……」
流石幼馴染、人にはしなない話もしてくれるんですね。

この三つの証言から総合するに、日番谷隊長は志波隊長に心を許し
たと思われる。

これを信じるか信じないかは貴方次第です……それではまた来週。
死神女性協会の理事より

番外編・燕は氷の王子と友達になる（後書き）

さて、海燕と日番谷の顔合わせです。

まあ、ひつつんを海燕に懐かせたいという目的で書いただけの話なんですけど。

次は誰と絡ませましょうか……

あ、次回も番外編です。

海燕と　を絡ませて！と言っのがあったら感想にてどうぞ。
できる限り応えようと思います。

番外編・燕は蜂と友達になる（前書き）

今回は碎蜂です。

次回辺りから本編いこうかな、と思っています。

番外編・燕は蜂と友達になる

ウィーン、と機械的な音が鳴って自動ドアが海燕を迎え、天井に設置された機械からは心地よい風が伝わってくる。

この二番隊隊舎には副隊長である大前田稀千代、本名を大前田 日光太郎右衛門 美菖蒲介 希千代が碎蜂の命令により、自腹で様々な快適機器が設置させられている。

勿論、彼女の性格からして、普段の生活にそんな物を求めている訳は無い。

と、なるとその理由は誰かの為、という事になる。

その誰か、とは先代の隠密起動総司令官、四楓院夜一なのだが、今二番隊の隊舎のドアを潜ったのは夜一ではない。

「えーと碎蜂隊長……呼んだか？」

海燕は普段あまり交流のない碎蜂に呼ばれて二番隊の隊長室へと足を運んだ。

碎蜂は海燕に背を向けて窓の外を見ている。

窓の外にはなんの変哲もない、殺風景な隊舎裏の景色が広がっている。

「志波よ……単刀直入に聞くぞ」

そのただならぬ雰囲気には海燕は息を飲み、碎蜂の言葉を一字一句聞き逃すまいと碎蜂に意識を集中する。

しかし、碎蜂の口から出た言葉は余りに予想外で、海燕はもう一度聞き返す。

「碎蜂隊長……悪い、もう一度言ってくれませんか？」

碎蜂は海燕を軽く睨みつけながら顔を紅潮させる。

「だから……友とは何だ、と聞いたのだ！お前は護廷の中でも交友関係が特に広いだろう？もう一度聞くぞ、友とは何だ！？」

碎蜂の問いに海燕は少し考えた後で、自分の思う“友”を語る。

「友つつうのは……一緒に好きな事したり、楽しく無駄話できる奴

の事を言うんじゃないのか？」

普段の彼女ならこんな事は人には聞かないだろう。百歩譲って夜一に聞く事はあるだろうが、生憎夜一は今戸魂界に来ていない。

其処で先程言った通り、交友関係の広い海燕に聞く事にしたのだ。

因みに、碎蜂が何故こんな事を聞いたかと言うと

「夜一さんが友を作れって言った……？」

海燕が碎蜂の言った事を復唱すると、碎蜂はうむ、と首を縦に振った。

「藍染の事件の後、夜一様に『お前も一人ぐらい休みの日に一緒に戯れる為の友人でも作れ』と申されたのだ……夜一様によると友人というのは人生の中でも重要な役割を持つという……だが、私にはその重要性が分からない……」

頭を抱えて悩む碎蜂に海燕はじゃあ、とある提案をする。

「じゃあ俺と友達になれば良いんじゃないか？そうすれば友達的重要性が分かる。それに相談を持ちかけたって事は俺の事を嫌いじゃないって事だろ？」

海燕の申し出に碎蜂は顔を赤らめながらもそれに同意し、そーっと右手を差し出した。

海燕はそれをガシッと掴み、笑顔を向ける。

「ヨロシクな、碎蜂！！」

これは五番隊隊長、志波海燕と二番隊隊長、碎蜂が度々一緒にいる所を目撃され、その証言を得たものである。

女性死神協会理事長、烈花さんの証言。

「あんな楽しそうな碎蜂隊長は初めて見ましたね。女性死神協会始まって以来のスキヤンダルかもしれません」
スキヤンダルの意味分かってますか……？

十三番隊、双魚のお断りさんの証言。

「はっはっは、友達が出来たのは良い事だな」
あなたは保護者ですか……？

八番隊、大人の男性さんの証言。

「いやあく志波君も隅に置けないねえ……僕も七織ちゃんと……えへへへ」

質問の最中に妄想しないでください。

以上が目撃者達の証言であるが、これを信じるか信じないかはあなた次第です。

それではまた来週……

女性死神協会の記者より

番外編・燕は蜂と友達になる（後書き）

海燕と　の絡みが見たい！！というのは常時受け付けしています。
次回から本編ですが、そういうのが溜まってきたらまた番外編をや
ろうかと思えます！！

それではノシ

難と吉は破壊と戦う（前書き）

さて、誰と誰を戦わせようか悩んでいる今日この頃……
今回は吉良&難森VSグリムジョーです。

雛と吉は破壊と戦う

霊子で足元を固め、ゆっくりとターゲットの元へと向かう。

そのターゲットは此方に気づいている様で、腰の鞘から刀を抜いて此方を見る。

ターゲットであるグリムジョーに向かって刀を構えている死神は二名。

三番隊副隊長である吉良イヅルと五番隊副隊長、雛森桃だ。

「テメエ等副隊長だよ……ちつ、俺の相手はゴミかよ」

グリムジョーの発言に雛森は異論を唱えようとしたが、吉良に制止されてグッと押し黙る。

「ゴミかどうかは戦ってから決める事だね。僕も雛森君もこの日の為に修行を積んできた……特に僕は」

そういつて瞬歩を使った吉良が次に姿を現したのはグリムジョーの背後で、既に解放してある自身の刀で背中を斬り付ける。

「志波隊長に鍛えられたんだ、少なくとも君に重傷を負わせるぐらいの事はしてみせる」

次の瞬間、吉良とは別方向から複数の火の玉が飛んで来てグリムジョーの身体に命中する。

それは雛森の飛梅の能力で作られた火の玉だ。

「吉良君！！離れて！！」

雛森はもう一度、火球を放とうと吉良に声を掛ける。

先程は吉良が近くにいた為に、火球の威力と大きさを抑えていたが、今度は手加減などしない。

爆発音と共に灰色の煙がグリムジョーを包むが雛森は攻撃の手を緩めずに攻撃する。

「！！！」

突然、煙の中からグリムジョーの手が伸びて雛森を掴もうとするが、咄嗟に吉良が縛道を放ってグリムジョーを捕縛した。

「大丈夫かい！雛森君！！」

吉良が雛森の方に駆け寄り、身体に外傷がないか確かめるが、雛森は殆ど無傷でその場に立っていた。

「吉良君、私の事は良いから戦いに集中して。私だって志波隊長にこの場を任されたんだから……ね？」

吉良は雛森の言葉にそれもそうだ、と気を引き締めてグリムジョーの方を見る。

「すまない。戦場での気遣いは無用だったね」

そう言った吉良はグリムジョーを捕縛している鬼道が解け始めているのを見て、即座に刀で斬りかかる。

一度、二度と斬る度にグリムジョーの表情が強ばり、吉良を睨みつける。

「テメエ……何しやがった！！」

その言葉と共に強引に鬼道を破って吉良に斬りかかる。

侘助の能力により、グリムジョーの体重は六倍程に増大している筈だが、グリムジョーはそれを苦にせず、相変わらずの素早さで吉良を翻弄する。

そんな中、突然吉良の姿が消え、グリムジョーは怪訝そうな表情をする。

吉良の姿は見えなくなっている物の、霊圧は感じられる為、まだ近くにいる事が分かるが、瞬歩を活用しているせい、その霊圧は消えては現れ、消えては現れを繰り返している。

「あの女もいねえな……」

よく見ると雛森の姿も消えていて、その霊圧も吉良と同様に捕捉は困難である。

そもそも、此処は戦場、つまり大勢の死神や破面がいる為、霊圧の場所は特定しづらいのだ。

「破道の三十三・蒼火墜！！」

「破道の三十一・赤火玉！！」

同時に放たれた中級鬼道はグリムジョーにとっては子供に石を投げられた程のダメージしか与えられず、逆に今放った鬼道で二人の居場所が大方特定できた。

移動する前に鬼道が飛んできた場所へと虚閃を放つ。

すると二人の姿がボンヤリとだけ見え始めて、虚閃は雛森へと直撃した。

二人の姿を消していたのは縛道の二十六、曲光という術で、術者である雛森が虚閃を食らった事により、二人を被っていた霊圧が薄くなっただけだった。

「先ず……一人目!!」

虚閃によって吹っ飛ばされた雛森をグリムジョーが追撃しようと追いかけるが、吉良が咄嗟に侘助で斬りかかった為、その動きは先ほどより鈍重な物になり、さらに攻撃を加えるのは吉良にとって容易な事だった。

「流石……十刃というだけはあるな。四回も斬ったのにまだ充分に動いているとは。驚嘆に値するよ」

吉良は吹っ飛ばされた雛森に構う事無く、グリムジョーから目を離さない。

先程本人から言われた事だが、戦場での気遣いはその人物への侮辱に値する。

雛森に行なった自分の行為は正にそれだったのだ。

「はっ、どうやら唯のゴミじゃあないみてえだな、なら、これはどうだ!？」

自身の刀から右手を離し、吉良の顔を鷲掴みにした後で零距离から虚閃を放つ。

鷲掴みされている事で逃げる事も叶わず、真面に虚閃を食らってしまふ。

グリムジョーは吉良を空中に放り投げるが、吉良は空中に足を付いて再び刀を構える。

「……今のを食らって平然としてやがるとはな」

「それでもないよ。結構危なかった」

吉良はそう言っただけで自分の顔に手をやると傷だらけの顔が次の瞬間には傷が治っていて、傷一つない、綺麗な肌に戻っていた。

吉良は護廷に入隊した直後は五番隊に勤めていたのだが、その直後に四番隊に移っていた。

つまり、吉良は治療系鬼道を使う事が出来、海燕との修行

正確には海燕に紹介された花太郎との修行で治療系鬼道の腕を格段に上達させた。

そんな事があつて今からでも四番隊の上位席官に入れるほどの腕前にまでなっていて、攻撃と治療の両方が出来る万能型の死神となっていた。

「……雛森君！今だ！！」

吉良がそう叫ぶとグリムジョーの背後から通常のそれより遙かに巨大な巨大な円盤状の炎、破道の五十四、廃炎がグリムジョーに向かって放たれた。

グリムジョーが逃げようとした瞬間、吉良が縛道の六十一、六杖光牢を使ってグリムジョーの身体を拘束した。

巨大な炎塊がグリムジョーの体を焼き焦がし、辺りに黒煙が舞う。

雛森はグリムジョーに刀剣解放をさせぬよう、間髪入れずに飛梅から火球を放つ。

だがその火球は突如発生した強大な霊圧の渦にかき消されてしまう。二人の、恐れていた自体が今起こったのだ

「軋れ……豹王ア！！」

煙の中から現れたのは猛獣の鬣を思わせるような長髪を頭に生やしたグリムジョーが姿を現した。

それだけでは無い。

豹の様な長いしっぽに両肘、両脚には鋭い刃が装着され、その姿は豹の王と呼ぶに相応しいオーラを醸し出していた。

「精々踏ん張れよ死神い！！」

グリムジョーは両手を吉良に向けて翳し、霊力を溜めた

雛と吉は破壊と戦う（後書き）

海燕に鍛えられた吉良と藍染を敵と割り切った事により、精神的に強くなった雛森はグリムジョーに勝てるのか、それは作者にも分からない（何）

蛇猿は新たな技を見せる（前書き）

明けましておめでとーいございますー！！

今回吉良君が漢を見せます。

男ではありません。？でもありません。でもありません。漢なの
です。

そして恋次が

今回の話は嫌いな人もいるかもしれません。

蛇猿は新たな技を見せる

自身の血液を混ぜて力を増した虚閃は王虚グランレイの閃光と名を変えて標的を狙う。

その破壊の閃光は吉良と雛森を巻き込む為に辺りの建物の残骸を粉々にしていき、間もなく吉良と雛森に直撃した。

砂埃が晴れ、王虚の閃光が抉った地面の傷跡の先に立っているのは雛森を庇うように両手を広げて王虚の閃光を防いだ吉良だった。

「ぐっ……」

吉良は全身傷だらけな上、死覇装もボロボロになっていて、意識はあるものの、力なくその場に倒れ込んだ。

「吉良君！ー！ごめんね……私のせい……！」

雛森が吉良の怪我を直そうと鬼道を使用するが、グリムジョーがそんな暇を与える筈もなく、虚閃を雛森が襲った。

だが、雛森は縛道の三十九、円闌扇でそれを防いだ物の、吉良の治療に使える霊力がもう残っていないかった。

「はっ、霊力を防御に使って何も出来なくなっちゃったら世話ねえな」

グリムジョーが雛森に手を伸ばして首を絞める。

雛森は手足を動かして足掻いてはいるものの、グリムジョーの前ではそれは無意味だった。

「死ね」

グリムジョーは首を絞めるのではなく、潰す為に手のひらに力をいれた。

ミシミシと骨が軋む音が聞こえ、雛森は嘔吐してしまう。

だがそんな時、グリムジョーの腕に衝撃が走り、雛森を地面に落とすしてしまう。

「テメエ……吉良と雛森を……」

先程、フィンドールと戦闘を終えた恋次と

「二人の治療は私がする！恋次はその荒くれ者を倒せ！！」
アピラマを倒したルキアがこの場に駆けつけた。
この二人は然程ダメージを受けておらず、霊力も有り余っている。
つまり、恋次がグリムジョーを止めて、ルキアが二人を治療するのは思ったほど難しくないという事だ。

「ん……」

まず先に目を覚ましたのは吉良だ。

ルキアは恋次がグリムジョーと戦っている事を吉良に伝えると安心した様に溜息を漏らした。

「そうか、阿散井君なら大丈夫だ……安心して任せられるね」

割と近い所から爆発音等が聞こえてくるが、吉良とルキアは恋次が勝利する事を信じている。

何故なら恋次は海燕にある物を仕込まれたからだ。

そのあるものとは

「どうした猫野郎！！さつきから攻撃がぬりいぞ！！」

恋次は蛇尾丸を伸ばして遠距離からグリムジョーを攻撃する。

蛇尾丸が攻撃してくる方向は完璧にグリムジョーの死角を付いていて、何時もの恋次とは比べものにならないほど、的確な攻撃を繰り返して出していた。

以前の恋次に足りなかった物は冷静心と心の余裕だ。

戦いで常に冷静でいたならば相手の隙が見えてくるし、心に余裕があればその隙を狙える。

役半月の修行で恋次はそれを手に入れたのだった。

「ハハツ！！俺が猫だと？行ってくれるじゃねえか！！じゃあお前は何だ！猿か！？」

「知らねえよ！！」

二人は戦いを楽しんでいた。

恋次は十一番隊にいた事もあって、元々戦いは嫌いでは無いし、グ

リムジヨーも好戦的な者が多い破面の例に漏れず、戦闘狂の節がある。

一護や一角もそうだが、恋次とグリムジヨーは性質が似ていた。もっとと広く言えば、剣八や海燕も似たような性質をしていると思われる。

性格や言動などでは無い、もっと深い別の何かが。

「死ねえ！！豹王の爪！！」

グリムジヨーは両手から十本の刃を出して恋次を攻撃しようとする。一方、恋次はというとその十本の刃を見切り、回避した後で自分の今出来る最強の技を繰り出す。

それは狒牙絶咬や狒骨大砲とは違う、海燕との修行で編み出した新たな技だ。

「狒龍……破焼！！」

その技名を唱えると蛇尾丸の刀身は狒狒王蛇尾丸の形状とはまた違った炎を纏った龍の姿となり、辺りに灼熱の息を撒き散らす。

「わりいな……これはまだ制御出来てねえもんで無差別に攻撃しまう……火傷しねえ様に気い付けろよ！！」

狒龍はグリムジヨーをギリギリと睨み、大口を開けて突っ込んでいき、グリムジヨーを飲み込み込んだ後、空へと舞い上がっていった。

狒龍は空を敵ねる様に飛翔し、その姿は正しく飛龍と呼ぶに相応しい姿だった。

この技は狒龍が相手を飲み込んだ後、焼け死ぬまで空を舞い続けるという技なのだが、これを使用した時点で恋次の霊力は大幅に減少しており、狒龍の制御は難しかった。

「ちっ……」

案の定、狒龍はグリムジヨーを殺しきる前に消滅し、恋次もその場で気絶してしまった。

「恋次……勝ったのだな！！」

ルキアは雛森と吉良の治療を終えた後で恋次を回収しに戦闘が起こ

つていた場所へと足を運んだ。

「よし、恋次！よくやった！！……つて気絶しておるのか、まあ無理もないな」

ルキアは恋次の肩を担いでその場を離れていった。

その時、ビルの影で小さな物音がしたのだが、ルキアはそれに気がつかなかった。

蛇猿は新たな技を見せる（後書き）

恋次が新技を披露しました。

とは言っても僕が考えたオリジナル技なんですけど。

狒龍破焼

要するに火炎の息を吐く飛竜の召喚です。

飛龍なのか火竜なのかはつきりしろっていうツツコミはご勘弁。
何故ならあれは狒龍なのだから。（意味不）

風の兵は修行の成果を見せる。(前書き)

海燕親衛隊が修行で得た物

一角 単純な力

弓親 白打という戦闘法

恋次 新技

ルキア 剣術の向上

吉良 治癒術の向上

檜左木 ????

さて、檜左木が特訓で得たものとは????本編をご覧ください。

風の兵は修行の成果を見せる。

地面の上を足音を抑えながら進み、靈圧の感じる方へと足を勧める。ある程度靈圧の発生源に近づくとその場で足を止めてビルの影へ隠れている靈圧の主へと針状の刃を放つ。

ビルの壁を破壊して突き刺さったと思われる針状の刃は敵の刀武器によって全て防がれ、十刃の一人、ノイトラは従属官を連れて要と檜佐木の前へ姿を現した。

「おーおー、裏切り者の統括官様が副官を連れて何の様だ？」

軽口を叩くノイトラに要の清虫二式・紅飛蝗が再び牙を向くが先程と同じく八の字の形をした鎌で防がれてしまう。

「自分の過ちを誤魔化すつもりは無い……だが私は唯自分の正義を貫くのみ」

要はノイトラの挑発を冷静に受け流して、静かに清虫を構えた。

ノイトラは軽く鼻を鳴らした後、自分の従属官であるテスラにアイコンタクトで指示し、要に斬りかからせる。

だが、それは叶わずに檜佐木によって制止される。

「お前の相手は俺だ、優男」

檜佐木はテスラの刀を弾いて互いに様子を伺う。

テスラは浅く溜め息をついた後で刀を持ち直す。

「あなたを倒さなければ裏切り者の粛清は出来ない様だな」

テスラはそういつて響転で戦いやすい場所へと移動し、檜佐木もそれについて行った。

二人が立ち去ったのを見届けた後でノイトラは要に向かって足を進めて剣を構えた。

「来いよ裏切り者！バラバラにしてやんぜ！！」

ノイトラは八の字の、奇妙な形をした刀で要の首を刈り取るべく振るうが、要は少ない動作でそれを防御し、素早く攻撃に移る。

「はっ！！！！」

刀を横に一閃してノイトラの皮膚を斬り付けるが、その強固な鋼皮イェロに傷を付ける事は叶わず、容易く弾かれてしまう。

「喰らえよ、統括官サマ!!!」

ノイトラは手の平から虚弾を放ち、要を攻撃するがそれは全て要に防がれて失敗に終わる。

両者の攻撃は理由は違えど、一切通る事無く、互いに無効化される。だが、次の瞬間、要の攻撃によりノイトラの体から鮮血が舞う事になる。

「テメエ……」

要は容赦なく攻撃を加え、その全てがノイトラの体を傷つけている。この斬撃はその威力でノイトラの鋼皮を貫いている訳ではない。

刀がノイトラの体に触れる瞬間、振動を与えて減り込ませているのだ。

「どうやらお前の肉体は思いのほか脆いらしいな」

ノイトラは要の挑発に舌打ちを打ちながら憎憎しげに睨み付け、一旦距離をとった後、鎌の先端に風を集める。

これはノイトラが刀剣解放をする時の予備動作であり、刀剣解放をするという事は今まで与えたダメージが全て回復する事、そして今まで以上に力が増すという事だ。

だが、要はまだ卍解サンタテレサを使用しておらず、手札的には余裕があった。

「祈れ!!! 聖哭螳?!!!」

ノイトラが叫んだと同時にその姿が変わっていった。

檜佐木達が移動した先は先程恋次とグリムジョーが戦っていた場所だ。

「此処で良いだろう」

テスラは地面の感触を確かめるように軽くジャンプし、虚閃で瓦礫を消し飛ばす。

檜佐木がこの場に到着した後、檜佐木の足が地面に着く前に素早く斬りかかるが、檜佐木は素早く反応して罅迫り合いの形に持ってい

つた。

「ハア！！」

檜佐木は罅迫り合いの状態から一步下がり、腰を低くしてテスラの体を斬ろうと攻撃を加える。

テスラは体をくの字に曲げて回避し、檜佐木の頭を跳ね飛ばそうとする。

だが、檜佐木は瞬歩でそれを回避するとテスラの背後へ回って刀を背中に突き刺そうとする。

横に避けたテスラは横腹を僅かに傷つけて檜佐木に向き合う。

「ずいぶんと必死だな」

「テメエもだろ」

檜佐木はテスラの言葉に短く返した後で刀を構えなおす。

「不本意だが……やってやる！！」

檜佐木は自身の刀を解放すると鎖の先にある鎌をテスラに向けて投げける。

テスラはそれを虚弾を放って勢いを殺す。

「その斬魄刀は厄介だな」

冷静な口調は一切乱れる事無く、檜佐木の死角を狙うべく背後へと回る。

だがテスラの左右両方から飛んできた二つの鎌はそれぞれテスラの下半身と上半身を切り離すべく飛んできた。

「打ち伏せる牙鎧士^{ベルガ}！！」

刀が直撃する瞬間テスラは自身の斬魄刀を解放した。

猪のような獣戦士の姿になったテスラの肉に食い込む鎌は特に傷を付ける事も無く、カランと音を立てて地面に落ちた。

そして拳を振り下ろしたテスラだが、既に檜佐木の姿は其処に無く、次の攻撃に移るべく風死を動かしていた。

鎖がテスラの身体に巻きついて動きを封じ、檜佐木は自分が引きずりこまれない様、腰^{つづりいでん}に力を入れる。

「破道の十一、綴雷電^{つづりいでん}！！」

風死の鎖を伝つて流れた電流はテスラの動きを鈍らせ、体の内部にダメージを与える。

「外傷を与えられないと分かると即座に内部への攻撃に移す……か。でも俺にはこの程度の鬼道は通用しない!!」

テスラは自身の両腕に絡まっている鎖を解くと口から、否、口というより口の横に生えている牙から虚閃を放つ。

檜佐木は鎖を繋いだまま縛道で作った盾を形成して虚閃を弾く。

「ち……厄介なのはテメエも同じだな」

外傷を与えるにはあの筋肉の鎧が邪魔。

内傷を与えるには自分の使える鬼道では心許ない。

となるとやる事は一つ。

「その邪魔くせえ筋肉の鎧を貫く程の攻撃をすればいい訳だ!」

檜佐木は刀を構えたままテスラに向き直った後

「卍、解……!!」

檜佐木がそう唱えると竜巻が檜佐木を包み、その姿は一切見えなくなつた。

風の兵は修行の成果を見せる。(後書き)

今回はその全貌と正解名が出ませんでした。が次回、必ず出ます。能力はそれなりに強いです。

風の兵は正を解する、鈴虫は危機に陥る（前書き）

檜左木の正解お披露目です。

もしも原作で檜左木が正解してしまったら
願います。

ノータッチでお

風の兵は卍を解する、鈴虫は危機に陥る

竜巻の中から一歩ずつ足を踏み出して外に出てきた檜佐木は死覇装では無く、忍び装束を纏っていた。戦いやすいように軽量化された鎖帷子くさりかたびらを忍び装束の下に纏い、頭は黒い布で覆われていて、口元はマスクで覆い隠してその姿は正しく忍者のそれだった。

護廷で言うところの隠密機動の着用しているそれにも少し似ていて、動き易さ等を重視された作りになっている。

しかし此处で一つ大きな問題がある。

檜佐木は武器を持っていないのだ。

卍解の種類は色々あるが、武器を持たない卍解など前例が無い。

斬魄刀の卍解は殆どの場合、能力の強化や付加など。

たまに要のその様に武器自体には効果が発揮されず、敵の感覚などを封じる能力を得る事があるのだが。

仮に檜佐木の纏う忍び装束が卍解の完成形だとしよう。

其処から予想される能力は素早さを基本とした身体能力の向上。

だが、卍解は“発動するだけ”で身体能力や霊圧が五倍から十倍まで増幅する為、この線は薄い。

さらに先程檜佐木は『筋肉の鎧を貫く程の攻撃』をすると言っていた。

それは白打での攻撃か、否、檜佐木はしっかりと武器を持っていた。

風刃と言う名の武器が。

「鬼気影刃・風殺死……」

卍解が完了し、その名前を呟く。

檜佐木がスツと手を前にやるとテスラの厚い筋肉で覆われた肉体から大量の血液が噴射する。

「ぐっ……」

テスラは何が起こったのか分からずに、とりあえず距離をとって様子を見る。

「見えねえか？ そうだろうな。お前を傷つけているのは目に見えない、風の刀……」

檜佐木はその言葉の後にそして、と付け加える。

「命を刈り取り取っていく……恐ろしい風だ」

そう言った瞬間、テスラの右腕が切り落とされて地面に落ちる。

落ちた腕が砂のようにサラサラと消えていき、テスラは恐怖に表情を歪める。

「怖えか？ そうだろうな。死ぬ時は皆怖え……じゃあな優男。安らかに眠ってくれ」

テスラの体は　　バラバラに切り刻まれた。

その残骸は先程消えていった右腕と同じ様に消滅していった。

「……ちっ！！」

檜佐木の霊圧だけがのこり、テスラの霊圧は跡形もなく消滅した。

それは言うまでもなくテスラが敗北したという事であり。ノイトラはそれに対して憎々しげに舌打ちをした。

「つかえねえ野郎だ！」

しかしそれは部下の死を悔やむ物では無く、副隊長如きに殺られた事への侮蔑だった。

尤も、檜佐木は副隊長の席に座っている物の、戦い方と相手さえ選べば下位の十刃さえ倒せる實力を持っている。

それこそ一角や恋次には半歩程劣るものの、隊長格にだってなれる程の實力を持っている。

尤も、檜佐木は一角や恋次同様、卍解を習得した為に推薦さえあれば何時でも隊長になれるのだが。

「トウ！！」

要が渾身の力を込めてノイトラの顔面を攻撃する。

ノイトラは刀剣解放をした為、鋼皮の硬さも倍増していて、六本の

腕が何より厄介だ。

だが其処は要も護廷の隊長である事から、隙を狙っては攻撃を当てている。

尤も、ノイトラの鋼皮には僅かなダメージしか与える事が出来ないのだが。

「オラオラオラア！効かねえぞ統括官様よお！？」

ノイトラは自分の腕と同じ数の大鎌を振るって要へ反撃を繰り出す。「つつ！」

要はそれを刀で受け、後ろに下がっている内に建物の壁にぶつかりそうになったので空中に飛ぶ。

上空に逃げて体勢を立て直した要はノイトラが追跡してくるのを

即ち今から発動する卍解の射程距離に入るのを待ち、自分目の前に来た瞬間卍解を発動する。

清虫終式・閻魔蟋蟀は以前海燕にも使用した事があるのだが、その能力は能力の発動範囲にいて、清虫に触れていない物の視覚・聴覚・嗅覚・霊圧感知能力を奪う物だ。

「ちつ……これがあるのを忘れてたぜ」

ノイトラは目が見えない事を確認するかの様に辺りをキョロキョロと見回す。

試しに虚閃を放ってみるが、撃てたかどうか確認する術は自身の残された感覚のみで、視認する事は出来ない。

「終わりだ……ノイトラ・ジルガ！！」

要は聞こえるわけでもないが、そう叫び、ノイトラに刀を突き刺す。そう、突き刺したのだ。

幾ら卍解で基本性能が強化されているとは言え、ノイトラの鋼皮の硬さは十刃の中でも随地を誇る物だ。

それがこうも容易く突き刺す事が出来るだろうか、出来るとしたならば　自分で鋼皮の硬さを緩めた時だけだ。

「はっ、随分と簡単に攻略出来ちまったな、オイ？」

ノイトラは自身の腹に突き刺さる要の刀を掴んだまま、武器を使わ

ずに殴り掛かる。

破面の中で鋼皮の硬さが他の者より優れている者はただ殴るだけで大きなダメージを与えろと言うが、今ノイトラがやったのは正にそれで、十刃一硬い鋼皮を持つという事は破面の中で一番硬い鋼皮という事であり、要が受けたダメージは計り知れない。

「お……邪魔くせえ暗闇が解けちまったな」

卍解が解けた　　当然だが、要は自分で卍解を解いた訳では無い。

使用者の意思に反しての卍解の解除は使用者が卍解を維持するだけの余力が残されていないという事だ。

それは霊力が尽きた場合　　若しくは使用者が瀕死の状態であると言う事を表している。

要はノイトラに蹲っている、今回は後者である事が伺える。

その表情から伺えるのは辛うじて空中に留まっているという状態で、少しでも気を抜けば地面に墜落してしまうだろう。

「何だ、立てねえのか？オラ、俺が立たしてやんよ」

ノイトラは要の長い髪を掴んでもう一発殴る。

「ぐう！！」

吐血して苦痛に表情を歪める要を見てノイトラはニヤリと嗤う。

「そつだ……このまま藍染のところに連れってくか……藍染サマの事だ。きつとえげつない殺し方をするんだらうぜ」

ノイトラが要の髪を掴みながらその場を立ち去ろうとすると一つの霊圧がノイトラの足を止めた。

それは卍解を解除した檜佐木で、手には始解時の風死が握られている。

「隊長を離してもらおうか」

「はっ。おもしれえな。クズを、もっと弱いクズが助けんのか？こりゃ笑い話だな」

ノイトラはそう言った後、一瞬で檜佐木の後ろに回った。

「おせえ」

激しい打撃音が辺りになり響いた

風の兵は正を解する、鈴虫は危機に陥る（後書き）

忍び装束にする意味あったの？ってツツコミが来た時の為のいい訳
檜左木に忍者のコスプレさせたかっただけです！！以上！！

自分に絵の才能があったらイラスト化してるんですけどね。

さて要がピンチです。

今更ですが、要は原作よりも弱い設定です。

まあ帰刃出来ませんからね。

九番隊は新旧が揃う

要は以前この様な事で思い悩んだ事がある。

誰かを傷つけ、血を流させ辿り付いた先に何が見えるものがあるのか？あつたとしても其処に辿り着く過程が汚れすぎている。

それを自分の部下や後輩を歩かせるには些か気が進まない。

そしてその後こう思った。

どうせなら、次の世代の死神達にはなるべく綺麗な道を歩かせたい物だ。

だが、それを実行する道は非常に険しく、途中には幾つもの険しい山々がある事だろう。

その険しい山を登り切るには武人程の精神力と魔人並の体力が必要と思われる。

死神の中でも小悪党丸出しの三下に害虫の如き戦闘狂共。

極めつけは死神や人間の味を覚えた虚達と来たものだ。

要の歩む道は途轍もなく

険しい。

檜左木とノイトラの間に行った打撃音はノイトラが檜左木を襲ったものではなく、勿論檜左木がノイトラを襲った物でもない。

嘗て九番隊の隊長、副隊長を務めた二人、六車拳西と久南白がノイトラを制止した時の打撃音だった。

「誰だデメエは？」

ノイトラが怪訝そうな表情を浮かべるとまず白の方が名を名乗る。

「白だよ、よろしくねっ」

可愛くウィンクをして白打の構えを取った白の隣に拳西が並び、コンバットナイフの様な斬魄刀を構える。

「六車拳西だ」

檜左木は要を介抱しながら先程の二人を見ていた。

片方は六車拳西、自分は彼に憧れて死神を目指した。
あの時、虚に襲われていた自分を救ってくれた拳西の勇姿は今だ記憶に色濃く焼き付いている。

そしてもう片方は久南白、彼女に関する記憶は余り残っていないが、副隊長であつたという事は記録を見て知っていた。

「拳西さん……」

檜左木は静かに、小さく呟いた。

ノイトラは月夜の光を浴びた人狼の様に狂い、遠吠えのような笑い声を上げた。

まるで今の狂った姿が本来の姿とでも言うように、口角が三日月の様に吊り上がったのだ。

「ハハハハハハハッ！ テメエ等はさっきの裏切り者達より強そうだ！ おもしろえ……俺と遊ぼうぜ！！」

六本の腕をワキワキと動かすノイトラの姿は蜘蛛と蠍を合体させた様な姿をしていて、とても気味の悪いものだ。

尤も、それはゾマリやザエルアポロの刀剣解放後の姿に比べたら幾分マシなのだが。

「うるせえ野郎だ」

拳西がキツとノイトラを睨みつけるとその表情が強ばった。

睨みつけただけで身を竦ませられる拳西の威圧感はその道の人間に向けても同様に硬直させる事が出来るだろう。

尤も、相手はその道の人間以上の修羅場を潜ってきた戦闘狂故、拳西はノイトラの肉体に傷をつけるより、戦う気持ちを折る戦いをしなければいけない。

狂った猛獣と戦うという事はそういう事だ。

「白、手え出すなよ……」

拳西は喚く白を押し退けてノイトラの前へ足を踏み出す。

「来いよ獣野郎。少し仕付けが必要みてえだな」

拳西の言葉を聞いてノイトラの米神がピクリと反応し、表情がキツ

イもの変わる。

「獣……だと」

ノイトラの脳裏に、嘗て自分をコケにした女の破面が蘇る。

自分の事を戦士ではなく獣だと言い、戦う価値すら無いと罵った。

だから自分は一人の十刃落ちと共謀して奴を十刃の座から引きずり下ろした。

新しく入ってきた十刃も女性だった事には怒りが湧いたが、あいつは自分に興味が無い様だったから此方も無視スルーした。

「獣……獣、獣、獣！！どいつもこいつも俺の事を……」

自分の頭を掻き毟る様に掴み、髪の毛を引っっこ抜く。

引っっこ抜くと言ってもヘアスタイルに問題が生じる程の量では無く、その量が極僅かだ。

息を荒立て、拳西を睨む。

「フウー、フウー……」

獣、という言葉に反応して怒る様子は、皮肉にも猫科の猛獣をイメージさせる。

「死にやがれ……」

ノイトラの血を求めて刃を振るう様は主を失った妖刀の様に禍々しい靈圧を放っていた。

その妖刀に触れたのが並の死神ならば一溜りもないだろう。

それは命の汚染、凡ゆる生き物が恐怖する出来事、即ち死だ。

「俺は死なねえから……テメエが死んだらどうだ？」

拳西はそういつと瞬歩でノイトラの目の前に移動した後、スウツと拳を向ける。

拳西の怒涛の様な拳の乱舞は相手に反撃する暇を与えず、自分のペースを乱さない。

鍛え上げられた拳は喻えるなら拳銃、それも何十発もの連発が可能の、だ。

ノイトラは拳撃の痛みを堪える事なく、豪快に吹っ飛んだ。さらに相手の背中が地につく前に腹部へ踵落としを放つ。

「ガハッ……」

口内から血を噴出したノイトラは響転でその場から離れ、一旦距離を取る。

手の平で口から流れ出る血を拭くとそれを拳西に向ける。

王虚の閃光の構えだ。

手の平から放出される極太の虚閃は拳西の方に向かっていくが、拳西は避けようとしぬい。

後ろには倒れた要とそれを介抱する檜左木がいたからだ。

拳西が避ければ、すぐに移動出来ない状態の二人は跡形もなく吹き飛ばされるだろう。

仮面を装着した拳西は両手に霊圧を溜めるとそれを球状にする。

そして王虚の閃光に突き刺すとその破壊の閃光は僅かなダメージを拳西に与えて霧散していった。

「どうした、もう終わりか？」

拳西の心を折る為の防御はノイトラ表情を情けないものに変える。

「じゃあ……終わりだな」

拳西の拳はノイトラの頬を捉えてビルの向こうへと吹っ飛ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3718y/>

強き燕は二度羽ばたく

2012年1月4日08時47分発行